

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第37冊

鹿田遺跡 15

— 第12・27次調査 —

(エネルギーセンター新営・自家発電装置新設)

2021年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

岡山大学鹿田キャンパスにおける本学の発掘調査は1983年度に始まり、その後約40年間にわたって断続的に行われています。調査対象となった鹿田遺跡は、現在では弥生～中世の集落遺跡として地域を代表する遺跡となり、特に古代～中世では、藤原摂関家の殿下渡り領である「鹿田庄」との関係で注目されています。

本報告書は2000～2001年度に実施した鹿田遺跡第12次調査の報告書です。調査地点は鹿田キャンパスの南東部の一角にあたりますが、周辺の既往調査地点を加えると、弥生時代～中世の人々が暮らした居住空間の南東端付近の状況を面的に捉えることができるようになりました。一つの遺跡を対象に、発掘調査を重ねてきた本学ならではの成果といえるかもしれません。

鹿田遺跡は、周辺地域の中でも最も早い段階に中世集落を形成する遺跡の一つとして重要な位置を占めています。本調査では、その開始時期にあたる11世紀に始まり12世紀で姿を消す屋敷地が見つかりました。さらに、本地に集落を形成するにあたって大規模な土地造成が行われたことや、13世紀のはじめには、集落内で屋敷地配置が再編されたことを示す貴重なデータが得られたことは、大きな成果といえるでしょう。それは同地で営まれた中世集落の成立過程を景観変化とともに伝えてくれます。また、これまで本遺跡では岡山平野で最も南に位置する弥生時代の水田が報告されていますが、それは標高0.5m前後という低い環境にあります。本調査では、そうした環境下で盛んに排水を意識したかのような状態の溝群が、水田城の端に高まりを形成していました。こうした遺構と環境との関係は、当時の水田耕作の様子を探る手がかりになるかもしれません。

そのほかにも、鹿田遺跡では資料に乏しい時期である飛鳥時代の遺構・遺物や平安時代の軒平瓦の存在は、今後の研究に期待がふくらみます。

調査終了後、調査担当者が転出する中で報告書刊行までに時間を要しましたが、こうした成果が、皆様にとって今後の研究の一助になれば幸いです。

本報告書の作成にあたっては、新型コロナウイルス感染症の影響により、樹種同定の作業に支障がでることとなりました。その成果については、期を改めて研究報告として発表する予定です。

最後になりましたが、本報告書作成に当たっては、学内外の多くの方々から多大なご支援をいただきました。また、発掘調査時に様々な形でご協力いただいた関係者の方々にも合わせて、感謝申し上げます。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長 渡邊和良
副センター長 山本悦世

目 次

第1章 歴史的・地理的環境	1
第1節 遺跡の位置と周辺遺跡	1
第2節 鹿田遺跡	3
1. 構内座標の設定	3
2. 遺跡の概要	3
第2章 調査に至る経緯と概要	9
第1節 調査に至る経緯と経過	9
1. 調査の経緯	9
2. 調査の体制	9
a. 第12次調査	9
b. 第27次調査	10
3. 調査経過	10
a. 第12次調査	10
b. 第27次調査	11
第2節 調査の概要	野崎貴博 11
第3章 調査の記録	13
第1節 調査地点と層序	野崎 13
1. 調査地点の位置	13
2. 層序	13
3. 地形	19
第2節 弥生時代～古墳時代初頭の遺構・遺物	20
1. 概要	20
2. 高まり	20
3. 井戸	23
4. 土坑	24
5. 溝	30
6. 土器だまり	37
第3節 古代の遺構・遺物	42
1. 概要	42
2. 溝	44
3. 耕作痕	47
第4節 中世前半の遺構・遺物	48
1. 概要	48
2. 掘立柱建物・柱穴列・ピット群	岩崎志保 48
3. 井戸	野崎 55
4. 土坑	69
5. 溝	72
第5節 近世の遺構・遺物	80
1. 概要	80

2. 土坑	80
3. 段・畦畔	92
第6節 包含層ほかの出土遺物	93
第4章 自然科学的分析	96
1. 樹種鑑定・漆膜分析・顔料分析	財元興寺文化財研究所 96
第5章 第12・27次調査成果のまとめ	野崎 101
遺構一覧表	103
写真図版	

挿図目次

第1章		図25 土坑10	28
図1 周辺遺跡分布図	2	図26 土坑11・出土遺物	29
図2 発掘調査地点と構内座標	4	図27 土坑12	29
第2章		図28 土坑12出土遺物	30
図3 調査地点の名称	9	図29 溝1断面	30
図4 調査風景	11	図30 溝2断面	30
図5 検出遺構全体図	12	図31 溝3断面	31
第3章		図32 溝4断面	31
図6 調査地点位置図	13	図33 溝5断面	32
図7 調査区土層断面1)	15	図34 溝5出土遺物	33
図8 調査区土層断面2)	16	図35 溝6・7断面	33
図9 調査区土層断面3)	17	図36 溝8断面	34
図10 調査区土層断面4)	18	図37 溝9断面	34
図11 地形の変遷	19	図38 溝10・11断面	34
図12 弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構全体図	21	図39 溝12・13断面	35
図13 古墳時代初頭の高まり	22	図40 溝14断面	35
図14 井戸1	23	図41 溝15断面・出土遺物	36
図15 井戸1出土遺物	24	図42 溝16断面	36
図16 土坑1	24	図43 溝17断面	36
図17 土坑2	25	図44 土器だまり1	37
図18 土坑3	25	図45 土器だまり1出土遺物(1)	38
図19 土坑4	25	図46 土器だまり1出土遺物(2)	39
図20 土坑5	26	図47 土器だまり1出土遺物(3)	40
図21 土坑6	26	図48 土器だまり1出土遺物(4)	41
図22 土坑7	26	図49 土器だまり1出土遺物(5)	42
図23 土坑8	27	図50 古代の遺構全体図	43
図24 土坑9	27	図51 溝18・出土遺物	44

図52	溝19断面	44	図97	溝36断面・出土遺物	78
図53	溝19遺物出土状況・出土遺物	45	図98	溝37断面	78
図54	溝20断面・出土遺物	45	図99	溝38断面	79
図55	溝21断面	46	図100	溝39断面	79
図56	溝22断面	46	図101	溝40断面	79
図57	溝23断面	46	図102	溝41・出土遺物	80
図58	溝24断面・出土遺物	47	図103	近世の遺構全体図	81
図59	溝25断面	47	図104	土坑16～18・土坑16出土遺物	82
図60	溝26断面	47	図105	土坑19	83
図61	中世前半の遺構全体図	49	図106	土坑20	84
図62	中世前半の遺構：調査区南西	50	図107	土坑21	84
図63	掘立柱建物1	51	図108	土坑22	85
図64	掘立柱建物・柱穴列出土礎石	52	図109	土坑23	86
図65	柱穴列1	53	図110	土坑24・25	86
図66	柱穴列2	54	図111	土坑26	87
図67	ビット出土遺物	54	図112	土坑27・28・出土遺物	87
図68	井戸2	55	図113	土坑29・出土遺物	88
図69	井戸2出土遺物	56	図114	土坑30	89
図70	井戸3	57	図115	土坑31	89
図71	井戸3出土遺物	58	図116	土坑31出土遺物	90
図72	井戸4	59	図117	土坑32	90
図73	井戸4出土遺物(1)	60	図118	土坑33・出土遺物	91
図74	井戸4出土遺物(2)	61	図119	土坑34	91
図75	井戸4出土遺物(3)	62	図120	土坑35	92
図76	井戸5	63	図121	土坑36	92
図77	井戸5出土遺物(1)	65	図122	畦畔・段断面	93
図78	井戸5出土遺物(2)	66	図123	包含層出土遺物(1)	94
図79	井戸5出土遺物(3)	67	図124	包含層出土遺物(2)	95
図80	井戸5出土遺物(4)	68	第4章		
図81	土坑13	69	図125	木材組織	96
図82	土坑13出土遺物	70	図126	漆塗り榿塗膜断面	97
図83	土坑14・出土遺物	71	図127	漆塗り榿	
図84	土坑15	72		黒色部分のXRFスペクトル	98
図85	溝27断面・出土遺物	72	図128	漆塗り榿	
図86	溝28断面	73		花紋様赤色部分のXRFスペクトル	98
図87	溝28出土遺物	74	図129	漆塗り榿	
図88	溝29断面	74		金線部分のXRFスペクトル	99
図89	溝29出土遺物	75	図130	漆塗り榿 金線周囲の赤味があった	
図90	溝30断面	75		紋様部分のXRFスペクトル	99
図91	溝31断面	75	図131	漆塗り榿の文字	100
図92	溝32断面	76	第5章		
図93	溝33断面	76	図132	鹿田地区南部における	
図94	溝34断面	76		弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構	101
図95	溝34出土遺物	77	図133	鹿田地区南部における	
図96	溝35断面・出土遺物	77		古代末～中世前半の遺構	102

表 目 次

第3章					
表1	掘立柱建物・柱穴列構成柱穴一覧	51	表4	井戸5出土土器一覧	64
表2	未掲載礎石一覧	53	表5	井戸5出土板材計測表(未掲載分)	69
表3	井戸4出土板材計測表(未掲載分)	61	第4章		
			表6	塗膜断面および顔料分析の結果	97

図 版 目 次

図版1	弥生時代～古墳時代の遺構全景	図版22	中世前半の井戸(5)
図版2	古墳時代初期の井戸(1)	図版23	中世前半の井戸(6)・土坑
図版3	古墳時代初期の井戸(2)・土坑(1)	図版24	中世前半の溝(1)
図版4	古墳時代初期の土坑(2)	図版25	中世前半の溝(2)
図版5	古墳時代初期の土坑(3)	図版26	中世前半の溝(3)
図版6	古墳時代初期の土坑(4)	図版27	中世前半の溝(4)
図版7	古墳時代初期の土坑(5)	図版28	中世前半の溝(5)
図版8	古墳時代初期の土坑(6)ほか	図版29	近世の遺構全景
図版9	古墳時代初期の土器だまり1(1)	図版30	近世の土坑(1)
図版10	古墳時代初期の土器だまり1(2)	図版31	近世の土坑(2)
図版11	弥生～古墳時代初期の溝(1)	図版32	近世の土坑(3)
図版12	古墳時代初期の溝(2)	図版33	近世の土坑(4)
図版13	弥生～古墳時代初期の溝(3)	図版34	土器だまり1出土遺物(1)
図版14	飛鳥時代の溝(1)	図版35	土器だまり1出土遺物(2)
図版15	飛鳥時代の溝(2)	図版36	土器だまり1出土遺物(3)・古代の溝出土遺物(1)
図版16	中世前半の遺構全景	図版37	中世の井戸・土坑出土遺物
図版17	中世前半の掘立柱建物・柱穴列	図版38	中世の溝出土遺物・瓦・土製品・石器
図版18	中世前半の井戸(1)	図版39	礎石・金属器
図版19	中世前半の井戸(2)	図版40	木製品(1)：井戸4
図版20	中世前半の井戸(3)	図版41	木製品(2)：井戸5
図版21	中世前半の井戸(4)	図版42	編組製品：編籠

例 言

1. 本書は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学エネルギーセンター新館・自家発電装置新設に伴って実施した廃田遺跡第12・27次調査の発掘調査報告書である。調査地点は、岡山市北区鹿田町2丁目5番1号に所在する。発掘調査地点の鹿田地区構内座標はCN29-CW44区にあたる。期間は第12次調査が2000年10月2日～2001年5月10日、第27次調査が2017年10月10日～11月10日である。調査面積は第12次調査が1897㎡、第27次調査が34.5㎡である。
2. 発掘調査および報告書作成は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会の指導のもとに行われた。委員諸氏に御礼申し上げる。
3. 本書作成にあたり、石材同定については鈴木茂之氏（岡山大学名誉教授）、墨書土器の判読については今津勝紀氏・東野将伸氏（岡山大学大学院社会文化科学研究科）にご教示・ご協力いただいた。
4. 発掘調査時の遺構実測・写真撮影は、調査体制の項で記載する調査研究員・技術補佐員が行った。
5. 報告書作成に当たっての主な担当は以下の通りである。
<遺物>土器・土製品・石器・金属器：(実測・浄書・観察表) 山本悦景・西本尚美・大久保雅子・有賀紅美・小野素子
土製品：(実測・浄書・観察表) 野崎貴博・有賀・小野
写真撮影：南健太郎
<遺構>浄書：山口隆治・野崎・有賀・小野
<データ整理>井上佐智・小野
6. 本書の執筆分担は目次および担当部分の文末に示した。
7. 編集は山本悦景（副センター長）・清家章（調査研究室長）の指導のもと、野崎が担当し、岩崎志保の協力を得た。
8. 発掘調査の概要は『岡山大学構内遺跡調査研究年報18』、『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2017』に一部報告しているが、本書をもって正式なものとする。
9. 本書で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1/25000の地形図「岡山北部」と「岡山南部」(平成6年度発行)を合成して使用したものである。
10. 本書に掲載した記録・出土遺物は全て本センターで保管している。

凡 例

1. 本書で用いる高度値は海拔表高であり、方位は国土座標V座標系（日本測地系）の座標北である。
2. 遺物番号は遺構別に番号を付すが、土製品にはT、石器にはS、木器にはW、金属器にはMを付して通し番号とする。
3. 遺構に関するデータは一覧表にまとめた。
4. 拓本は、内・外面を掲載する場合は、適宜、内・外を示した。片面の場合は外面を基本とした。
観察表の表記基準は以下の通りである。
①粘土は、微砂：砂粒径0.5mm以下、細砂：0.5～1mm、粗砂：2mm以上
②法量の単位は「cm」である。数値の差が3mm以下の場合は、平均値とし、以上の場合は併記した。
5. 土層注記では鉄分をFe、マンガンをMnと表記した。一般的なのは省略している。また、下記の記号を用いて含有量を示している。
○：顕著な含有、○：含有、△：少量の含有

第1章 歴史的・地理的環境

第1節 遺跡の位置と周辺遺跡

鹿田遺跡は、岡山市街地の南部に位置する岡山大学鹿田地区（岡山市北区鹿田町2丁目5番1号）のはほぼ全域にわたって広がる縄文時代～近世の複合遺跡である。その位置は、岡山県中央部を走る旭川が形成した岡山平野の南端部にあたり、河口近く形成された三角州帯上に立地している。現在の旭川は、本遺跡の東方約1kmを児島湾に向けて南流しているが、かつては岡山市街地の北東から南西にかけて幾筋かの河道となって潮流していたと考えられる。現在、鹿田遺跡は海岸線から北に約7.5km程度の距離を有するが、中世以前には、遺跡の南側近くに海の影響が強く及んでいたことが想定される。

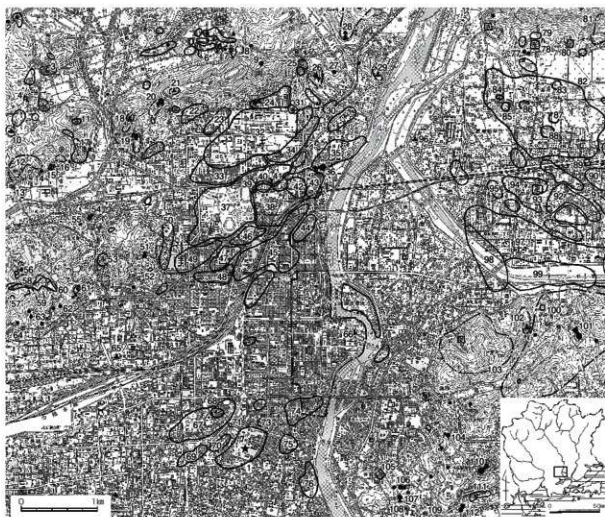
遺跡周辺における人間の生活は旧石器時代にまでさかのぼり、旭川を挟んで対岸の操山山塊ではナイフ形石器が採集されている¹⁾。縄文時代では、本遺跡が所在する平野部北端を区切る半田山丘陵南端に位置する朝寝鼻貝塚で前期の生活痕跡が確認されている²⁾。こうした人間活動が本格化するのは縄文時代後期前葉以降である。明確な遺構を伴う代表的な遺跡をあげると、後期前葉～同中葉の堅穴住居や貯蔵穴群などが残る津島岡大遺跡³⁾、旭川を挟んで後期中葉の貯蔵穴群などが調査された百間川沢田遺跡⁴⁾があげられる。いずれも丘陵付近に限定された地域であるが、これらの集落は、一時的な中断を挟みながらも、弥生時代前期に向けて継続する。

弥生時代前期では、津島岡大遺跡³⁾・津島遺跡⁵⁾や百間川沢田遺跡⁴⁾・原尾島遺跡⁶⁾において水田遺構が調査されている。弥生時代早期とされる津島江道遺跡⁷⁾の水田時期についての評価は確定していないが、水稲農耕の情報が岡山平野地域にかなり早い段階でもたらされ、受容されていたことは確実であろう⁸⁾。

集落では、前期前半は津島遺跡に限定的であるが、その後、南方遺跡⁹⁾・雄町遺跡¹⁰⁾・百間川沢田遺跡⁴⁾・同原尾島遺跡⁶⁾などが出現する。さらに数が増加していくのは中期以降である。中期～後期の沖積作用の進行に伴う微高地形成と連動するように新たな集落が展開する。その結果、旭川西岸域における遺跡の分布は、半田山と京山丘陵のもとに広がる北群と臨海性の高い南群に二分される。前者では、前期末葉～同中期前葉の代表的集落である南方遺跡から絵図遺跡¹¹⁾そして上伊福九坪遺跡¹²⁾へと集落域は拡大的に中心地を移動し、後期には津島遺跡や伊福定国前遺跡¹³⁾などを含めた広がりの中核的集落が形成される。後者では、中期後葉に鹿田遺跡¹⁴⁾そして後期には天瀬遺跡¹⁵⁾が加わり、遺跡群のまとまりをみることができ。旭川東岸では、雄町遺跡¹⁰⁾のように前期から継続的に後期に至る遺跡が多い特徴が指摘されるが、その平野の南端に位置する百間川遺跡群では、中期に同兼基・今谷遺跡¹⁶⁾、後期に同原尾島遺跡へと中心が移動する。

旭川下流域における墳墓は、弥生時代末～古墳時代前期には、平野部周囲の丘陵あるいは山塊上に弥生墳丘墓や前方後円（方）墳が数多く築かれ、複数の首長系列の存在を示唆する。鹿田遺跡が立地する旭川河口付近の古墳時代の首長系列としては、遺跡を見下ろす操山山塊の尾根上に位置する操山109号墳・網浜茶臼山古墳¹⁷⁾の系列を当てることができる¹⁸⁾。造墓活動は古墳時代前期後半頃に最盛期を迎え、神宮寺山古墳¹⁹⁾、金蔵山古墳²⁰⁾、淡茶臼山古墳²¹⁾という全長150m級の前方後円墳を生み出す。それらを最後に、前方後円墳の築造は急速に衰退するが、古墳時代後期に入ると周囲の山塊に中小の横穴式石室墳が群集して築かれるようになる。

古墳時代前期の集落は、百間川遺跡群や津島遺跡⁵⁾帯に認められるように、弥生時代後期からの状況が、遺跡・遺構数の増加傾向を伴いつつ踏襲される。しかし、中期以降には規模の縮小傾向が一部の地域で指摘される。特に、旭川西岸では前述の南群に顕著に認められ、海側に近い鹿田遺跡周辺では遺跡は消滅する。旭川東岸の百間川遺跡群周辺でもそうした傾向が認められる。鹿田遺跡のように古墳時代前期まで安定した生活拠点であった集落の衰退には、古墳にみる首長系列の消長と軌を一にする状況をみてとれる。



- | | | | |
|-----------------------|-------------------------|-------------------------|-----------------------|
| 1. 鹿田遺跡 (縄文～近世) | 31. 朝霧鼻貝塚 (縄文前～後期) | 60. 正野田古墳群 (古墳後期) | 88. 中井・南三反田遺跡・古墳群 |
| 2. 富原西側古墳 (古墳) | 32. 津島岡大遺跡 (縄文中期～近世) | 61. 岡西高松山古墳群 | 89. 藤野貝塚 (弥生～古墳) |
| 3. 荒津御寺 (飛鳥～平安) | 33. 津島新野遺跡 (弥生) | 62. 若百古墳 (古墳後期) | 90. 乙之島遺跡 (弥生) |
| 4. 上ノ成塚跡 (奈良) | 34. 津島江道遺跡 (縄文～近世) | 63. 乙之島古墳 (古墳後期) | 91. 岡遺跡 (弥生) |
| 5. 矢野城塚寺 (奈良) | 35. 北方長田遺跡 (弥生～近世) | 64. 貝塚 (不明) | 92. 赤田東遺跡・岡遺跡 (弥生～室町) |
| 6. 佐良池古墳群 (古墳後期) | 36. 神宮寺山古墳 (古墳前期) | 65. 高柳城跡 (室町～近世) | 93. 幡多塚寺 (飛鳥～平安) |
| 7. 藤跡池古墳群 (古墳後期) | 37. 津島遺跡 (弥生～近世) | 66. 岡山城跡 (室町～近世) | 94. 赤田西遺跡 (弥生～室町) |
| 8. 奥池古墳群 (古墳後期) | 38. 北方上道遺跡地 (弥生～近世) | 67. 大供本町遺跡 (古代～近世) | 95. 翠尾山遺跡 (弥生～室町) |
| 9. 戸ノ上山古墳 (古墳中期?) | 39. 北方下道遺跡 (弥生～室町) | 68. 大供東遺跡 (弥生～室町?) | 96. 中島城跡 (室町) |
| 10. 蜂頭城 (室町) | 40. 北方横田遺跡 (弥生～室町) | 69. 鹿田本町遺跡 (奈良) | 97. 百間川遺跡群 (縄文～近世) |
| 11. 坊山遺跡 (古墳～室町) | 41. 北方中道遺跡 (弥生～室町) | 70. 鹿田遺跡 (類立岡山病院) 遺跡 | 98. 百間川原尾山遺跡 |
| 12. 中瀬津古墳群 (古墳後期) | 42. 北方中道遺跡 (弥生～近世) | (鎌倉～室町?) | (縄文中期末～近世) |
| 13. 貝塚 (不明) | 43. 北方麓ノ内遺跡 (弥生～近世) | 71. 敷布池 (旧名: 大供遺跡) (弥生) | 99. 百間川内田遺跡 (縄文中期～近世) |
| 14. 若百八幡堂古墳 (古墳) | 44. 北方下道遺跡 (弥生～近世) | 72. 大供中道遺跡 (弥生～室町) | 100. 藤山219号遺跡 (旧石塚) |
| 15. 東瀬津貝塚 (不明) | 45. 坂田遺跡 (弥生～平安) | 73. 敷布池 (弥生) | 101. 金藏山古墳 (古墳前期) |
| 16. 東瀬津1号・2号墳 (古墳後期) | 46. 坂田遺跡 (弥生～平安) | 74. 天樂遺跡 (弥生～近世) | 102. 砂神寺城跡 (戦国) |
| 17. 首部 (白山神社) 首塚 | 47. 上伊福遺跡 (弥生・古墳) | 75. 新道遺跡 (奈良～近世) | 103. 藤山古墳群 (古墳後期) |
| (鎌倉～室町?) | 48. 上伊福 (立花) 遺跡 (弥生～室町) | 76. 二日市遺跡 (弥生～近世) | 104. 藤山03号墳 (古墳前期) |
| 18. 高山城 (新+追加) 跡 (室町) | 49. 上伊福遺跡・伊福定因寺遺跡 | 77. 曾入塚古墳 (古墳後期) | 105. 瀬戸塚寺 (飛鳥～平安) |
| 19. 七ノ成墳丘・古墳群 (弥生～古墳) | (弥生～近世) | 78. 曾入塚寺 (飛鳥～室町) | 106. 瀬戸茶臼山古墳 (古墳前期) |
| 20. 都日坂墳丘・古墳群 (弥生～古墳) | 50. 上伊福西遺跡・尾封神社南遺跡 | 79. 曾入塚寺堂跡 (奈良) | 107. 藤山09号墳 (古墳前期) |
| 21. 平山山城 (戦国) | (弥生～平安) | 80. 浄土寺 (奈良～室町) | 108. 藤山202号遺跡 (平安～奈良) |
| 22. 津島原居遺跡 (古墳～室町) | 51. 津島古墳 (古墳前期) | 81. 湯沼古墳群 (古墳前期) | 109. 貝塚 (鎌倉～室町?) |
| 23. お塚 (様) 古墳 (古墳中期) | 52. 砂神寺遺跡 (弥生) | 82. 藤田岡付岡遺跡 | 110. 赤茶臼山古墳 (古墳前期) |
| 24. 津島東遺跡 (縄文～室町) | 53. 南津寺 (奈良?)～室町) | 83. 北ノ上遺跡 (弥生～室町) | 111. 赤茶臼山古墳 (弥生～室町) |
| 25. 津島東3丁目墳・地蔵(弥生・古墳) | 54. 南津古墳 (古墳前期) | 84. 藤田岡付跡 (奈良～平安) | 112. 大塚山丘陵 (鎌倉～室町) |
| 26. 一本松古墳 (古墳中期) | 55. 十二本塚古墳 | 85. 藤田岡付跡 (南園長) 遺跡 | |
| 27. 不動堂古墳 | 56. 山崎城跡 (室町～江戸) | (弥生～鎌倉) | |
| 28. 前古墳群 (古墳前期・後期) | 57. 矢塚山西古墳群 (古墳後期) | 86. 南古市場遺跡 (奈良～平安) | |
| 29. 砂尻山城跡 (戦国) | 58. 矢塚山西遺跡 (弥生) | 87. 八ヶ (高島小) 遺跡 (奈良～室町) | |
| 30. 翠田遺跡 (弥生) | 59. 矢塚山東古墳群 (古墳後期) | | |

図1 周辺遺跡分布図 (縮尺1/50,000、1/3,750,000)

古代国家完成期の政治状況を反映する国府や寺院関連遺跡については、旭川東岸における発掘調査成果から、備前国府の関連官衙と考えられるハガ遺跡²⁰、創建期が飛鳥時代にさかのぼり平城宮式瓦も出土した賞田廃寺²¹、総柱建物や道路あるいは「上三宅」や「市」が書かれた墨書土器・「官」の刻印須恵器などが出土した百間川米田遺跡²²などがあげられる。また、旭川河口付近では、平城宮式瓦が確認されている網浜廃寺²³が知られる。その対岸では、8世紀の火葬遺構などが報告された新道遺跡²⁴、その西500mに8世紀後半の井戸から絵馬が出土した鹿田遺跡²⁵が続く。こうした状況の背景にみえてくる旭川河口を介した人々の交流が、本道跡と関わり深い鹿田庄成立の重要な要因となったと想定できる。

平安～鎌倉時代には、鹿田遺跡周辺は、地割り方向を手がかりにした歴史地理の研究²⁶や発掘調査成果から摂関家殿下渡領の一つである鹿田庄の故地に比定されている。鹿田遺跡の詳細は後述するが、同地域を構成する新道遺跡では12世紀後半頃の井戸から「□□御庄久延弁」と書かれた木簡が出土し、また、南東600mの旭川河口岸に位置する二日市遺跡でも井戸などが確認されている²⁷。旭川東岸では、百間川遺跡群²⁸において該期の集落遺跡が知られている。こうした状況は、鎌倉時代における溝の大形化などにみる集落景観の変化を経て室町時代にも概ね継続する。

江戸時代には、岡山城や城下町の整備に伴う集落の再編、あるいはその後の海浜部での大規模な干拓によって、鹿田遺跡の状況は大きく変化する。海岸線は南へと後退し、鹿田遺跡周辺は屋敷地から耕地が広がる農村地帯へと変貌を遂げる。その後、1921（大正10）年に、岡山大学医学部および同附属病院の前身である岡山医学専門学校や岡山県立病院が建設された。これに伴って、遺跡は厚さ0.6～1mの造成土に覆われた。現在、都市開発の進行によって遺跡周辺は市街地となっている。

第2節 鹿田遺跡

1. 構内座標の設定

本センターでは、岡山大学鹿田地区構内において、周囲の市街地および構内建物の主軸に合わせた構内座標を設定して調査および記録を行っている（図2）。この構内座標は、2002年度までは日本測地系による国土座標第V座標系に基づいて、南北・東西軸座標値（ $X = -149,800\text{m}$ 、 $Y = -37,400\text{m}$ ）を原点とし、南北軸を $N-15^\circ-E$ に振ったものを使用していた。その後、2002年4月1日に改正された測量法の施行に伴い、2003年度以降に刊行する報告書からは座標値を世界測地系へ変更することとした²⁹。その結果、構内座標の原点は、 $X = -149,456.3718\text{m}$ 、 $Y = -37,646.7700\text{m}$ の数値にあたることとなった。

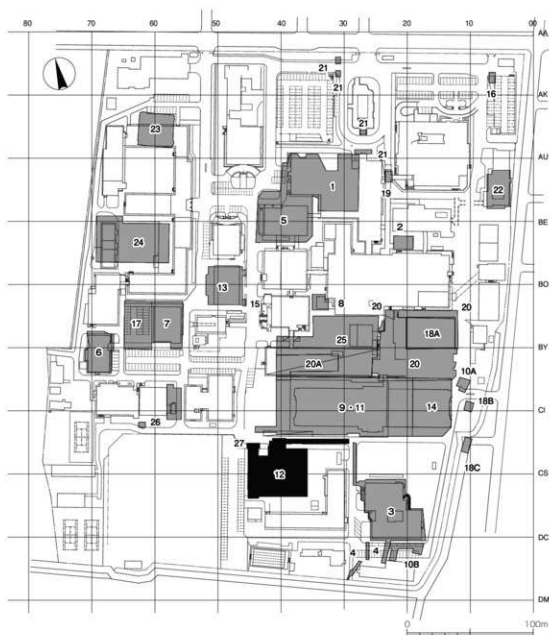
構内では座標原点から一辺5mの正方形の区割りを設定し、原点を通る東西ラインをAA、それより南へ5mごとの東西ラインをAB、AC、…AZ、BA、BB…、のごとく付番し、また原点を通る南北ラインを00、それより西へ5mごとの南北ラインを01、02、03…、と付番する。これらのラインによって形成される5m四方の区画名は、その北東コーナーで交わる2方向のライン名を組み合わせ、AA00区、AB01区、AC02区…、と呼称する。

2. 遺跡の概要

鹿田遺跡では、2019年度までに28回にわたる発掘調査が行われている。その成果から概略をまとめよう。

【地形環境】

本遺跡の立地環境は、前述したように旭川河口付近に形成された砂州状地形にあり、臨海性の高い集落遺跡と評価される。ただし、弥生時代後期～古墳時代初頭では、第9次・11次調査³⁰、第14次調査³¹において水田域が、居住域（第1次・2次調査³²）の南側に確認されたことから、海岸線までは一定の距離があったことが想定され



- | | | |
|---------------------|-----------------------|------------------------|
| 1 第1次調査：外来診療棟 | 10 第10次調査：共同講義棟 | 19 第19次調査：渡り廊下 |
| 2 第2次調査：NMR-CT室 | 11 第11次調査：病棟 | 20 第20次調査：中央診療棟関連 |
| 3 第3次調査：医療初期大学部【校舎】 | 12 第12次調査：エネルギーセンター | 21 第21次調査：外来診療棟周辺環境整備 |
| 4 第4次調査：医療初期大学部【配管】 | 13 第13次調査：総合教育研究棟 | 22 第22次調査：地域医療総合支援センター |
| 5 第5次調査：管理棟 | 14 第14次調査：病棟 | 23 第23次調査：JFホール |
| 6 第6次調査：アイトップセンター | 15 第15次調査：総合教育研究棟【外構】 | 24 第24次調査：医歯薬融合棟 |
| 7 第7次調査：基礎研究棟 | 16 第16次調査：立体駐車場エレベーター | 25 第25次調査：中央診療棟（Ⅱ期） |
| 8 第8次調査：R1治療室 | 17 第17次調査：基礎研究棟 | 26 第26次調査：動物実験施設 |
| 9 第9次調査：病棟 | 18 第18次調査：中央診療棟 | 27 第27次調査：自家発電設備 |

※建物名称は調査次の呼称による。

図2 発掘調査地点と構内座標（縮尺1/3,000）

る。

ここで、本地点に集落が形成される弥生中期後葉以前の状況を整理しておこう。最も古い時期の遺物は、第1次調査で確認された縄文時代中期末～後期の縄文土器片である。続いて、弥生時代早期・前期の土器片があげられる²⁰。数はそれぞれ1点程度で極めて少量である点は、該期の人間活動の痕跡が希薄であったことを示すと同時に、各時期において多少なりとも陸地が存在したことも示唆している。近年実施されたボーリング調査成果では、縄文海進によって縄文早期には海面下となった鹿田遺跡の環境は、同前期～後期中葉には砂堤状の陸域となり、その後（同後期末）の海域環境を経て、弥生前期頃に、再度陸域へと変化していたことが指摘されている²¹。出土遺物の時期とはおおむね整合的である。最終段階の陸域はその遺物から弥生早期に遡ることが予想され、同域が河口付近に形成された高まりの中の一つであったことを示す。

また、地形面で大きな変化が弥生時代中期中頃～後期初めに起きたことがわかってきた。同時期に急速な土砂の堆積が微高地を形成したことが第23次調査で確認され²²、また、中期中頃に河道が多量の土砂によって埋没している様子が第12次調査で見つかっている²³。こうした沖積作用の進行が、本地点における微高地形成に大きな影響を与えたことは、その後の集落形成からも窺うことができる。

旭川西岸部のなかで、弥生時代中期後葉～古墳時代初頭における本地点周辺の地形は、北側に広がる遺跡分布域とは切り離され、海に突き出したような状態が復元される。

こうした状況は、本調査地点の北側に位置する調査地点の成果からも追認される。第16次調査²⁴・第21次調査²⁵・第23次調査では、最も安定した微高地である第1次調査地点の北側に、深い谷地形あるいは河道が長期にわたって存在したことを示す。同地域が日常的に利用されるのは平安時代後半～鎌倉時代初頭以降である。本遺跡から北500m地点の大供中道遺跡では、鎌倉時代（13世紀）の耕作地の報告があり²⁶、整合性をもつ結果を示す。一方、第1次調査地点の南側では、平安時代前期までは、第1次調査・第2次調査²⁷・第5次調査²⁸地点付近はその周囲と1m程度の比高を有しており、岡山大学鹿田キャンパスの敷地全体に安定した土地環境が成立するのは、平安時代後半以降の土地開発を経てからである。

【集落】

本遺跡において集落が営まれた時期は、弥生時代中期後葉・後期前半～古墳時代初頭、飛鳥時代、奈良時代後期～平安時代前期、平安時代後期～戦国時代である。それぞれの間に多少の中断を挟むが、弥生時代中期後葉に集落が成立した後、戦国期末～江戸時代初めの城下町再編によって農村へと変貌するまで、連続と集落が営まれていたといえそうである。

弥生時代中期後葉～古墳時代初頭： 中期後葉における居住域は、現状では、第1次調査地点（現在の岡山大学病院外来診療棟）に限定される。東西50～60m・南北50m程度の比較的小規模な範囲に居住域が復元される。その範囲は後期には、南側の第5次調査地点、南東側の第2次・第18次調査地点²⁹、東側の第19次³⁰・第22次調査³¹地点へと広がり、東西220m・南北100mの範囲を占める。また、その居住域の南側には水田域を形成する（第9次・11次・14次調査地点）。古墳時代初頭には、これらの居住域の中で東側（第22次調査地点）で遺構は姿を消し、西～南側の扇縁部に新たな広がりを見せる。西側の第7次調査³²・17次調査³³地点では堅穴住居や井戸が形成される。一方、南側の第12次調査³⁴・13次調査³⁵・20次調査³⁶各地点では土器溜まりの形成が顕著にみられるほか、西側の第24次調査³⁷地点では土器棺の存在が目目される。

居住域における遺構の構成は、堅穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑・土器棺・土器溜まりが中心の構造物をなす。堅穴住居3～5棟前後で構成された可能性が高く、ほぼ一単位の集落といえそうである。こうした遺構群には、後期後半以降に様々な変化が生じる。後期末～古墳時代初頭には、柱穴を有さない小規模な住居や井戸の数が増加する。一方、土坑はその数を大幅に減じ、それに入れ替わるように土器溜まりが増加する³⁸。出土遺物の構成にも、壘の増加などに新たな動きが認められる。後期後葉以降における社会変化の一端を示す動きとして評

備できそうである。また、土坑には製塩土器や炭化物を多量に含むもののほかに、第17次調査地点の資料なども、集落内における手工業生産の実態を探る手掛かりとなっている。

また、本道跡では、海との関連を窺わせる製塩土器や土鍾・石鍾が多く出土するほか、弥生後期には四国地域との関係を示す甕（第1次調査）、古墳時代には畿内地域・山陰地域・阿波地域などからの搬入土器の存在が注目される（第12次調査・第24次調査）。このように、本道跡は旭川西岸における集落の中で、海浜集落として一定の役割をもつ場所であったと考えられる。

古代（飛鳥時代）：古墳時代前期に集落は姿を消すが、7世紀前半期には、第1次・第2次調査地点に小規模な集落が出現する。その広がりは、近年の調査から、同地点の西側（第23次調査地点）にも認められている。その後、一時期の中断を経た後、奈良時代後半～平安時代前半の居住域に引き継がれる。

古代（奈良時代後期～平安時代前期）：第1次・2次・5次調査地点を中心に、庇付き掘立柱建物を含む建物群や大形の割り貫き井戸枠を備えた井戸で構成される居住域が形成される。8世紀後半～10世紀初めの時期であるが、そうした遺構の分布範囲は限定的である。一方、同城から約250m南に位置する第4次調査地点では、東西方向に流路を取る河道や橋脚、杭による護岸が確認されている。径約30cm前後の大形杭列は、堅固な基礎構造を持つ橋の構造を示しており、人通りの多い交通の要所に構築されていたと判断される。これは、鹿田道跡が水陸交通の要所として機能していたことを端的に示す。

遺物では、木簡・墨書土器・硯などの文字関連資料のほか、黒色土器・丹塗土器・緑釉の唾壺や石帯など特徴的な遺物を含む。硯には踏脚硯が含まれる。また、第24次調査地点の調査では、井戸から2枚の絵馬が重なって出土した。本時期に属する5基の井戸では、割り貫きの井戸枠が設置され、横櫛・刀子・曲物・斎串・モモがセット関係をもって出土する。以上の遺構や遺物の状況は、本道跡が何らかの管理地的な役目を有し、都とのつながりの強い集落であったことをうかがわせる。

中世前半（平安時代後期～鎌倉時代）：10世紀～11世紀初めには、集落は岡山大学鹿田キャンパスから姿を消す。一方、本キャンパスの西側に位置する鹿田道跡（県立岡山病院の敷地）に、同時期の遺構が形成される²⁰。本敷地で集落が再開するのは11世紀代であり、両地点での集落の移動が予想される。新たに形成された11～12世紀の集落構造は以前とは全く異なる村落景観が出現する。現在に残る地割り方向（北が15°東に傾斜）に沿った溝で敷地全体が区切られており、1町を単位とした碁盤目状の地割りに合わせて屋敷地が配されている。その地割りは12世紀後半～13世紀初頭に再編され、新たに形成された大形の区画溝は屋敷地を閉鎖的な空間へと変化させる²¹。

出土遺物では、輸入陶磁器・石鍋・砥石あるいは瓦器・東播系のすり鉢などが、遠隔地あるいは近隣地域から持ち込まれており、傀儡回しの来訪を予想させる鎌倉時代末頃の猿形木製品（第7次調査）と合わせて、人や物資の盛んな流通を裏付ける遺物として注目される。こうした遺物から、海運・水運の結節点に形成された流通拠点としての役割を担う集落の一端が垣間見える。また、瓦や呪符木簡、銅鏡（第6次調査）²²からは、宗教的建物の存在も浮かび上がる。その他に、第25次調査²³では烏帽子を被った状態で埋葬された墓などから、名主層の存在も想定される。

中世後半（室町時代～戦国時代）：鎌倉時代後葉（13世紀末～14世紀前葉）には、次の時代へ向けて屋敷地の再編が行われる。一部の溝は廃絶し、区画溝は主要な溝に集約される。その結果、溝で区画された屋敷地の面積は拡大する場が多い。また屋敷地の配置は、第1次調査地点を中心とする北側域から、第9次・11次・14次調査地点が位置する南側において東西方向に並ぶ傾向を強める。また、第20次調査で出土した猿をモチーフとする水滴などは有力武家の存在を窺わせる²⁴⁻²⁵。

近世（江戸時代）：屋敷地から耕作地へと、道跡の様相は大きく変化する。各調査地点において畦畔や野壺などが認められる。時代背景を考えると、江戸時代開始前後に行われた岡山城下町の再編による影響が想定される。

ただし、18世紀には、第18次調査B地点に船着き場、第18次調査A地点周辺に屋敷地があった可能性があり⁹⁴、近代に続く大庄屋の存在を想定させる資料が増えている。

【藤原摂関家殿下渡り領「鹿田庄」の成立との関係】

本遺跡は、「鹿田庄」の比定地として評価されている。同庄の成立時期については不明な点もあるが、『興福寺縁起』によれば、弘仁4（817）年に興福寺南門堂で行われた法華会の料米72石を「鹿田地子」で当てたとされており⁹⁵、平安時代初期には興福寺と強い関係を有す藤原摂関家の影響が当地に及んでいたことは十分に予想される。同時期の建物や井戸は、第1次・2次・5次発掘調査地点で確認された建物群や大形井戸（およそ8世紀後半～9世紀初め）のみであったが、近年、集落の西端に位置する第24次調査地点で同時期の井戸が加わった。前述したように、その内部からは2枚の絵馬が重なる出土している。こうした資料は鹿田庄成立期前後における本遺跡の性格を考える上で重要な手がかりになろう。

本章は下記既報の文章をもとに、現在までの調査研究で新たに認識された事項を大幅に加筆し、改定したものである。

高田賢太2007「第1章 歴史的・地理的環境」『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊

注

- (1) 鎌木義昌 1962「第一編 原始時代」『岡山市史（古代編）』
- (2) 富岡直人 1998『明使藤原氏塚発掘調査概報』加計学園埋蔵文化財調査発掘調査報告書2
- (3) a 山本悦世編 1992『津島岡大遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊
b 阿部芳郎編 1994『津島岡大遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊
c 岩崎志保編 2005『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊
- (4) a 二宮治夫編 1985『百四川沢田遺跡2 百四川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
b 平井 勝編 1993『百四川沢田遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84
- (5) 山本悦世編 2004『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊
- (6) a 津島遺跡調査団 1969『昭和44年岡山県津島遺跡調査概報』
b 岡山県教育委員会 1970『岡山県津島遺跡調査概報』
c 島崎 東はか 1999『津島遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137
d 平井 勝 2000『津島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151
e 島崎 東はか 2003『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173
f 岡本泰典ほか 2004『津島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
- (7) a 岡田 博編 1998『北方下沼遺跡 北方橋田遺跡 北方中溝遺跡 北方地蔵遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
b 高田基一郎編 2000『北方地蔵遺跡2 北方藪ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告149
- (8) a 宇垣区警編 1999『百四川原尾鳥遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88
b 平井 勝編 1995『百四川原尾鳥遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
- (9) a 高塚知功 1988『津島江道遺跡』岡山県埋蔵文化財報告18
b 草原孝典 1999『津島江道（個北中）遺跡』岡山市埋蔵文化財調査の概要 1997（平成9）年度
- (10) a 柳瀬昭彦 1988『中溝遺跡』『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡大実地委員会
b 柳瀬昭彦 1988『南方釜田遺跡』『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』日本考古学協会静岡大実地委員会
- (11) a 岡山市遺跡調査団 1971『南方遺跡発掘調査概報』
b 岡山市遺跡調査団 1981『南方（国立病院）遺跡発掘調査概報』
c 柳瀬昭彦・岡本寛久 1981『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40
d 安川 満編 2016『南方遺跡』岡山市教育委員会
- (12) a 高橋 謙・正岡陸夫ほか 1972『雄町遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告1
b 草原孝典 2017『雄町遺跡』岡山市教育委員会
- (13) a 江見正巳ほか 1980『旭川放水路（百四川）改修工事に伴う発掘調査1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39
b 正岡陸夫編 1984『百四川原尾鳥遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
c 柳瀬昭彦編 1996『百四川原尾鳥遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
- (14) a 高田基一郎編 2008『百四川原尾鳥遺跡7 百四川二の虎手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215
b 内藤善史編 1996『絵田遺跡 南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
- (15) a 中野雅美 1984『上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡』岡山県埋蔵文化財報告14
b 中野雅美・根木 修 1986『上伊福九坪遺跡』岡山県史 考古資料

- 06 a 杉山一雄編 1998『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125
 b 金田善敬編 2005『伊福定国前遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188
 c 亀山伴徳編 2010『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告224
- 07 吉留秀敏・山本悦世編 1988『鹿田遺跡1』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
- 08 出宮徳尚 1986『天瀬遺跡』岡山県史 考古資料
- 09 高畑知功 1982『百間川兼基遺跡1・百間川今谷遺跡1』岡山県埋蔵文化財調査報告51
- 10 宇垣匡雅 1990『瀬茶臼山古墳・篠山109号墳の測量調査-古墳の前期古墳Ⅲ-』『古代古墳』第12集
- 11 松木武彦 1993『岡山平野における弥生-古墳時代の地域集団』『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- 12 神谷正義・安川 満 2007『神宮寺山古墳 瀬茶臼山古墳』
- 13 a 西谷政治・藤本義昌 1969『金蔵山古墳』岡山市教育委員会
 b 宇垣匡雅 2008『金蔵山古墳』岡山市教育委員会
 c 安川 満・東川史也 2019『金蔵山古墳』岡山市教育委員会
- 14 a 近藤義郎 1986『濤茶臼山古墳』岡山県史 考古資料編
 b 安川 満 2013『濤茶臼山古墳』岡山市教育委員会
- 15 草原孝典 2004『ハガ遺跡』岡山市教育委員会
- 16 高橋伸二 2005『史跡貫田塚寺跡』岡山市教育委員会
- 17 岡山県教育委員会 1982『百間川当麻遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
- 18 中野雅美 1977『古墳における平城宮式瓦について』『川入・上東 岡山県埋蔵文化財報告16』
- 19 草原孝典 2002『新道遺跡』岡山市教育委員会
- 20 南健太郎編 2018『鹿田遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第33冊
- 21 a 山本悦世 2007『中世の集落構造と推移-鹿田遺跡の場合-』『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
 b 山本悦世 2015『鹿田遺跡の土地区画と岡山平野の条理関連遺構』『条里制・古代都市研究』30 条里制・古代都市研究会
- 22 出宮徳尚 1985『岡山県二日市遺跡』『日本考古学年報』3
- 23 柳瀬昭彦編 1996『百間川原尾島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106 はか
- 24 光本 順 2004『日本測地系から世界測地系への移行に伴う構内標の変更について』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』
- 25 山本悦世編 2017『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊
- 26 岩崎志保編 2014『鹿田遺跡8』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊
- 27 山本悦世ほか 2019『岡山平野における環境復元へのアプローチ』『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2017』
- 28 南健太郎編 2016『鹿田遺跡9』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第31冊
- 29 山本悦世 2001『鹿田遺跡第12次調査』岡山大学構内遺跡調査研究年報 18
- 30 高田貫太 2006『鹿田遺跡第16次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』
- 31 光本 順 2012『鹿田遺跡第21次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』
- 32 河田健司 2000『大供中道遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会
- 33 松木武彦・山本悦世 1993『鹿田遺跡3』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
- 34 a 山本悦世 2008『鹿田遺跡第18次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』
 b 光本 順ほか 2013『鹿田遺跡第18次調査B/C地点』『鹿田遺跡7』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第28冊
- 35 野崎智博 2010『鹿田遺跡第19次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』
- 36 岩崎志保 2012『鹿田遺跡第22次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011』
- 37 山本悦世編 2007『鹿田遺跡5』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
- 38 山本悦世 2008『鹿田遺跡第17次調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』
- 39 光本 順編 2010『鹿田遺跡6』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊
- 40 a 山本悦世 2011『鹿田遺跡第20次発掘調査』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009』
 b 山口康治ほか 2018『鹿田遺跡第20次A地点』『鹿田遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第34冊
- 41 山本悦世編 1990『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊
- 42 河合 忍 2007『総括』『鹿田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告210
- 43 松木武彦・山本悦世 1997『鹿田遺跡4』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊
- 44 山口康治ほか 2018『鹿田遺跡第25次調査』『鹿田遺跡12』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第34冊
- 45 鈴木景二 2002『備前国鹿田庄・寛野史料と絵図』『新道遺跡』岡山市教育委員会

第2章 調査に至る経緯と概要

第1節 調査に至る経緯と経過

1. 調査の経緯

2000年度に岡山大学鹿田キャンパスでは岡山大学病院入院棟の改築工事に伴ってエネルギーセンターの建設が具体化され、同地点において第12次発掘調査を実施することとなった。発掘調査の範囲は、本体部分（A地点）と共同溝部分の2か所（B・C地点）である。調査に先立ってA地点にある既設建物の撤去が必要であったが、包含層の破壊をできる限り避けるため、表土掘削時に建物の基礎部分を残し、調査終了後にその部分を撤去して下部の確認を行うこととした。

調査終了後、2002年度に本体部分につながる南西部の立会調査（E地点）が実施され、井戸等の遺構を確認した。さらに、2017年度

には本体部分の北西隅に自家発電設備の工事が予定され、狭い範囲ではあるが第27次発掘調査（D地点）を実施した。ここでは、これら5地点の成果を合わせて報告する。

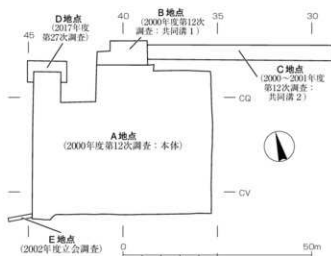


図3 調査地点の名称

2. 調査の体制

a. 第12次調査

調査主体	岡山大学	学 長	河野伊一郎
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	稲田 孝司
調査研究員（調査主任）	＊	調査研究室長	
”	＊	助 教 授	山本 悦世
”	＊	助 手	忽那 敬三
”	＊	助 手	高田 浩司
”	＊	助 手	光本 順
”	＊	技術補佐員	福井 優

運営委員会（2000・2001年度）

センター長	稲田 孝司	環境理工学部教授	名合 宏之
文学部教授	久野 修義	大学院自然科学研究教授	
医学部教授	村上 宅郎	(調査研究専門委員)	千葉 喬三
(2001年4月1日から大学院医歯薬学総合研究科)	文学部教授		新納 泉

理学部教授	柴田 次男	事務局	遠藤 久夫 (2000年6月30日まで)
(2001年4月1日から大学院自然科学研究科)		事務局	森内 壽一 (2000年7月1日から)
埋蔵文化財調査研究センター			
(調査研究室長)	山本 悦世		

b. 第27次調査

調査主体	岡山大学	学 長	楢野 博史
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	菅 誠治
"	"	副センター長	山本 悦世
調査研究員 (調査主任)	"	助 教	野崎 貴博

運営委員会 (2017年度)

財務・施設担当理事 (センター長)	菅 誠治	大学院医歯薬学総合研究科教授	大橋 俊孝
本センター教授 (副センター長)	山本 悦世	大学院社会文化科学研究科教授	
大学院社会文化科学研究科教授・ 附属図書館長	今津 勝紀	大学院自然科学研究科教授	(調査研究室長) 清家 章
大学院社会文化科学研究科教授	新納 泉	(調査研究専門委員)	鈴木 茂之
大学院自然科学研究科教授	加藤 鎌司	施設企画部長	松山 忠生

報告書刊行時運営委員会 (2020年度)

財務・施設担当理事 (センター長)	渡邊 和良	大学院医歯薬学総合研究科教授	大橋 俊孝
埋蔵文化財調査研究センター教授 (副センター長)	山本 悦世	大学院社会文化科学研究科教授	(調査研究室長) 清家 章
大学院社会文化科学研究科教授・ 附属図書館長	今津 勝紀	大学院自然科学研究科准教授	(調査研究専門委員) 野坂 俊夫
大学院社会文化科学研究科教授	松本 直子	施設企画部長	岩永 仁
大学院環境生命科学研究科教授	加藤 鎌司		

3. 調査経過

a. 第12次調査

B地点 (共同溝1) は2000年10月2日に造成土取りを行い、3日から発掘調査を開始した。調査範囲内には掘乱坑が多く認められたが、近世から弥生時代までの遺構を確認し、10月26日に調査を終了した。

A地点 (本体) では、10月6日から表土掘削を始めた。16日から開始した発掘調査は、作業の行程上、南側約2/3の範囲を調査対象として調査を進めた。その後、B地点の調査終了を受けて11月6日～14日に残りの表土掘削を完了し、近世遺構面で全体の進行状況をあわせることができた。その後、中世から弥生時代に至る遺構群を確認し、2001年3月14日に手掘りによる調査を終了した。15日に重機で下層の状況を確認し、すべての作業を終了した。最後に、建物基礎の撤去にもなう下層の遺構確認を行った。

C地点 (共同溝2) は、A地点の調査終了後、2001年3月14・15日に造成土を除去した。19日から発掘調査を開始し、近世土坑群、中世の溝、弥生～古墳時代の土坑・溝の調査を行い、5月10日にすべての作業を終了した。

調査期間は2000年10月2日～2001年5月10日である。調査面積はA地点で1606㎡、B地点で67㎡、C地点で224㎡をそれぞれ測り、全体では1897㎡である。調査員は、A地点で4名、B・C地点で1～2名が調査にあつ

た。

b. 第27次調査

D地点（第27次調査）では、調査に先立ち、2017年10月10・11日で重機により近・現代の造成土と攪乱埋土を除去した。また調査区南には既調査区が重複しており、造成土掘削の際に埋設土を撤去した。調査面積は34.5㎡である。

発掘調査は調査員1名を担当者として10月12日より開始し、調査区内の攪乱清掃および周囲の側溝掘削、近代層の掘削を行った。以降、調査区四周の断面観察で分別した基本層序にしたがって下位の土層へと掘削をすすめ、各層上面で遺構検出のための精査を実施し、遺構を検出した。

最終的に無遺物層まで掘削し、調査区四周の断面観察においても遺構・遺物がないこと、および周辺調査区の成果とも矛盾がないことを確認し、必要な記録をとった上で11月10日に調査を終了した。



図4 調査風景(上：A地点、下：C地点)

註 本誌は以下の文献を一部修正のうえ転載した。

山本悦世2000「鹿田遺跡第12次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報18』pp.19-26

野崎貴博2018「鹿田遺跡第27次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2017』pp.1-4

第2節 調査の概要

弥生時代中期～古墳時代初頭、古代、中世前半、近世の遺構が確認された。以下にその概要を述べる（図5）。

弥生時代中期～古墳時代初頭 弥生時代中期～後期には調査区北半部に北西～南東方向の河道が入る。この段階の遺構は、溝の可能性もある1条の流路のみで、遺構密度は希薄である。河道の堆積は古墳時代初頭までには急速に進行し、低位部となる。ここには耕作との関係が推測される高まり、溝のほか、井戸や土坑、土器だまりなどの古墳時代初頭に位置づけられる遺構を検出した。特に高まりや溝では、北に隣接する第9・11・14次調査地点で検出している遺構との連続や相関を確認できる。

古代 調査区南半に分布し、北東-南西方向に主軸線を描える溝群は、出土遺物から飛鳥時代を中心とするものとみられる。一方、調査区北東では、幅狭く、浅い小規模な溝が東西・南北に数条ずつ並行し、格子状の区画を形成しており、耕作痕とみられる。ここからの出土遺物はないが、溝の軸線の傾きが調査区南半の溝群に近似しているため、飛鳥時代の所産と推測しておきたい。

中世前半 この段階に至り、弥生時代中期の河道が調査区北東部の地形に及ぼしてきた影響は払拭されている。調査区中央で南北方向に掘削される溝群を挟み、東西で遺構の粗密が顕著である。この南北方向の溝群から西へ折れて、調査区南西部に方形区画を形成する溝がある。区画内には総柱の掘立柱建物、多数のピット、井戸枠を内包する複数の井戸等が検出されており、溝で圍繞された屋敷地の存在が想定される。D地点の東西方向の柱穴列とC地点の2条の東西溝は区画に関わる遺構と考えられ、東西方向の土地の区画線がこの位置に通っていることを推測させる。

近世 A地点中央からB地点にかけては、南北方向に幅約5～10mの範囲に、B地点からC地点にかけては、

調査に至る経緯と概要

東西方向に幅約5mの範囲に土坑が配される。この範囲には段や畦畔もみられ、土地の区画を反映した遺構配置がなされているとみられる。東半部の低位部では水田が形成されている。(野崎貴博)

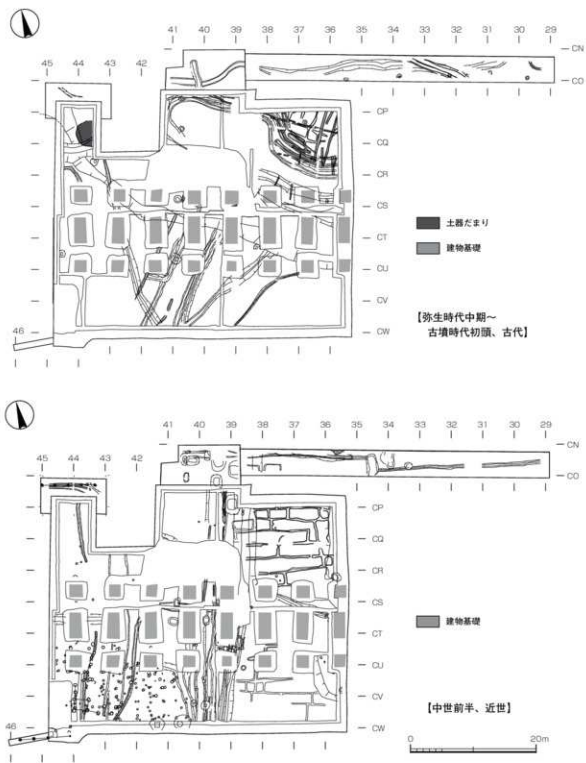


図5 検出遺構全体図

第3章 調査の記録

第1節 調査地点と層序

1. 調査地点の位置

本調査地点は岡山大学鹿田地区の南側中央部、現在の岡山大学病院の病棟南西側に位置する（図6）。鹿田遺跡の構内座標ではCN29区～CW45区にあたる。本調査地点の周辺では、北～北東側には東西約130mの範囲にわたって第9・11・14次調査地点が連なっている。特に第9・11次調査地点南辺と本調査地点B・C地点とは、約70mにわたって境を接している。また、南東約50mには第3・4・10次調査地点が位置している。

第9・11・14次調査地点では、弥生時代後期～古墳時代初期の水田関連遺構の検出により、臨海集落における生産と土地利用に関する成果、中世村落構造の変遷に関するこれまでの調査研究を補完する成果が得られている。第3・4・10次調査地点では、古代の河道および河道内に設けられた橋脚や杭群などの施設が検出されたほか、本調査地点と同様、掘立柱建物、柱穴列、井戸、土坑、溝で構成される中世前半の居住域も確認されている。

2. 層序

本調査地点では大小4か所の調査区で土層を観察・記録した。一部では攪乱により十分な土層観察と記録ができなかったが、全体的にはほぼ連続して断面観察・記録ができており、可能な限り断面図を提示する。ただしC地点については、東西にはほぼ水平堆積する土層が連続しているため、東端1か所の柱状図を示す（図7～10）。

<1層>（近現代）：1922（大正11）年に始まった岡山医科大学建設に伴う造成と、以後、現在に至るまでの造成

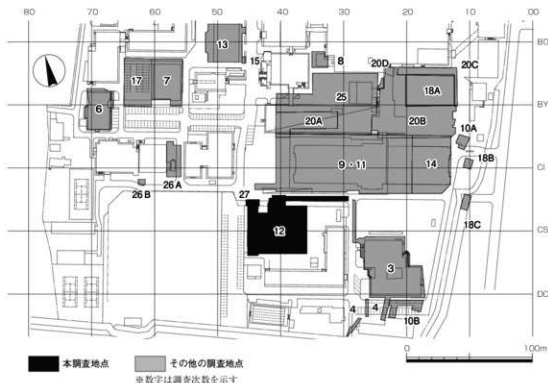


図6 調査地点位置図（縮尺1/3,000）

による土層である。現地表面の標高は約21～23m、層厚は約0.9～1.0mである。

<2層> (近代): 灰色粘質土である。調査区の全域に広がる。地点によって明暗が観察されており、北側の方が暗い色調を呈している。鉄分の沈着がみられ、径0.5cm程度の小礫や土器・陶磁器小片を包含する。上面のレベルは1.14～1.43mで、層厚は0.1m前後である。既往の調査成果から、明治～大正にかけての耕作土とみられる。

<3層> (近世): 明褐色粘質土である。一部ではグライ化により、緑色の強い色調に変化している。調査区東半から西半北側にかけて広がるが、分布の中心は東半の低位部にある。鉄分の沈着はみられるものの弱い。上面のレベルは1.09～1.4m、層厚は約0.05～0.2mである。地形の低い調査区東半部で厚さを増す。近世の耕作土とみられる。上面で近世陶磁器等を含む土坑群が検出されている。遺物出土量はコンテナ3.5箱 (28%箱、以下同量) で、近世陶磁器小片が主体をなす。

<4層> (中世前半): 緑灰色粘質土である。二層に細分される。中世前半に属する遺構群を検出した。遺構との関係から、本層は少なくとも11世紀後半までには形成されていると考えられる。出土遺物のなかには、本来本層に帰属するものの、発掘作業の過程で下位の<5層>で検出された遺構に包含されていたものも含まれる。

<4 a層> (中世前半): 緑灰色粘質土で、場所により色調に濃淡がある。調査区全体に広がる。鉄分の沈着は認められるものの弱い。マンガンの凝集が顕著にみられる。炭を多く包含する。上面のレベルは0.94～1.3mである。層厚は0.04～0.3mである。下層地形の高いA地点西辺や南辺西半では薄く、北半部、とりわけ北東部で厚い。上面で中世前半に属するピット群、井戸、溝を検出した。出土遺物量はコンテナ4.5箱である。

<4 b層> (中世前半): 緑灰色～明緑褐色粘質土である。鉄分の沈着がみられ、マンガンの凝集が顕著である。炭化物の包含は少ない。下層地形の高いA地点西辺や南辺西半にかけては確認されない。上面のレベルは0.77～1.22mである。層厚は0.03～0.2mと差が大きい。A地点西辺や南辺の近くでは薄く、北半で厚い傾向がある。中世前半のピット群、溝を検出している。出土遺物量はコンテナ2箱である。

<5層> (古墳時代初頭): 褐色粘質土で、調査区全体に広がる土層である。場所によって明暗、グライ化の影響による緑化が認められる。鉄分の沈着はみられるが弱く、マンガンの凝集が顕著である。上面のレベルは0.63～1.24m、層厚は0.1～0.3mである。上面で古墳時代初頭、飛鳥時代、中世前半の遺構を検出したが、本層形成の下限を示すのは古墳時代初頭の土器だまりである。また、本来は<5層>上には古代の土層が形成されていたと想定されるが、<4層>形成時に失われたと考えられる。中世前半のピット群、土坑、溝は本来<4層>に帰属する。出土遺物量はコンテナ4箱で、古墳時代初頭の土器が出土している。

<6層> (古墳時代初頭): 明黄褐色粘質土である。上位の<5層>、下位の<7層>も褐色系の粘質土であるが、両層よりも明るく、黄色の強い色調を呈することを特徴とする。鉄分の沈着、マンガンの凝集が顕著である。上面のレベルは0.51～0.68m、層厚は0.05～0.1mである。A地点北東からC地点にかけての北東部を中心とした河道埋没後の低位部に広がる。上面で古墳時代初頭の高まり、土坑、溝群を検出した。遺物はほとんど出土していない。上下の土層との関係から、古墳時代初頭の土層と位置づけられる。

<7層> (弥生時代後期後葉～古墳時代初頭): 暗褐色粘質土である。鉄分の沈着が顕著で、マンガンの凝集もみられる。上面のレベルは0.42～0.53m、層厚は0.1m前後である。<6層>と同じく、A地点北東からC地点にかけての北東部を中心とした河道埋没後の低位部に広がる。<8層>検出の河道からは弥生時代中期～後期の土器(図123-1～4)が出土しており、本層の形成はそれ以降で、古墳時代初頭の土器を包含する溝を下限とする。上面で弥生時代後期後葉～古墳時代初頭に属する土坑、溝群を検出した。遺物はほとんど出土していない。

<8層> (弥生時代中期以前): 黄橙褐色砂質土である。鉄分の沈着、マンガンの凝集がみられる。本地点を北西～南東方向に通る河道によって切られ、北側には広がらない。A地点南半から西辺にかけて広がりをもつ。直上には<5層>、<7層>が堆積する。上面のレベルは0.77～1.0m、層厚は約0.1～0.3mで、南西隅がもっとも厚く、東に向かって漸次厚みを減じてゆく。上面で溝や溝と考えられる流路と本来上層部に帰属する土坑を検出し

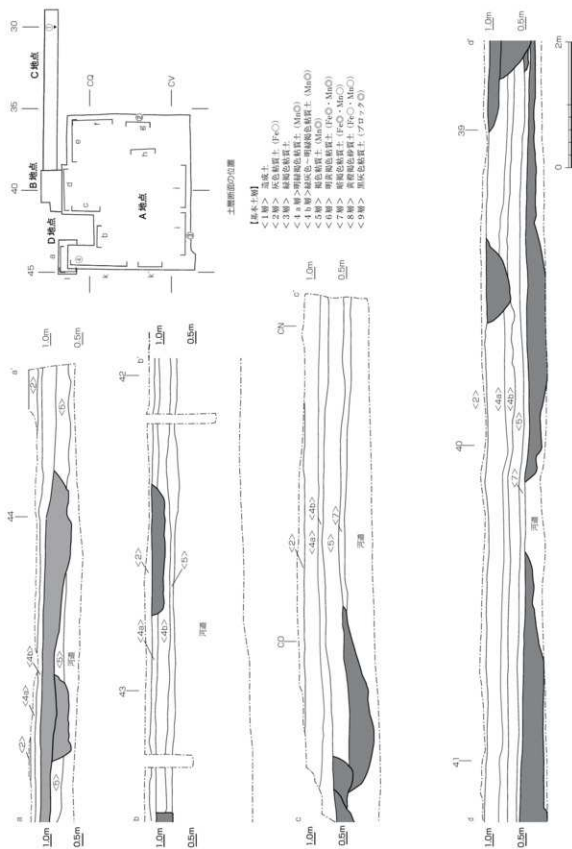


図7 調査区土層断面(1) (縮尺1/60)

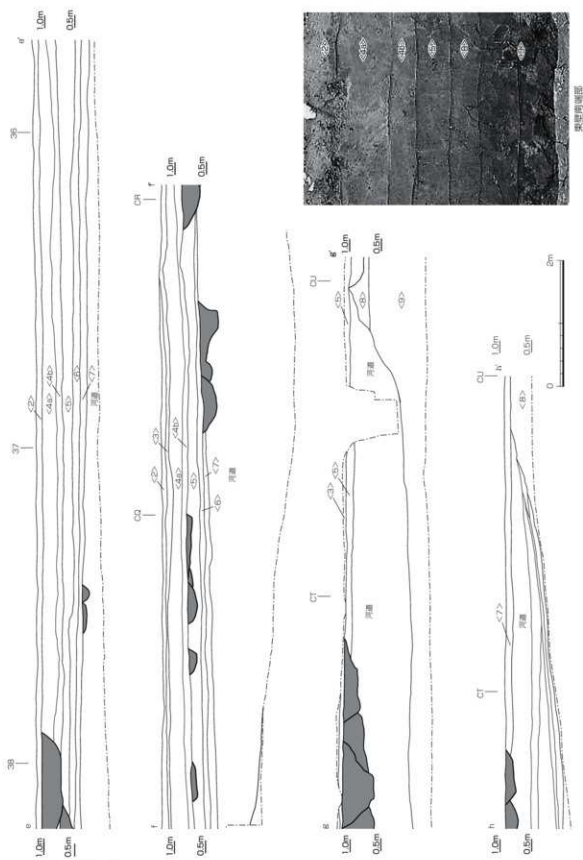


図8 調査区土層断面2 (縮尺1/60)

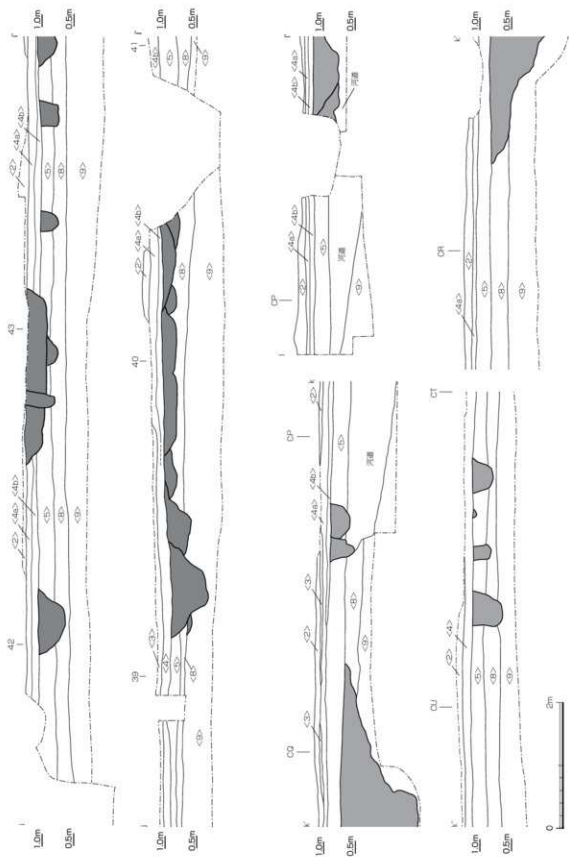
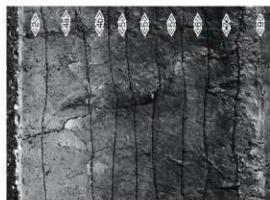
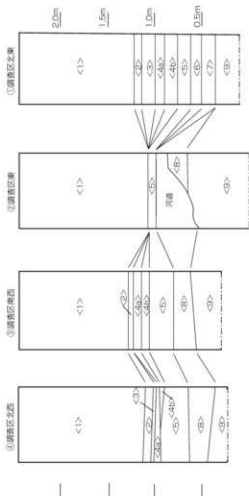


図9 調査区土層断面3 (縮尺1/60)



北野集会所跡



層名	A地点【北野】										A地点【東野】											
	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	CP	CQ	CR	CS	CT	CU	CW
<2>	(1.30)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<3>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<4>	1.25	1.21	1.16	1.13	1.11	1.09	1.05	1.05	1.09	0.93	0.92	1.11	0.99	0.97	1.10	1.09	1.03	1.14	1.24	礫乱	礫乱	1.28
<4b>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.22
<4c>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.03
<4d>	1.01	0.93	0.91	0.91	0.91	0.84	0.79	0.82	0.87	0.85	0.81	0.77	0.77	0.87	0.91	0.78	0.88	0.95	0.98	1.07	1.00	0.92
<5>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<5b>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<5c>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<6>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<6b>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<6c>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<7>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<7b>	0.42	0.41	0.42	0.41	0.42	0.37	0.42	0.32	0.47	0.44	0.38	0.47	0.32	0.37	0.33	0.36	0.44	-	-	0.98	0.98	0.8
<8>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<9>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
																						0.68

層名	A地点【西野】										A地点【東野】											
	36	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59
<2>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<3>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<4>	1.07	1.05	1.12	1.20	1.23	1.24	1.24	1.25	1.26	1.28	1.28	1.28	1.28	1.29	1.29	1.29	1.29	1.29	1.29	1.29	1.29	1.29
<4b>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<5>	0.97	0.91	1.13	1.11	1.04	1.03	1.11	1.12	1.14	1.06	1.23	1.22	1.22	1.2	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14	1.14
<5b>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<6>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<6b>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<7>	0.84	0.75	0.69	0.81	0.78	0.82	0.85	0.87	0.92	0.89	0.92	1.00	0.99	0.99	0.99	0.99	0.99	0.99	0.99	0.99	0.99	0.99
<8>	0.71	0.68	0.69	0.69	0.66	0.62	0.61	0.67	0.69	0.69	0.69	0.71	0.71	0.71	0.71	0.71	0.71	0.71	0.71	0.71	0.71	0.71
<9>	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-



図10 調査区土層断面4) (縮尺1/40)

た。遺物はほとんど出土していない。河道との関係から、本層は弥生時代中期以前の形成と位置づけられる。

<9層>：黒灰色粘質土である。鉄分の沈着はわずかにみられる。直下の土層を起源とするとみられる5～20cm大のブロックを多く包含する。本地点を北西-南東方向に通る河道によって切れ、北側には広がらない。A地点南半から西辺にかけて広がりをもつ。上面のレベルは0.6～0.7m、層厚は約0.1～0.25mである。南西隅から西辺でもっとも厚く、東にむかって漸次厚みを減じてゆく。遺物は出土していない。

3. 地形

前項で示した各層の土質、上面標高、層厚、堆積範囲等の情報に基づき、本調査地点の地形の変化を<8・9層>段階（弥生時代中期以前）、<5層>段階（古墳時代初頭）、<4層>段階（中世前半）の三段階をとりあげて示す（図11）。

<8・9層>段階：調査区北西部からA地点南東部にかけて、北西-南東方向で弥生時代中～後期の河道が通る。河道の南側は微高地となる。本調査区では河道南岸側の法層を検出した。本調査区の北に隣接する第9・11次調査区では調査区南西部のCLA1～43区にかけての範囲で河道とみられる落ちが確認されている。この範囲では河道北岸側の法層は確認されていないので、さらに北に広がるのが推定される。その場合、河道の幅は約30～40mをはかると推定される。河道上面のレベルは0.3～0.9m、確認できた底面の標高は-0.19mで、深さは約1.2m以上である。

この段階の地形、とりわけ河道の存在は、後の本地点の土地利用のあり方に多大な影響を及ぼしていく。

<5層>段階：弥生時代中～後期の河道は、調査区北東側に広がる<6・7層>が約0.2～0.3mの厚みで堆積し、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭にかけて次第に深さを減じていく。<5層>より前の地層形成は微高地から低位部にかけての斜面堆積によるものであった。<5層>は<6・8層>の直上に形成され、調査区全体に広がりをもつ層厚0.1～0.3mの土

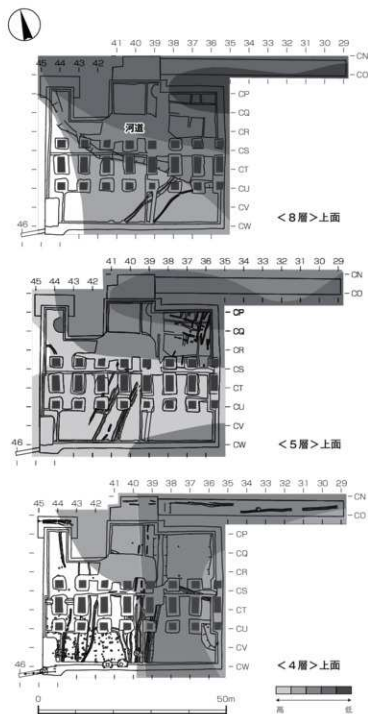


図11 地形の変遷（縮尺1/1000）

層である。しかし、調査区北東の河道は完全には埋まりきっておらず、南半とは約0.2～0.3mの比高をもつ低部位としてのこっている。

<4層>段階：本層形成の下限は11世紀後半で、調査区北東に通っていた河道の痕跡はほぼ埋没した。40ラインの東西では、直線的に約0.1～0.3mの高低差がみられる。遺構分布をみると、この位置に南北方向の溝が繰り返し掘削されており、溝により土地区画が表示されたと考えられる。また、40ライン以西では多数のビット、井戸、鏡形に折れる溝が検出される。40ライン以東では、A地点で南北方向の区画溝が39～40ライン間に掘削されるが、それ以外は希薄である。北側のB・C地点でも東西方向の溝、土坑1基がみられるが、希薄な分布状況を示す。近世に属する<3層>段階において、低部位は水田として利用されており、この地形は近世の作為を反映する可能性もあるが、中世の遺構配置にも有意な関係性を見出せるので、中世に遡る可能性も指摘しておきたい。

第2節 弥生～古墳時代初頭の遺構・遺物

1. 概要

弥生時代中期～古墳時代初頭の遺構として、耕作に関係すると考えられる高まり1か所、井戸1基、土坑11基、溝17条、土器だまり1か所を検出した。前節で示したとおり、この段階は調査区北半部を占める河道が機能していた段階から埋没していく過程にあたり、遺構の種類や分布も埋没の進行にともない変化する。

調査区北半を占める河道は、出土遺物から弥生時代中期には機能していると考えられ、この段階の遺構としてはA地点南東で溝の可能性のある流路1条が河道に取り付くか、切られるかたちで形成されている。その後、河道の埋没は弥生時代後期に急速に進行し、河道埋土の上面を掘り込んで古墳時代初頭の遺構が構築される。

弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構のうち、調査区北半の河道埋没範囲では井戸1基、土坑8基、溝16条、高まり1か所、土器だまり1か所が確認された。微高地をなす<8層>上では土坑3基、溝1条が確認された。遺構の種類、遺構数からは低部位の利用が顕著な状況がうかがわれる。

調査区北半の溝には、北に隣接する第9・11次調査で確認された溝との関連をうかがわせるものがある(図132)。北方から延び溝8に合流する溝は第9・11次調査の溝17に接続する。C地点では溝4が第9・11次調査の溝2、第14次調査の溝1に接続し、長さ約145mにおよぶ。溝6・7は走行方向が第9・11次調査の畦畔8や溝8aと平行する。溝2で確認された円弧を描く掘り方形状は、第9・11次調査の円形溝群や円形高まりと似る。

こうした溝のほか、高まりと関係性の強い溝群がある。CP～CR36～38区で、高まりに沿う位置、走行方向、規模、屈曲点の位置などの要素で共通点のある溝群(溝8～14)が検出された。切り合い関係では基本的に北側の溝から南側の溝へと順次掘削がなされ、最終的に溝15の掘削によって高まりの形成は完了する。第9・11・14次調査地点では、高まりは畦畔で画された耕作地に点在しており、本地点も耕作地にともなうものと推測される。

井戸は耕作地縁部の低部位に単独で位置している。土器だまりは河道・溝5埋没後の低部位に形成されている。土坑はC地点からA地点の高まりにかけては小規模なもの、南側は比較的大型のものが作られる傾向がある。

2. 高まり(図13、図版8)

A地点北半中央から東辺、CP～CR36～38区に位置する。南西部を掘乱し失っている。<6層>で検出した。高まりを成すのは河道埋土である。平面形状は溝15の掘削によって作出されたものである。西部は円弧を描き丸くカーブする。北辺は38～41ラインではやや内湾するものの、西北西～東南東方向をとってはほぼ直線的のび、CP38交点付近で南北方向に屈曲する。CQ38交点やや南で再び屈曲してくびれ部を形づくり、ゆるやかなカーブを描いて調査区東辺へと至る。CR～CS36～38間で確認した南辺は北辺に平行し、緩やかなカーブを描く。平面

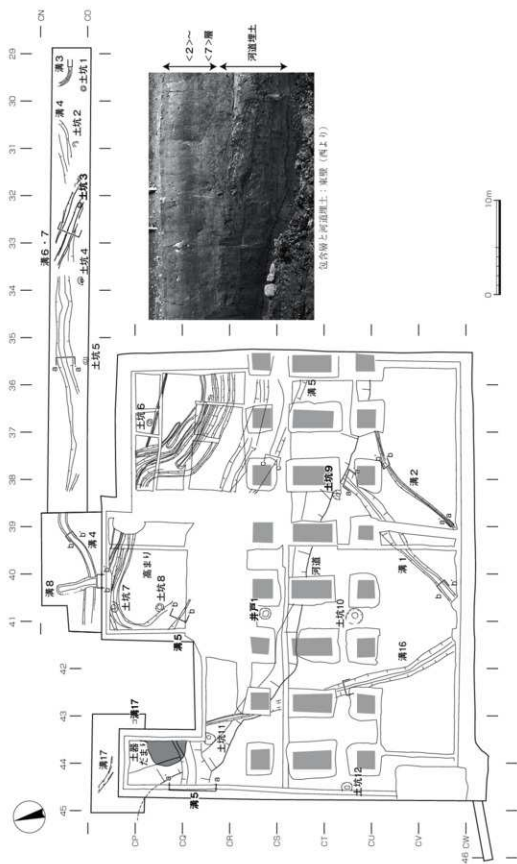


図12 弥生時代中期～古墳時代初期の遺構全体図（縮尺1/400）

規模は東西長約26m、くびれ部西側の南北最大幅約7m、東側の南北幅約2mである。上面の標高はa-a'・b-b'断面で0.87m、c-c'断面で0.63m、底面高(溝15)はa-a'断面で0.58m、c-c'断面で0.4mである。高まりの斜面は溝15の外縁にも広がりをもっており、b-b'断面の斜面下端の標高は0.44m、c-c'断面の南では0.55m、北では0.4mであり、上面との比高はb-b'断面で0.59m、c-c'断面北で0.21mをはかる。

高まりの北辺の形状と相似する溝8・10~15は、高まりと関係性の高い溝である。平面的には高まりの北に幅約2~3mの範囲で掘削され、立体的な関係では高まり法面下の平坦面に位置する。これらの溝の切り合い関係をたどると基本的には北から南に順次掘削しており、溝10・11の掘削が溝で区画される高まり形成の嚆矢となっている。その後、掘削位置を南に移しながら溝8、溝12・13が掘削される。その他、これらの溝に共通すること

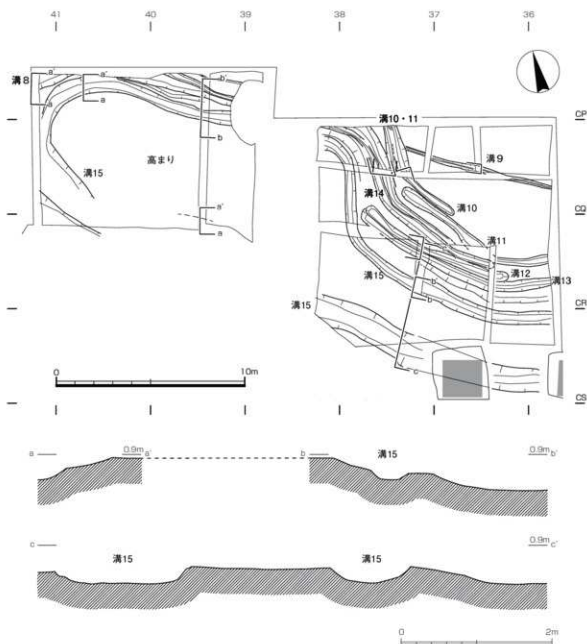


図13 古墳時代初頭の高まり (縮尺1/50・1/200)

として、端部が丸く収束し、長く掘削されないことに注意したい。

高まりの形状を最終的に形成した溝15は、規模、頂部から法面中ほどに上がった掘削位置、一連の掘削で外周をめぐることなどの点で、溝8～14とは異なる規準で掘削されている。隣接する第9・11・14次調査で検出されている高まり・畦畔との関連がうかがわれ、耕作に関係する遺構と推測される。

検出面および周辺遺構との関係から、古墳時代初頭に位置づけられる。

3. 井戸

井戸1 (図12・14・15、図版2・3・42)

A地点中央、CR40区に位置する。A地点中央を東西に貫く建物基礎間で検出された。北側には広く深い擾乱が広がっている。＜5層＞下面で検出した。検出面の標高は0.92m、底面高は-0.2mで、深さは1.12mである。

平面形は、上面では東半は方形、西半は円形を基調とする。底面は隅丸方形を呈する。規模は、上面で直径1.2m、底面で長軸長0.74m、短軸長0.61mである。断面形はU字形を呈する。

埋土は17層に分層される。土色、土質、包含物を指標に五群に大別する。一群は1～3層が該当する。粒径1cm程度のブロックを包含した、褐色系の色調を呈する埋土で、砂質を帯びる傾向がある。1・2層は中央のくぼみ部にレンズ状に堆積する。二群は4～8層が該当する。白色微砂、炭化粒を包含した、褐色系の色調を基調とする砂質土である。4層では炭化粒に加え、焼土塊の包含が散見される。三群は9層が該当する。暗黄褐色砂混じり粘質土で、炭化粒を包含する。四群は10～13層が該当する。灰～灰褐色系の砂質土で、包含物を含まない。五群は14～17層で、暗灰色系の色調を基調とする粘質土～粘土で構成される。各層とも砂のほかに顕著な包含物は認められない。16層では古墳時代初頭の土師器、17層では編籠が検出された。この段階に底部付近において何らかの祭祀的な行為を行ったと考えられる。

遺物は古墳時代初頭の土師器のほか、編籠が出土した。編籠の遺存状態は良くない。保存処理後の計測では、中心部はタテ材、ヨコ材とも幅約3mmの素材を用いている。残存部分からは3本の材を1東に揃えて網代に編んでいるとみられる。外縁部では、中心部から延びる幅約1～2mmの素材をタテ材とする。これに直交するヨコ材は、幅約1mmの細い素材で、1本越え1本滑り1本送りのゴザ目に編んでいる。中心部と外縁部で編み方が変わり、その転換位置が籠の器形の変り目とすれば、網代編み部分か底部、ゴザ目編み部分が体部にあたると考えられる。

本井戸の時期は、検出層および出土遺物から古墳時代初頭に位置づけられる。

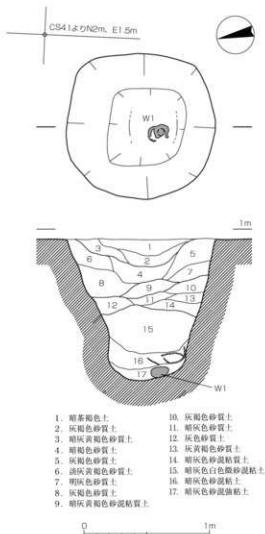


図14 井戸1 (縮尺1/30)

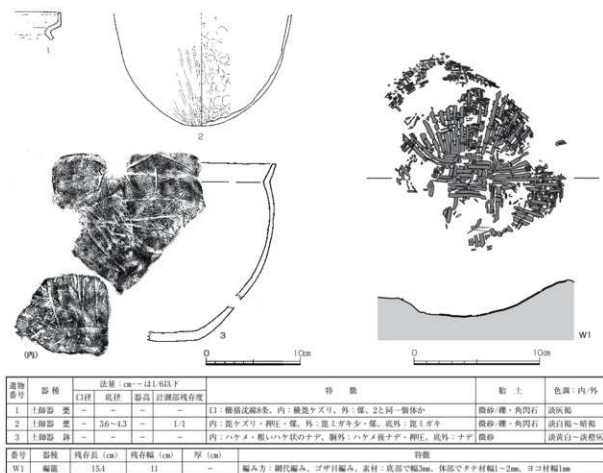


図15 井戸1出土遺物(縮尺1/3・1/4)

4. 土坑

土坑1(図12・16、図版3)

C地点東側、CN29区に位置する。<7層>で検出した。南半部は側溝にかかっているため上半部を失っているが、側溝底面では下半部を確認できた。検出面の標高は0.42m、底面高は0.16mである。深さは0.26mをはかる。

平面形は上面、底面ともに円形で、その規模は上面で径約0.6m、底面で径約0.3mである。断面形はすり鉢状を呈する。

埋土は4層に分層され、土質から上下の土層群に大別される。上半の1・2層は灰色系の砂質土で、1層には粒径1~10cm程度までのブロックを含む。下半の3・4層は灰色系で粘性を有する埋土であり、3層では粒径約5cmの暗灰白色粘土ブロックを含む。遺物は出土していない。

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉~古墳時代初頭と考えられる。

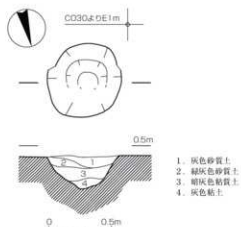


図16 土坑1(縮尺1/30)

土坑2 (図12・17、図版3)

C地点東側、CN30区に位置する。<7層>で検出した。西～南にかけては溝4に切れ、東の一部には上層遺構の落ち割りがかかっているため、平面的には過半を失った状態で確認した。検出面の標高は0.46m、底面高は0.32mで、深さは0.14mをはかる。

過半を失っているものの、残存部からみると平面形は上面で円形、底面でも円形と考えられ、北西～南東方向での規模は上面が径約0.7m、底面が約0.4mである。残存部はわずかなものの、断面形は皿状を呈するとみられる。

埋土は暗橙褐色砂質土で、粒径5cm前後のブロックを含む。遺物は出土していない。

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる。

土坑3 (図12・18)

C地点東側、CN32区に位置する。<7層>で検出した。溝6と重複しており、上部および北半部は溝6によって失われている。検出面の標高は0.47m、底面高は0.34mで、深さは0.13mをはかる。

残存する南半部では、上面の平面形は半円形を呈しており、円形に復元できる。底面も同様に円形を呈すると考えられる。残存部の規模は上面で径約0.55m、底面で径約0.23mである。断面形は皿状を呈する。

埋土は2層に分層される。1層は淡黒灰色土、底面直上の2層はブロックを含む砂質土である。遺物は出土していない。

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる。

土坑4 (図12・19、図版4)

C地点中央部、CN33区に位置する。<7層>で検出した。南半部は側溝にかかっており上半部を失っているが、側溝底面では下半部を確認できている。検出面の標高は0.5m、底面高は0.2mで、深さは0.3mである。

平面形は円形を基調とするが、北～西縁では円弧の膨らみが小さい。底面をみると、北東～南西方向の軸がやや長い楕円形を呈しており、上面の平面形についても楕円形となる可能性が考えられる。残存部の規模は上面で径約0.85m、底面で長軸約0.35m、短軸約0.28mである。断面形は東側で二段掘り状を呈する。西側についても確認できた断面の標高約0.45m付近で傾斜が緩くなっており、調査では確認されなかったものの、これより上方に段が存在していた可能性も考えられる。

埋土は3層に分層される。いずれも灰色系の砂質土で、1・3層では粒径2～3cm大のブロックを多く含む。遺物は出土していない。

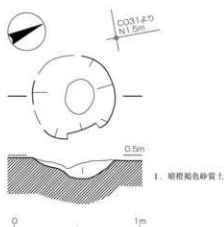


図17 土坑2 (縮尺1/30)

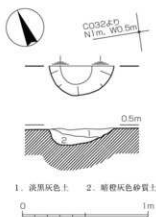


図18 土坑3 (縮尺1/30)

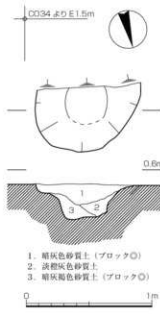


図19 土坑4 (縮尺1/30)

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる。

土坑5 (図12・20、図版4)

C地点中央部、CN35区に位置する。<7層>で検出した。調査区南辺に設定した土層観察用土手内で確認しており、北側は南側溝で失われている。また矢板で画された南西側ではコーナ一部分が調査区外にかかる。検出面の標高は0.47m、底面高は0.27mで、深さは0.2mである。

調査区内で確認できる平面形は、北辺を失っているものの、上面が隅丸方形、底面が南北方向に長軸をとる隅丸長方形と想定される。規模は上面で東西0.72m、底面で南北方向の長軸長0.45m以上、東西0.31mである。断面形は碗状を呈する。

埋土はいずれも黒灰色粘質土であるが、上層の1層には粒径約5cmまでのブロックが包含され、下層の2層は脱色して淡い色調となっており、2層に分層した。遺物は出土していない。

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる。

土坑6 (図12・21、図版4)

A地点北側東部、CP36区に位置する。<7層>で検出した。検出面の標高は0.39m、底面高は0.06mで、深さは0.33mである。

平面形は上面、底面ともに楕円形を呈する。規模は、上面の長軸長0.72m、短軸長0.54m、底面の長軸長0.27m以上、短軸長0.23mである。断面形は逆台形を呈する。

埋土は4層に分層される。中層に薄く堆積する暗灰色砂質土の3層のほかは粘性を有する暗褐色～黒色の色調を基調とする埋土が主体をなす。1層は層厚約0.2mと厚く、明黄褐色砂質土ブロックの包含が認められる。遺物は出土していない。

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭と考えられる。

土坑7 (図12・22、図版4)

A地点北側中央部、CP40区に位置する。<7層>で検出した。検出面の標高は0.52m、底面高は0.12mで、深さ0.4mである。北側は北側溝で失われている。

平面形は、上面では楕円形を呈している。底面についても上面の平面形と北半の遺存部分から楕円形となると想定される。規模は上面の長軸長0.99m以上、短軸長0.84m、底面の長軸長0.52m、短軸長0.48mである。断面形は逆台形を呈すると推測される。

埋土は3層に分層される。いずれも灰～灰褐色系の砂質土で構成される。1・2層では黄色砂の包含が認められる。遺物は

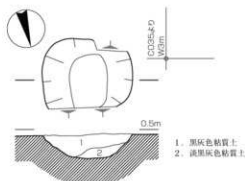


図20 土坑5 (縮尺1/30)

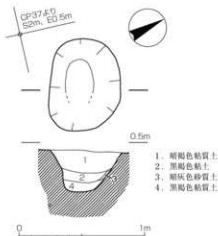


図21 土坑6 (縮尺1/30)

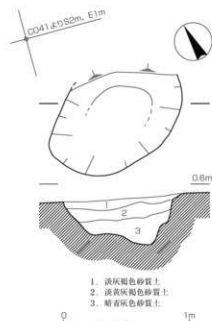


図22 土坑7 (縮尺1/30)

出土していない。

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初期と考えられる。

土坑8 (図12・23、図版5)

A地点北側中央部、CP40区に位置する。<7層>で検出した。検出面の標高は0.6m、底面高は0.08mで、深さは0.52mである。南西の一部に裁ち割りがかかるものの、遺存状況は良い。

平面形は上面で隅丸方形、底面では東半が円形、西半が隅丸方形を呈する不整形円形となる。規模は上面で長軸長0.88m、短軸長0.77m、底面で長軸長0.48m、短軸長0.46mである。断面形は逆台形を呈する。

埋土は6層に分層されるが、土質・包含物の有無により三群に大別される。上層群をなす1・2層は灰褐色系の砂質土である。これ以下は断面形がレンズ状を呈した粘性をもつ埋土で構成される。中層群の3・4層は灰色系の粘土で、白色砂ブロックを包含する。下層群の5・6層は黒灰色系の粘土である。白色砂ブロックに加え、炭を包含することが特徴である。5層は3・4・6層と比して層厚が薄い。遺物は出土していない。

本土坑の時期は検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初期と考えられる。

土坑9 (図12・24、図版5・6)

A地点中央南東寄り、CT38区に位置する。<8層>で検出したが本来は<5層>に帰属する。検出面の標高は0.83m、底面高は0.04mで、深さは0.79mである。南辺および東側上端の一部に裁ち割りがかかるが、南辺では裁ち割り底面で掘り方を検出した。

平面形は上面では円形を呈するものと考えられる。底面は楕円形を呈する。規模は上面で径約1m、底面で長軸長0.44m、短軸長0.33mである。断面形はY字状を呈する。

埋土は6層に分層される。1層はレンズ状に堆積した淡灰褐色砂質土である。3・4層を構成する淡灰褐色砂質土が本土坑の法面に沿って堆積後、2層の黒褐色砂質土が中央を充填するように堆積している。4層以上は断面図の堆積状況から流入土と考えられる。土坑法面の屈曲点以下では、黒灰褐色砂質土の5層が約0.2～0.25mの厚さで、淡黒灰色粘質土の6層が約0.25～0.3mの厚さで堆積している。遺物は土師器小片が出土している。

本土坑の時期は出土遺物から古墳時代初期と考えられる。

土坑10 (図12・25、図版6)

A地点中央南西寄り、CT40・41区に位置する。<8層>で検出したが本来は<5層>に帰属する。検出面の標高は0.85m、底面高は0.18mで、深さ0.67mである。重複する上層遺構によって西側

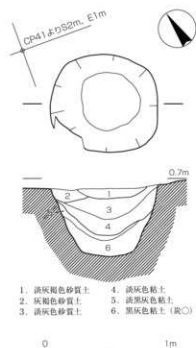


図23 土坑8 (縮尺1/30)

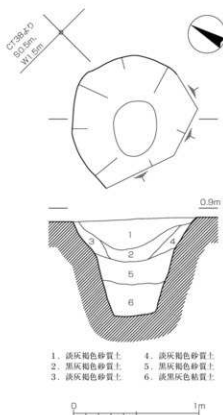


図24 土坑9 (縮尺1/30)

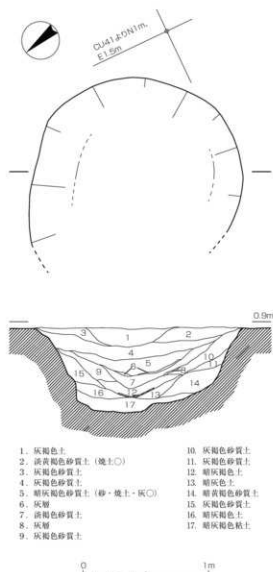


図25 土坑10 (縮尺1/30)

本土坑の時期は出土遺物から古墳時代初頭と考えられる。

土坑11 (図12・26、図版7)

A地点北西部、CQ43区に位置する。<5層下面>で検出した。検出面の標高は0.99m、底面高は0.35mで、深さは0.64mである。北側は傾溝で失われている。

平面形については、上面では西側に張り出す不整な円形を呈すると推定される。底面はほぼ円形を呈している。規模は上面で径1.32m、底面で径0.41mである。断面形は東側では検出面以上の状況が明瞭ではないが、西側の形状を参考にすると二段掘りを呈していた可能性も推定される。

埋土は7層に分層されるが、色調・土質・包含物から四群に大別する。一群は1・2層で構成される。灰褐色系の埋土で鉄やマンガンの集積が認められる。二群は鉄分の沈着がみられる褐色系の砂質土で、3・4層が該当する。本群には土器がまとまって包含されていた。三群を構成する5・6層は灰褐色系の砂質土で、暗黄褐色砂ブロックを包含する。最下の7層は暗灰色粘質土ブロック等を多く包含するため四群とした。人為的な埋め戻し

の一部が失われている。

平面形は上面でやや歪な円形、底面は凹凸のため明瞭には形状をとらえられなかったが、上面と同様、円形を呈すると考えられる。規模は上面で径約1.63m、底面は、断面図北側の標高約0.25m付近の屈曲点と南側の標高約0.4m付近の屈曲点間をとった場合、径約1.1mとなる。断面形については、底面に凹凸がみられるものの、大局的には逆台形の範疇として捉えられよう。

埋土は17層に分層されるが、色調・土質・包含物等から五群に大別する。一群は1～4層で構成される。灰褐色砂質土が主体で、ブロックを多く包含し、焼土塊が混入する土層群である。二群は5・6層が該当する。6層は灰の単純層であり、上位の5層では焼土塊・灰の混雑層と砂層が互層状をなしていることが観察されている。なんらかの祭祀的行為が行われた可能性があることを示唆する層群と評価される。三群は7～12層で構成される。灰～灰褐色系の砂質土が主体で、ブロックの混入がみられる層群である。本群にも8層で灰の単純層が確認されているが、6層ほど明瞭ではない。四群は13～16層で構成される。砂質を帯びる暗灰色系の埋土が主体である。ブロックの混入が認められる。五群は17層が該当する。本層のみ粘性の強い粘土が堆積している。本土坑では二群でもっとも明瞭に炭・焼土層が観察されているが、一～三群のいずれも炭や焼土塊およびブロックの包含が認められ、複数回にわたる祭祀的行為が継続的に行われていたことが考えられる。

遺物は古墳時代初頭の土師器片が出土している。12層下部では壺胴部の大型破片が12層と13・16層との層界面に沿って出土した。

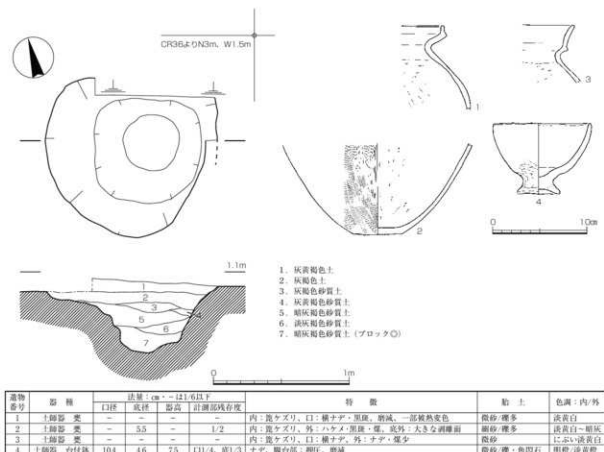


図26 土坑11・出土遺物 (縮尺1/4・1/30)

土や周囲からの崩落土の可能性が考えられる。

遺物は古墳時代初頭の土師器が出土した。本土坑の時期は出土遺物から古墳時代初頭と位置づけられる。

土坑12 (図12・27・28、図版8)

A地点西辺中央、CT44区に位置する。西側を西側溝で失っている。<8層>で検出した。検出面の標高は0.97m、底面高は0.69mで、深さは0.28mである。

平面形は上面、底面ともに楕円形である。規模は上面で長軸長1.19m、短軸長0.91m以上、底面で長軸長0.53m、短軸長0.3mである。断面形は皿状を呈する。

埋土は5層に分層されるが、土質や包含物から三群に大別される。上層の1層は淡黒灰色土で、焼土塊・炭を包含する。中層の2・3・4層は橙灰褐色系の色調で砂質で砂質を帯びる埋土が主体の一群で、鉄分の沈着がみられる。下層の5層は淡橙色砂質土である。鉄分の著しい沈着が認められ、ブロックを多く包含する特徴がある。堆積状況を見ると、中層3・4層では法面沿いの周縁部で5層を掘りこむ層理面のラインとなる。

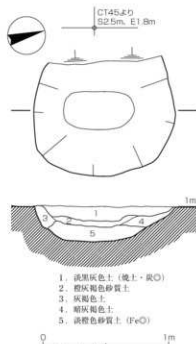


図27 土坑12 (縮尺1/30)

遺物は古墳時代初頭の土師器が出土している。本土坑の時期は出土遺物から古墳時代初頭と位置づけられる。



遺物番号	部 種	法量：cm・-は1/5以下				特 徴	胎 土	色調：内/外
		口径	底径	器高	計測部残存度			
1	土師器 壺	-	-	-	-	内：縦位斑ミガキ、外：縦位斑ミガキ・黒斑、磨滅、表面剥離	微砂・粗砂	明橙
2	土師器 鉢	15	-	-	1/5	内：剥離、外：斑ミガキ、高杯の可能性あり	微砂・細～粗砂	橙・淡橙

図28 土坑12出土遺物（縮尺1/4）

5. 溝

溝1（図12・29、図版11）

A地点南半中央部、CT37区からCV40区に位置しており、北側の一部は建物基礎の攪乱で失われている。ここでは溝として報告するが、急に深まる底面高や断面形で同層検出の溝2とは異なっている。また、本溝のほかにも、明確に弥生時代中期に位置づけ得る遺構は、隣接の調査区にもない。以上から本溝は自然流路の可能性も想定される。

流路の方向は北東-南西を志向しており、わずかな蛇行はあるもののほぼ直線的に走行する。調査区内で長さ約18mを検出した。北側は河道に切られているが、接続している可能性もある。検出面は<8層>で、検出上面の標高は0.55~0.84m、底面高は0.28~0.59mで、深さは0.06~0.48mである。

底面高からは南西から北東へと下がる傾斜となっており、特に河道付近で大きく底面高を下げる。幅は北側で1.83mをはかるが、検出高の低かった南側では約0.6mである。断面形は浅いところでは皿状、深いところでは碗状となるが、いずれも底面が丸く湾曲する形状である。

底面高の高い南側では削平をうけており、わずかに底面付近の埋土が観察された。b-b'断面では青灰黄色の粘質土で、鉄分の沈着がみられる。河道に近接するa-a'断面では、底面高が大きく下がっており、埋土は4層に分層される。1~3層は橙褐色~灰褐色の砂質土で、鉄分の沈着がみられ、2層では下方に有機物の包含が認められた。底面直上に堆積する4層は暗灰褐色粘質土で、鉄分を含む。

遺物は出土していない。切り合いまたは接続する関係にある河道では弥生時代中~後期の遺物が出土しており、本溝の時期については弥生時代中~後期の幅のなかで考えたい。

溝2（図12・30、図版11）

A地点南半東側、CU37~CV39区にかけて、北東-南西方向で、北に弧状にふくらむカーブで走行する。調査区内で長さ約13mを検出した。北側は建物基礎の攪乱にあたり、それより先は検出されないため、河道との関係は不明である。検出面は

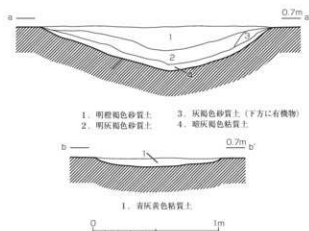


図29 溝1断面（縮尺1/30）

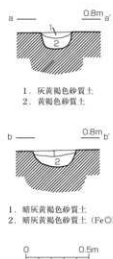


図30 溝2断面（縮尺1/30）

<8層>で、検出上面の標高は0.7～0.73m、底面高は0.55～0.58mで、深さは0.13～0.18mである。底面高から溝の傾斜は南西から北東へと下がるものとなっている。幅は0.24～0.35mである。断面形は楕状を呈する。埋土は2層に分層される。1層は灰黄褐色砂質土で鉄分の沈着がみられる。2層は暗灰黄褐色砂質土で鉄分の沈着が1層よりも顕著である。

遺物は出土していない。河道および<7層>との関係が不明であるため、所属時期は弥生時代中期～古墳時代初頭の幅のなかで考えておきたい。

溝3 (図12・31)

C地点東端、CN29区に位置する。北西～南東で弧状にカーブする。調査区内では長さ約2mを検出したが、北・東側で調査区外へと延びていくものとみられる。検出面は<7層>で、検出上面の標高は0.46～0.49m、底面高は0.4～0.44mで、北西から南東へと下がる傾斜である。深さは0.06mである。幅は0.4mで、断面形は皿状を呈する。第9・11次調査を参照すると、円形にめぐる溝の一部である可能性が高い。

遺物は出土していない。検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭に属すると考えられる。

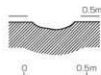


図31 溝3断面 (縮尺1/30)

溝4 (図12・32、図版11)

B・C地点を東西に走行、CN29～CQ41区に位置する。第9・11・14次調査の溝に接続し、本調査区内では長さ約53mを検出した。東西方向を基調とするが、約15mの間隔で小さな蛇行を繰り返す。東西端とも調査区外へと延びている。検出面は<7層>で、検出上面の標高は0.4～0.69m、底面高は0.24～0.55mで、東から西へと下がる傾斜である。深さは0.14～0.26mである。幅は0.63～1.73mで、断面形は楕状を呈する。

B地点では上半を削平され、わずかに底面近くの埋土が確認された。暗橙灰褐色砂質土で、鉄分の沈着が顕著であり、粘土ブロックの包含が認められる。a-a'断面では3層に分層される。1・2層は暗橙灰褐色砂質土で、鉄分の沈着が顕著である。3層は黒灰～灰色粘質土で、粘土ブロック、有機質の包含が認められる。

遺物は出土していない。接続する第9・11調査の溝2、第14次調査の溝1の時期から、弥生時代後期後半に位置づけられる。

溝5 (図12・33・34、図版12)

A地点北半をCQ・CRラインにまたがり、北北西～東南東方向に走行する。A地点北半中央部には大規模な攪乱が入るうえ、北西部には凹字状に調査対象地があるため、連続的に確認できなかったが、走行方向、断面形や底面のレベル等で共通性が高く認められる溝を同一のものと判断した。調査区内での長さは約45mの確認となる。東端、西端ともに調査区外へ延びる。検出面は<5層下面>で、検出上面の標高は0.2～1.1m、底面高は-0.26～0.34mで、北西から南東へと下がる傾斜である。深さは0.37～1.36mである。幅は5.21m、断面形は二段掘りを呈する。

<5層下面>まで掘り方がこのa-a'断面(調査区西壁)の埋土は16層に分層される。土質・土色・包含物・層序から四群に大別する。一群は1～9層が該当する。灰褐色～灰色系の砂質土で構成される。上半の1～6層には鉄分の沈着やマンガンの凝集が認められる。1～8層の層理面は緩い弧状を呈するが、9層の層理面は

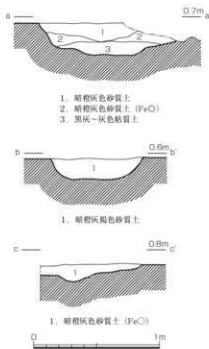


図32 溝4断面 (縮尺1/30)

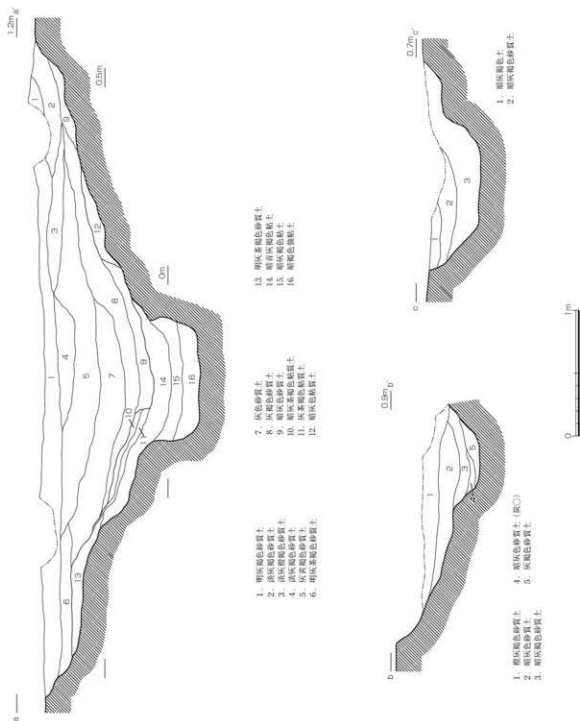


図33 溝5断面 (縮尺1/30)

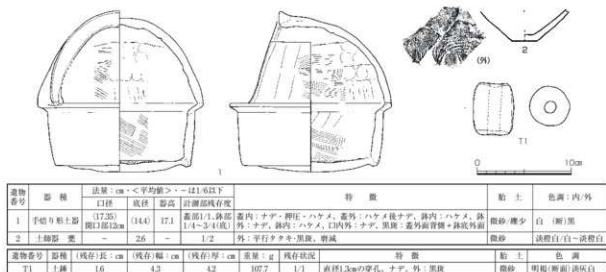


図34 溝5出土遺物 (縮尺1/4)

直立気味の急な角度で立ち上がっており、再掘削がなされたものと考えられる。二群は10～12層が該当する。暗灰～茶褐色系の色調を呈する粘質土である。層中に白色微砂をラミナ状に含む。三群は13層が該当する。暗灰茶褐色砂質土で、鉄分、微砂ブロックを含む。四群は14～16層で、暗灰褐色～暗褐色の粘土である。特に16層は粘性が強い。炭や有機物の包含が認められる。

遺物は古墳時代初頭に属する土師器、土師が出土している。このうち手捏り形土器は蓋部、鉢部、底部のパーツに分離していたものの、一か所にまとまって出土した。出土遺物から古墳時代初頭に属すると考えられる。

溝6・7 (図12・35、図版12)

C地点中央東寄り、CN31～33区に位置する。二条が並行しており、溝6は北東側の溝7に切られる。調査区内で長さ約7mを検出した。北西から南東方向に走行し、両端部は調査区外へと延びている。検出面は<6層>である。溝6の検出上面の標高は0.6～0.65m、底面高は0.26～0.33mで、南東から北西へと下がる傾斜である。深さは0.32～0.34mである。残存する範囲では幅0.98mである。断面形はボール状を呈する。溝7の検出上面の標高は0.6m、底面高は0.23～0.35mで、南東から北西へと下がる傾斜である。深さは0.25～0.37mである。幅は0.68～1.03m、断面形は平坦部がわずかではあるが、二段掘りを呈する。

埋土は溝6が7層、溝7が5層に分層される。溝6は砂質土を主とする埋土で、7・10・12層にはブロックの包含がみられる。溝7も同様に砂質土を主とする埋土で構成され、4層にはブロックの包含がみられる。

遺物は出土していない。検出層からともに古墳時代初頭に属すると考えられる。

溝8 (図12・13・36、図版13)

本溝は一部が調査区外や土層観察用土手にかかるため、連続的に検出・確認できていないが、平面的な位置関係および断面形、底面の標高などから、A地点北辺中央から東側、CO39～41区、CP・CQ36・37区に位置する

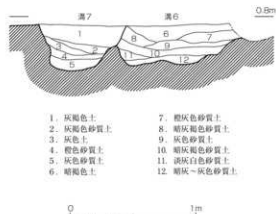


図35 溝6・7断面 (縮尺1/30)

溝と、B地点中央を南北に走行、CN・CO40区に位置する溝が合流すると考える。また、A地点では、調査区中央と東側との間は上層遺構により失われているため、こちらも連続的に検出・確認できてはいないが、走行経路、底面高、断面形などから同一の溝と判断している。

調査区内で検出できた溝の長さは、A地点で約23m、B地点で約4mである。A地点北辺の西端部はさらに西に向かっており、調査区外へと延びている。調査区中央北辺では北壁に沿って東西方向を基調とした緩いカーブを描いており、一部は北壁に入り込んでいる。東側では、東西方向を基調とした軸線で北西から延びてきた溝が屈曲し、北北西-南南東の軸へと転じると、南に向かって徐々に浅くなり消失する。検出面は<7層>で、検出上面の標高は0.36~0.61m、底面高は0.24~0.34mで、A地点では南東から北西、東から西へと下がる傾斜、B地点では北から南へと下がる傾斜である。深さは0.04~0.31mである。

溝の掘り方は、A地点東側のCP・CQ36・37区では南~西に並行する溝14に切られ、北辺では北側溝で失われている。残存する溝幅は0.65~1.65mとなる。断面形は皿状を呈する。B地点では幅は1.25m、断面形は皿状で凹凸がみられる。

埋土は2層に分層される。1層が黒灰色粘質土、2層が黄褐色砂質土である。2層には粒状やブロック状の黒褐色粘土が包含されていることが観察されている。

遺物は出土していない。検出層から、弥生時代後期後葉~古墳時代初頭に属すると考えられる。

溝9 (図12・13・37)

A地点北辺東半部、CP35~37区に位置する。調査区内で長さ約8mを検出した。北北西-南南東に直線的に走行する。東側は調査区外に延びる。西側は重複する溝10・11に切られ、それ以西では確認できなかった。検出面は<7層>で、検出上面の標高は0.41~0.45m、底面高は0.39~0.41mと差が小さく、傾斜方向の特定は難しい。深さは0.02~0.05mである。幅は0.29m、断面形は皿状を呈する。

埋土は底面付近に堆積した暗褐色粘質土が確認された。

遺物は出土していない。検出層から、弥生時代後期後葉~古墳時代初頭に属すると考えられる。

溝10・11 (図12・13・38、図版13)

A地点北東部、CQ35・36、CP36・37区に位置する。調査区内で長さ約6mを検出した。溝10は西に並行する溝11に切られる。溝10は北西-南東方向を基調とするが、CP37区中央付近で屈曲点がみられる。東端は深度を減じ取束する。北側は調査区外へ延びるが、C地点に該当する溝がないこと、屈曲点の位置関係が周囲の溝と同じであることから、土層観察用土手から未調査域の範囲で屈曲し、北北西方向に延びるものと推測される。

溝11は北西-南東方向を基調とする。CP37区中央付近の側溝で屈曲点が見失われているが、溝10の南西に並行する溝に接続すると考えられる。北端・東端ともに調査区外へ延びるが、

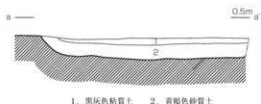


図36 溝8断面 (縮尺1/30)



図37 溝9断面 (縮尺1/30)

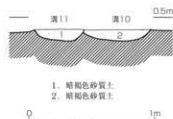


図38 溝10・11断面 (縮尺1/30)

北端は溝10と同様の理由により未調査域で屈曲し、北北西に延びるものと推測される。

検出面は<7層>である。溝10の検出上面の標高は0.39～0.42m、底面高は0.3～0.34mで差が小さく、傾斜方向の特定は難しい。深さは0.06～0.16mである。幅は0.26～0.53m、断面形は皿状や椀状を呈することが確認されている。溝11の検出上面の標高は0.34～0.43m、底面高は0.31～0.35mで、差が小さく、傾斜方向の特定は難しい。深さは0.04～0.11mである。幅は0.29～0.49m、断面形は皿状や椀状を呈することが確認されている。

埋土はともに1層のみ確認された。いずれも暗褐色砂質土で、鉄分の沈着、マンガンの凝集が認められる。

遺物は出土していない。検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初期に属すると考えられる。

溝12・13 (図12・13・39)

A地点北東部、CP37・CQ36・37区に位置する。溝12は調査区内で長さ8.3m、溝13は長さ約11mを検出した。溝12は南に並行する溝13に切られる。ともに北西～南東方向を基調とする。溝12は北西端、南東端ともに深さを減じながら取東、溝13は北西端では深さを減じながら取東するが、南東は調査区外へと延びる。検出面はいずれも<7層>である。溝12の検出上面の標高は0.34～0.44m、底面高は0.18～0.34mで、深さは0.1～0.16mである。幅は約0.5～0.7m、断面形は皿状を呈する。溝13の検出上面の標高は0.32～0.47m、底面高は0.18～0.26mで、深さは0.08～0.29mである。幅は約0.35～0.7mで、断面形は皿状～ボウル状を呈する。

溝12の埋土は褐色を呈する砂質土で鉄分の沈着がみられる。溝13は3層に分層される。灰～褐色の色調を呈する粘質土で、一部で鉄分の沈着が認められる。遺物は弥生時代後期～古墳時代初期の土器小片が出土している。

出土遺物から古墳時代初期に属すると考えられる。

溝14 (図12・13・40)

A地点北東部、CO39・CP37・38・CQ36・37区に位置する。調査区内で長さ約21mを検出した。北～東に並行する溝8を切る。北西～南東方向を基調とする。南東端は深さを減じながら取東する。北西はA地点の調査区外へと向かうが、B地点では該当する溝は確認されておらず、両地点の土層観察用土手内や境界部のなかで取東している可能性もある。検出面は<7層>で、検出上面の標高は0.3～0.47m、底面高は0.2～0.29mで、深さは0.08～0.22mである。幅は0.36mで、断面形は椀状を呈する。埋土は暗灰褐色砂質土で砂のブロックを含む。遺物は出土していない。

検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初期に属すると考えられる。

溝15 (図12・13・41、図版13)

A地点東部、CO～CRライン、35～42ラインで画される範囲において、高まりを取り囲むように掘削された溝である。調査区東側では、稠密に掘削される溝10～14の南側に沿って掘削される。これらの溝とは屈曲点の位置や、走行方向などの点で強い共通性がみられる。調査区北辺では、凸字状に入り込む調査区域外東辺土手に接する位置で大きく弧状にカーブし、高まりを画すように再び北西～南東方向に延びている。東辺ではCRライン側の掘り方、CSライン側の掘り方ともに調査区外へと延びる。

検出面は<6層>で、検出上面の標高は0.66～0.94m、底面高は0.51～0.62mで、深さは0.11～0.34mである。幅は1.05～1.8mで、断面形は皿状を呈する。

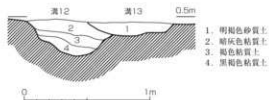


図39 溝12・13断面 (縮尺1/30)

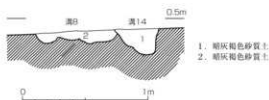


図40 溝14断面 (縮尺1/30)

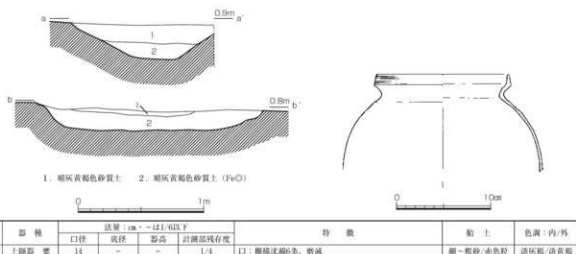


図41 溝15断面・出土遺物 (縮尺1/4・1/30)

各断面とも埋土は1～2層に分層される。高まり西側では上位に暗茶褐色土、下位に灰～灰褐色砂質土が堆積する。鉄分の沈着やブロックの包含が認められる。高まり西側では灰褐色の色調を呈する砂質土が主で、包含物はみられない。遺物は古墳時代初期の土師器が出土している。

出土遺物から古墳時代初期と考えられる。

溝16 (図12・42、図版13)

A地点西側、41～43ライン間において南北方向に掘削される。調査区内では26.5mを検出した。南北とも調査区外へと延びる。検出面はく7層で、検出上面の標高は0.22～0.72m、底面高は0.1～0.24mで、深さは0.1～0.55mである。南から北にむかって傾斜する。幅は約1.2～1.35mである。断面形はY字形を呈する。

埋土は6層に分層される。そのうち1～5層は灰褐色～褐色の色調を呈する砂質土、最下の6層は暗灰色粘土である。4層以外のすべての層に地山を起源とするブロックの包含が認められる。遺物は出土していない。

検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初期と考えられる。

溝17 (図12・43)

D地点を北西～南東方向に走行する。CO43・44区に位置する。上層の溝26と位置が重複しており、遺存状態は良くないが、調査区内では約9mを検出した。北西端、南東端とも調査区外へと延びる。検出面はく7層で、検出上面の標高は0.74m、底面高は0.53mで、深さは0.21mである。北西から南東方向に下がる傾斜を有する。幅は0.3m以上で、断面形は碗状である。

埋土は3層に分層される。いずれも灰色を基調とする粘質土で、グライ化の影響による緑化もみられる。1層で粘土ブロック、2・3層で砂ブロックを多く含む。遺物は出土していない。

検出層から、弥生時代後期後葉～古墳時代初期と考えられる。

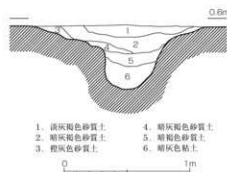


図42 溝16断面 (縮尺1/30)

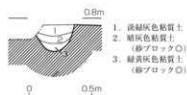


図43 溝17断面 (縮尺1/30)

6. 土器だまり

土器だまり 1 (図12・44～49、図版9・10・34～36)

調査区北西、CP43・44区に位置する。東側は側溝、北側は攪乱で失われている。<5層>で検出した。本地点は弥生時代中～後期の河道が埋没した位置にあたる。また、南側は幅広で深度の大きい溝で、古墳時代初頭に位置づけられる溝5に重複しており、溝5の埋没後に形成された、南西から北東にむかって下がる緩斜面のなかの窪地を利用したものとみられる。窪みの規模は、現状で南北4.05m、東西2.9m、深さ0.21mである。このうち、土器が集中するのは、現存部の南半および断面ライン以北では東寄りの約1/3の範囲である。形状をとどめた

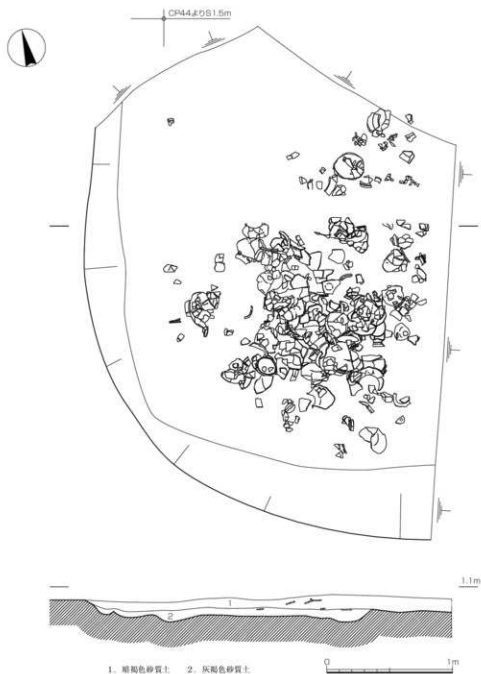
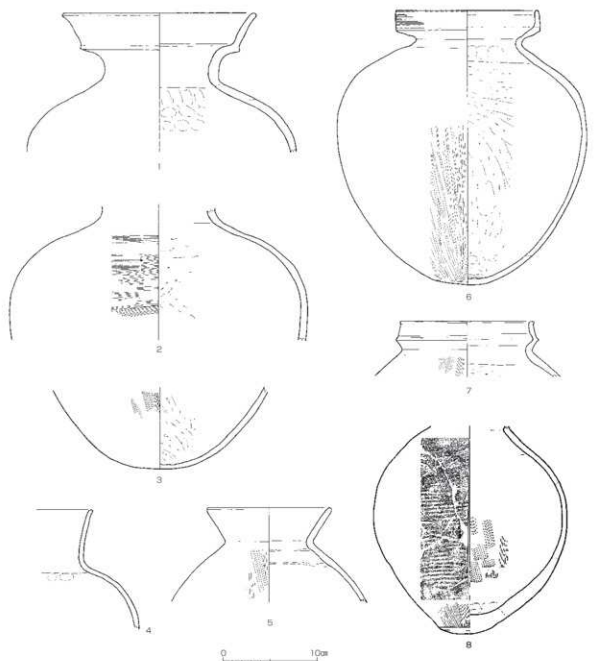


図44 土器だまり 1 (縮尺1/30)



遺物番号	器種	法量: cm - -は1/6以下				特徴	胎土	色調: 内/外
		口径	底径	器高	計測部残存度			
1	土師器 壺	206	-	-	1/2	滑減。内: 胴部押圧・頸部ナデ。口: 横ナデ・内面上半は橙色化	微砂・細砂	黄橙
2	土師器 壺	-	-	-	-	内: 滑減顯著・蓋ケズリ。外: ハケメ・頸部はナデ・滑減大・滑減	細砂	橙紅
3	土師器 壺	-	-	-	1/1	内: 蓋ケズリ。外: 浅いハケメ・ナデ・黒炭。底外: ナデ	細砂多	明紅/暗灰-黄灰紅
4	土師器 壺	-	-	-	-	滑減。内: 灰白色の付着小粘土塊が点在。外: 横段ハケメ。焼成不良?	微・細砂/角閃石	灰白-暗灰紅/橙紅
5	土師器 壺	132	-	-	1/4	滑減。内: 蓋ケズリ・粘土帯接合痕明確。外: ハケメ。口: 滑減微	微砂/角閃石	暗灰紅
6	土師器 壺	151	5.6	291	1/1-3/4	口: 懸橋比縮10%以上。内底: 押圧。外: 蓋ミガキ・黒炭	微砂・細砂	暗灰/淡黄灰紅
7	土師器 壺	142	-	-	1/5	内: 蓋ケズリ。外: ハケメ。口~頸部: 横ナデ	微・細砂/角閃石	暗灰紅/黄紅
8	土師器 壺	-	5.6	-	1/2	内: ハケメ・押圧。外: タタキ・下蓋ハケ・縦部ナデ・黒炭・表面劣化	微・細砂/多	黒灰/橙紅-暗紅

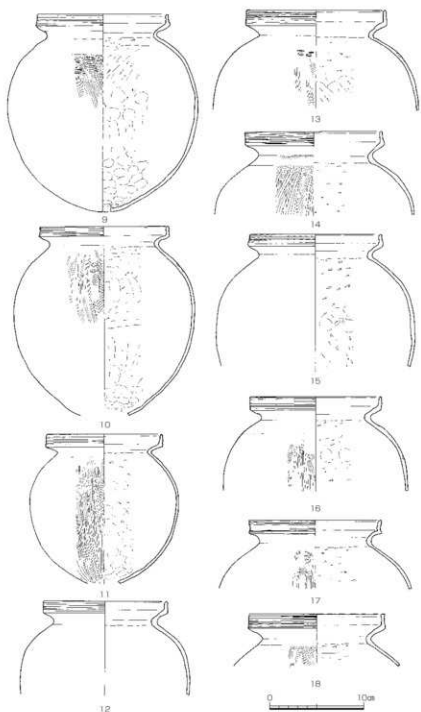
図45 土器だまり1出土遺物1) (縮尺1/4)

大型部位片をこの個体が多くみられることから、原位置をほぼ保っていると考えられる。また、幅約0.3～0.4mの東側溝および東側溝を隔てた東側壁面では顕著な土器の包含は認められていない。北側の攪乱からは、本来、本土器だまりに包含されていたとみられる土器の出土はわずかであった。以上から、図44に示した土器検出状況が、土器が置かれた元来の範囲をほぼ示していると考ええる。この場合、土器分布域の規模は、南北約2.7m、東西約2.2mとなる。

さらに、この範囲のなかでも土器分布には粗密がみられる。図44断面において一段深く窪む2層の範囲では、複数の土器が重なり合った、密な状態で検出されている。一方、その周縁部では平面的にも垂直分布においても密度が低い。

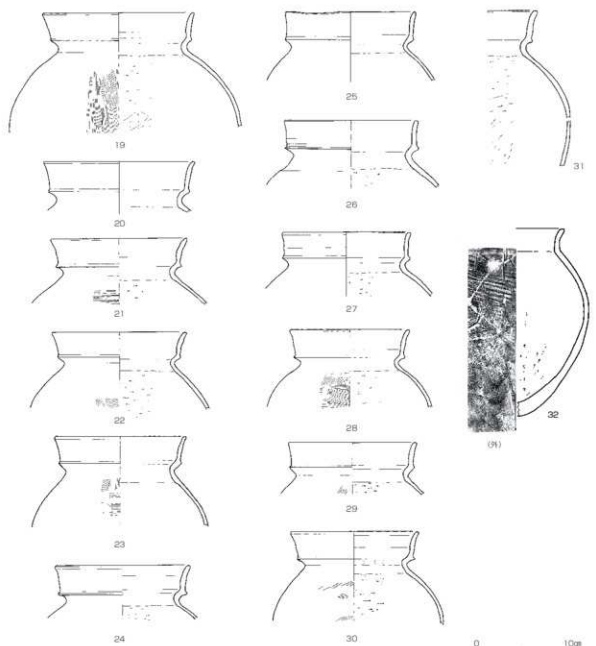
器種別の分布については、特定の器種が偏在するなどの事象は特に認められなかった。

遺物はコンテナ12箱が出土した。土器の器種としては、壺、甕、高杯、鉢、器台、製塩土器、手埴り形土器が確認された。土器以外では、石鏃



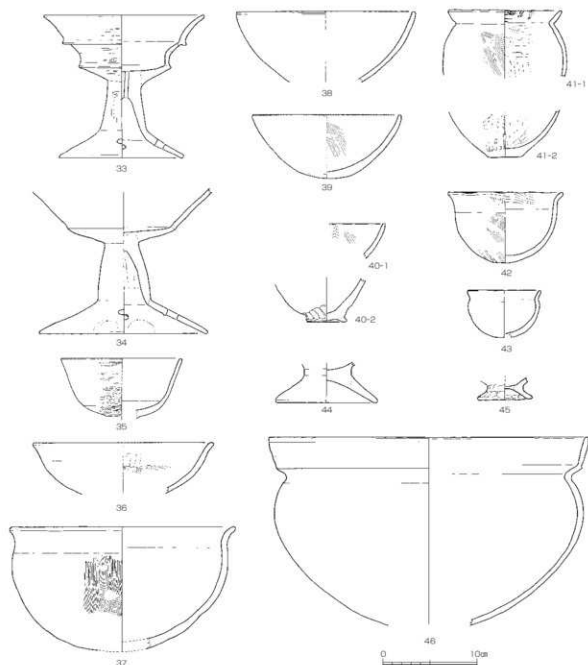
遺物番号	器種	法量: cm (測定値)・- (1/6以下)	口径	底径	器高	計測部残存状況	特徴	胎土	色調: 内外
9	土師器 甕	139	3.2	-	21	(11.2, 額3.4)	口: 輪縁沈陥4条、内底: 僅、外: ハケメ・肩部タテキ重・磨滅・僅・紫色	細砂・角四石多	磨光・明褐色
10	土師器 甕	136	-	-	-	(13.4, 額1.2)	口: 輪縁沈陥6条、外: ハケメ・ガキ(上平)・割突文1か所2点・僅・紫色	細砂・角四石多	灰黒・明褐色
11	土師器 甕	13	-	(16.2)	-	1.3	口: 輪縁沈陥7条、外: ハケメ・ガキ(上平)・僅・紫色	細砂・角四石多	淡灰褐色
12	土師器 甕	132	-	-	1.2	口: 輪縁沈陥4条、内: 荒ケズリ、外: 僅、磨滅、赤色粒多い	細砂・礫・角四石多	淡灰褐色	
13	土師器 甕	148	-	-	1.4	口: 輪縁沈陥10条、内: 荒ケズリ、外: ハケメ・割突文1か所4点・僅、磨滅	細砂・礫・角四石多	灰黒・磨光～灰褐色	
14	土師器 甕	144	-	-	1.2	口: 輪縁沈陥8条・土具痕、内: 荒ケズリ、外: ハケメ・荒ミガキ	細砂・礫・角四石多	明褐色	
15	土師器 甕	14	-	-	1.4	口: 輪縁沈陥6条、内: 荒ケズリ一部押圧、外: 磨滅・粗熟	細砂・礫・角四石多	淡・橙灰褐色	
16	土師器 甕	14	-	-	(11.4, 額1.2)	口: 輪縁沈陥6条、内: ケズリ・押圧、外: ハケメ・ガキ・僅、割突文1か所1点	細砂・礫・角四石多	淡橙白～淡灰褐色	
17	土師器 甕	14	-	-	1.2	口: 輪縁沈陥8条、内: 荒ケズリ、外: ハケメ・荒ミガキ・僅少	細砂・礫・角四石多	淡灰褐色	
18	土師器 甕	144	-	-	1.3	口: 輪縁沈陥11条、内: 荒ケズリ、外: ハケメ	細砂・礫・角四石多	淡灰褐色・磨光	

図46 土器だまり1出土遺物2(縮尺1/4)



遺物 番号	形 種	法様 : cm <平均値> - -は1.6以下			特 徴	胎 土	色調 : 内/外
		口径	底径	器高			
19	土師器 甕	16.1	-	-	1/2	口縁平高。内：荒ケズリ。外：縦位ハケメ。磨滅	瀬砂/角閃石 淡褐色/橙褐色～黄褐色
20	土師器 甕	16	-	-	1/4	口：横ナデ。磨滅	瀬砂/瀬砂多 褐色
21	土師器 甕	15	-	-	1.5+	外：ハケメ(縦・横)。内外：表面網線顕著。外：黒斑。口径不安定。磨滅	瀬～瀬砂/角閃石 褐色/褐色
22	土師器 甕	14.3	-	-	1/4	内：荒ケズリ。外：ハケメ。口外・器内：網線多。磨滅。口外：黒斑	瀬～瀬砂/角閃石 暗褐色～灰褐色
23	土師器 甕	14	-	-	3/4	外：ハケメ(縦・横)。磨滅	瀬～瀬砂/角閃石 褐色～淡灰褐色
24	土師器 甕	14.3	-	-	1/3+1/4	内：荒ケズリ。口～肩部外：横ナデ	瀬～瀬砂/角閃石 淡褐色/褐色
25	土師器 甕	12.8~14	-	-	□1/2, 圓1/4	口：器大。磨滅。灰色強い。焼成不良?	瀬～瀬砂/角閃石 淡(赤)灰
26	土師器 甕	14.2	-	-	□1/2, 圓1/3	内：荒ケズリ。口：強い横ナデ。器大	瀬～瀬砂/角閃石 淡褐色～淡黄褐色
27	土師器 甕	13.2~13.7	-	-	□1/4, 圓1/4+	内：荒ケズリ。磨滅	瀬～瀬砂/角閃石 淡黄褐色
28	土師器 甕	12.6	-	-	-	内：荒ケズリ。外：ハケメ(縦・横)・僅。口外：黒斑。磨滅	瀬～瀬砂/角閃石 淡褐色～淡灰褐色
29	土師器 甕	13.6	-	-	1.5+	内：荒ケズリ。外：ハケメ(縦)。口径不安定	瀬～瀬砂/角閃石 淡黄褐色
30	土師器 甕	(13.45)	-	-	□1/4, 圓1/4	内：荒ケズリ。外：横ハケメ(縦)・少量に縦刷10根条。磨滅	瀬砂/角閃石 淡褐色
31	土師器 甕	-	-	-	-	内：荒ケズリ。外：下半ハケメ(縦・横)・黒斑	瀬～瀬砂/角閃石 褐色～淡灰褐色
32	土師器 甕	-	-	20	-	内下半：荒ケズリ。外：上半はツツキ。下半は焼熱。磨滅。表面変色	瀬砂/瀬砂 茶褐色

図47 土器だまり1出土遺物3) (縮尺1/4)



遺物 番号	器 種	法量:cm (測定値)・～121.4以下				特 徴	胎 土	色調:内/外
		口径	底径	部高	計測部残存率			
33	土師器 高杯	15.1	13.1	15.2	1.5～1.1(脚柱)	外:黒土がキ(黒皮・ぬい)、丁実金目上がり、磨滅	細砂	橙灰～黒褐色
34	土師器 高杯	-	17.9	-	1.2～1.1(脚柱)	脚柱内外:黒土磨滅面、口内付中、脚柱底面全面に灰白目、磨滅	細砂多、角四石多	橙灰～橙褐色
35	土師器 高杯	12.8	-	-	口一、交部1.2	丁実金目上がり、外:黒土がキ(黒皮・ぬい)、脚柱底面全面に灰白目、磨滅	細砂	橙灰
36	土師器 高杯	19.2	-	-	1.4	内:下平・ハケメナガ、内上平・黒皮の工具痕、外:黒皮不明、磨滅	細砂・磨滅少	橙灰(脚柱灰)
37	土師器 鉢	24	-	(13.1)	口径、脚柱4	内:酒樽底多指に灰皮、外底:黒褐色、酒樽底面、外上平・酒樽底	細砂	明褐色(脚柱・灰)
38	土師器 鉢	19.1	-	-	1.4	外下平:黒ケズリ痕、磨滅	細砂	明褐色(脚柱)
39	土師器 鉢	15.8	5～5.4	6.8	口径2、底1.1	内:ナメハケメ、外:ナメ?・磨滅、口:酒樽底、磨滅	細砂	明褐色(脚柱～灰)
40-1	土師器 小形鉢	11.2	-	-	-	内:ハケメ磨滅少+ナメ、外:脚柱・黒皮、口径不明磨滅	細砂	淡黄灰(脚柱)
40-2	土師器 小形鉢	-	4.4	-	1.7	外:ナメ・黒皮、下底に磨滅面、外底:ナメ・黒皮、磨滅、ナメ	細砂	淡黄灰(脚柱)
41-1	土師器 小形鉢	11.2	-	-	-	内:黒ケズリ、外:淡いハケメ磨、口:ハケメ・脚柱、口径不明磨滅	細砂	明褐色
41-2	土師器 小形鉢	-	3.4	-	1.2	内:黒ケズリ、外:淡いハケメ磨	細砂	明褐色
42	土師器 鉢	11.1～12	2.4	7.5	1.1	外:ナメ、外:ハケメ+ナメ・磨滅、口:内側ハケメ、内:黒ケズリ	細砂	明褐色
43	土師器 小形鉢	-	-	1.5	-	磨滅、底部灰皮で不明	細砂	明褐色～淡黄白
44	土師器 脚柱	-	10.8	-	2.3	磨滅、内:強いナメ、外:酒樽	灰砂	橙灰～黄褐色
45	土師器 脚柱土器	-	5.8	-	1.2	内:酒樽、外:脚柱・ナメ、底外工痕、全体黒褐色	細砂	明褐色
46	土師器 鉢	34	-	(20)	1.3	磨滅、外:黒皮	細砂	橙灰～淡灰

図48 土器だまり1出土遺物4) (縮尺1/4)

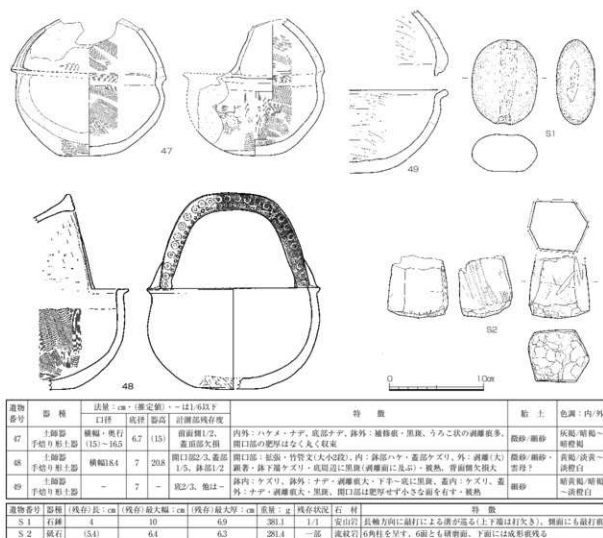


図49 土器だまり1出土遺物5) (縮尺1/4)

1. 砥石1が認められた。

全体的に寛の比率が高いこと、鍛入土器が多くみられることが特徴である。なかでも寛では山陰系(図46-19~31)のものが吉備系のものと同程度含まれること、手埴形土器では特徴や胎土の異なる個体がみられることが注意される。

本土器だまりの時期は、出土遺物より古墳時代初頭と位置づけられる。

第3節 古代の遺構・遺物

1. 概要

古代の遺構として、A地点で溝9条、耕作痕と考えられる小溝群を検出した。他の地点では当該期の遺構は検出されなかった。溝の検出面は<5層>・<5層下面>、小溝群は<5層>である。なお、遺構の時期比定について、遺構出土遺物が飛鳥時代の所産であること、遺物の出土はないが、飛鳥時代の遺物を包含している溝と軸

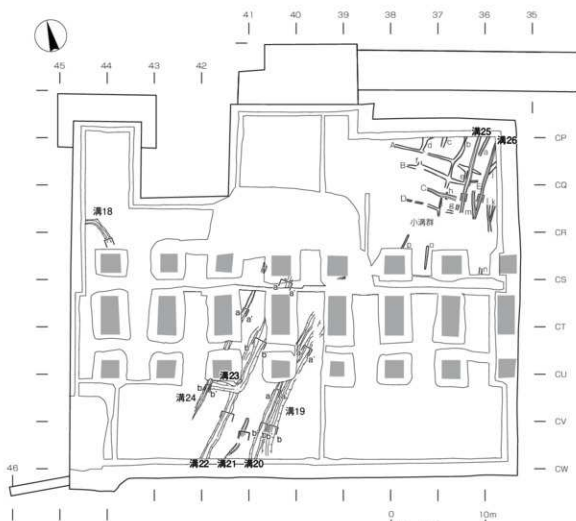


図50 古代の遺構全体図（縮尺1/400）

線の方位を共有する溝については、高い関係性を有すると考えられることから、同時期の遺構であると推定し、古代でも飛鳥時代に位置づけて報告する。

溝はA地点南半中央部で北東-南西方向に主軸方向を揃える6条（溝19～24）、北東部で北東-南西方向に主軸線を揃えて平行する2条（溝25・26）と、西辺中央で曲線的に掘割された1条（溝18）がある。小溝群は地形の低いA地点北東部で検出した。南半中央部の溝群の主軸方向は $N40^{\circ}\sim 45^{\circ}E$ である。耕作痕と考えられる小溝群の向きもこれらの溝群と共通する。また、主軸方向 $N35^{\circ}\sim 40^{\circ}E$ に掘割された溝25・26は1.5～1.8mの間隔で平行する溝であり、道の御溝の可能性もある。これらの溝の軸線の方位は、正方位から時計回りに約 15° 回転した軸におおむね合うとされる鹿田地区の中世の地割とは異なっている。これらの溝の志向する方向が土地の区画と有意な関係性にあるとすれば、中世以前の土地区画の原理を探るうえで有用なデータとなる。

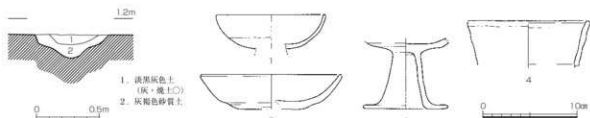
当該期の遺構は、鹿田地区北半の第1・2次調査地点で住居等が、第23次調査地点で溝があるが、周辺調査区では第9・11次調査で水田畦畔がわずかに検出されているのみであった。本調査地点で検出した耕作痕と考えられる小溝群により、鹿田遺跡の南部が当該期には耕作地として利用されていたことを示唆する新たな資料が得られたといえる。

2. 溝

溝18 (図50・51、図版14)

A地点北西部、CQ・CR44区に位置する。屈曲点を挟み、西半は東西、東半は北西-南東方向を基調とする。調査区内で長さ約3.5mを検出した。西端は調査区外へと延びる。攪乱に向かう南東端は、攪乱以南では検出されず、消失しているか収束しているものとみられる。検出層は<5層下面>で、検出上面の標高は1.02~1.08m、底面高は0.82~0.92mで、深さは0.16~0.21mである。底面高の傾斜は、北西から南東方向に下っている。幅は0.59mで、断面形はボウル状を呈する。

埋土のうち、1層は灰や焼土塊を含む淡黒灰色土で、土器を包含し、2層は灰褐色砂質土で、ブロックを含む。遺物は土師器碗・高杯、製塩土器が出土した。出土遺物から、飛鳥時代に属すると考えられる。



遺物番号	器種	法量: cm・-は1/6以下			計測部残存度	特徴	胎土	色調: 内/外
		口径	底径	器高				
1	土師器 碗	11.6	-	3.6	1/4	丸底、押圧、磨滅	水浸し粘土	黄橙
2	土師器 高杯	15	-	1.5、杯部欠	磨滅、外: 原痕		水浸し粘土	明橙
3	土師器 高杯	9	-	1.2、杯部欠	磨滅		水浸し粘土	明橙
4	製塩土器	13	-	1.5	口: 凹縁状の窪み、内: ナデ、外: 押圧・焼熱変色+劣化・カタキ?		微砂・粗砂	暗赤橙/赤黒-黄白

図51 溝18・出土遺物 (縮尺1/4・1/30)

溝19 (図50・52・53、図版14・36)

A地点南半中央部、CR39~CV40区に位置する。溝の軸線方向はN40°Eである。平面的には一条の溝として検出していたが、断面では新古の間係にある二条の溝が再掘削により並行している状況が観察されている。ここでは古段階を溝19a、新段階を溝19bとして報告する。

西側を並行する溝20に切られる。調査区内で長さ約21mを検出した。北側は攪乱以北への延びは確認されず、南側は調査区外へと延びる。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.93~1.17m、底面高は0.56~0.78mで、深さは0.16~0.48mである。底面高の傾斜は、北東から南西方向に下がっている。幅は0.68mで、断面形は碗状、逆台形を呈する。

a-a'断面では溝19aは2層、溝19bは3層に分層され、b-b'断面では溝19aは3層、溝19bは1層に分層される。灰褐色の色調を基調とした埋土で、砂質を帯びる部分はあるが、粘性を示す埋土はない。溝19aはレンズ状の堆積状況を示す。溝19bはa-a'断面の2層がブロック状の堆積である可能性もあるが、基本的にはレンズ状の堆積状況であると考えられる。

遺物は須恵器脚付長頸壺(図53-1)、須恵器大甍片(同図-2)が溝底部から法面にかけての範囲にまとまって出土した。脚付長頸壺は脚

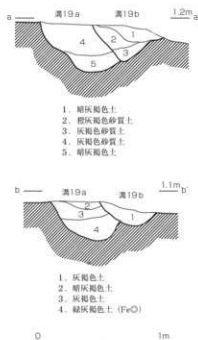


図52 溝19断面 (縮尺1/30)

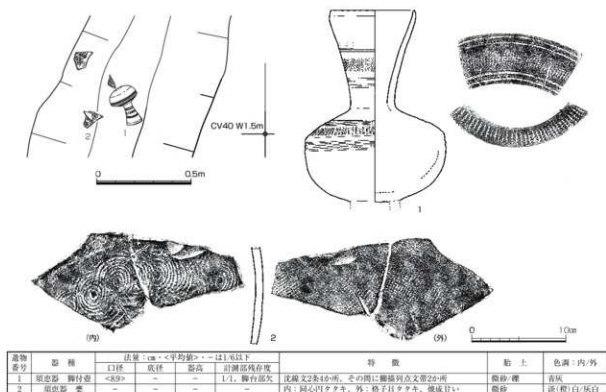


図53 溝19遺物出土状況・出土遺物 (縮尺1/4・1/20)

部を欠くものの、それ以上の部位はほぼ完形である。出土遺物から飛鳥時代に属すると考えられる。

溝20 (図50・54)

A地点南半中央部、CS39～CV40区に位置する。溝の軸線方向はN39°Eである。東側を並行する溝19を切る。調査区内で長さ約18mを検出した。北側は擾乱以北への伸びは確認されず、南側は調査区外へと延びる。平面的には一条の溝として検出していたが、断面では新古の間係にある二条の溝が再掘削により並行している状況が観察されている。ここでは古段階を溝20a、新段階を溝20bとして報告する。

検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.91～1.17m、底面高は0.66～0.89mで、深さは0.17～0.36mである。底面高の傾斜は、北東から南西方向に下がっている。幅は0.53～0.63mで、断面形は20a、20bともに椀状、逆台形を呈する。埋土は溝20aは3層、溝20bは2層に分層される。灰褐色の色調を基調とし、過半の層でブロックの包含がみられる。各層ともレンズ状の堆積を示す。

遺物は土師器高杯・甕が出土した。出土遺物から飛鳥時代に属すると考えられる。



図54 溝20断面・出土遺物 (縮尺1/4・1/30)

遺物番号	器種	法量: cm --は1/6以下				特徴	胎土	色調: 内/外
		口径	底径	器高	計測部位残存度			
1	土師器 高杯	14.6	-	-	1/5	十字, 外: 黒黒・赤色顔料塗布?, 磨滅	微砂	灰黒～淡黄白～明褐色
2	土師器 甕	12	-	-	-	内: 魚タタキ・煤, 外: 網目・ハタメ・幾何模, 磨滅, 粘土混合痕跡	微砂・糠砂～糠多	明褐色

溝21 (図50・55)

A地点南半中央部、CU・CV41区に位置する。溝の軸線方向はN39°Eである。調査区内で長さ約5mを検出した。浅い溝であり、北側は消失しているものとみられる。南側は調査区外へ延びる。検出層は<5層下面>で、検出上面の標高は0.99~1.05m、底面高は0.88~0.99mで、深さは0.23mである。底面高の傾斜は、北東から南西方向に下がっている。幅は0.4mで、断面形はボウル状を呈する。

埋土は3層に分層される。褐色系の砂質土で構成され、色調の明暗や微砂の包含で分層される。

遺物は出土していない。溝の走行方向から飛鳥時代に属すると推測される。

溝22 (図50・56、図版15)

A地点南半中央部、CS40~CV41区に位置する。溝の軸線方向はN37°Eである。調査区内で長さ約17mを検出した。東に並行する溝24に切られる。北側は攪乱で消失している。南側は調査区外へ延びる。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.9~1.07m、底面高は0.71~0.78mで、深さは0.26~0.3mである。底面高の傾斜は、北東から南西方向に下がっている。幅は0.53~0.69mで、断面形はボウル状、逆台形を呈する。

埋土は4層に分層される。灰褐色を基調とする埋土で、一部は砂質を帯びる。1・3層にはブロックが含まれる。

遺物は古墳時代初期の土師器小片少量が出土したが、混入と考えられる。溝の走行方向から飛鳥時代に属すると推測される。

溝23 (図50・57、図版15)

A地点南半中央部、CR40~CU41区に位置する。屈曲点を挟んで、北北東~南南西方向、東西方向に走行する。溝の軸線方向は、北北東~南南西方向がN40°E、東西方向が溝の軸線方向はN110°Eである。調査区内で長さ約17mを検出した。西に並行する溝23を切る。北側は攪乱で消失している。西側は溝24に切れ、それ以西は検出されていない。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.97~1.19m、底面高は0.64~0.99mで、深さは0.16~0.37mである。底面高の傾斜は北東から南西方向に下がっている。幅は0.75~1.13mで、断面形は椀状を呈する。

a-a'断面では埋土は4層に分層される。灰褐色~褐色の砂質土で、2層には砂ブロックの包含がみられる。1・3・4層はレンズ状に堆積するが、2層は3層を切り込む形となっている。b-b'断面では埋土は9層に分層される。2・3層以外は灰褐色~茶褐色の砂質土でブロックを包含するものが多い。2層は炭を包含する灰褐色土である。3層は灰褐色砂で、レベルではa-a'断面で砂ブロックを包含する2層に対応するものとみられる。

遺物は古墳時代後期から飛鳥時代にかけての須恵器小片が出土している。出土遺物から飛鳥時代に属すると考えられる。

溝24 (図50・58、図版15)

A地点南半中央部、CR40~CU42区に位置する。溝の軸線方向はN41°Eである。東西に延びる溝23を切る。調査区内で長さ約19

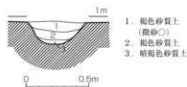


図55 溝21断面 (縮尺1/30)

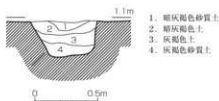


図56 溝22断面 (縮尺1/30)

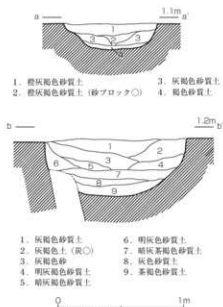


図57 溝23断面 (縮尺1/30)

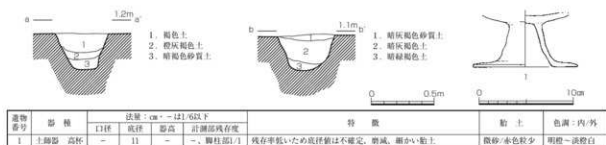


図58 溝24断面・出土遺物 (縮尺1/4・1/30)

mを抽出した。検出範囲の北側は掘乱、南側は上層遺構により消失している。検出層は<5層>で、検出上面の標高は1.01~1.12m、底面高は0.7~0.84mで、深さは0.17~0.38mである。底面高の傾斜は、北東から南西方向に下がっている。幅は0.4~0.52mで、断面形は椀状、逆台形を呈する。埋土は3層に分層される。各層の厚さに差があるが、いずれもレンズ状堆積を示す。褐色~灰褐色土が主体でブロックを含む。

遺物は土師器高杯が出土した。出土遺物から飛鳥時代に属すると考えられる。

溝25 (図50・59、図版15)

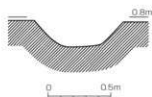
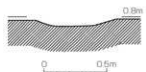
A地点北東、CP・CQ36区に位置する。<5層>で検出した。溝の軸線方向はN35°Eで、調査区内で長さ約8.3mが確認された。北側は調査区外へと延びるが、C地点では確認されなかった。南側は深さを減じて消失する。他遺構との関係では、小溝群を切り、東の溝26とは1.5~1.8mの間隔で平行する。検出面の標高は0.78m、底面高0.57m、深さ0.21mである。底面高は南南西から北北東に下がる。幅は約0.7mで、断面形はボウル状を呈する。

遺物は出土していない。溝の走行方向から飛鳥時代の所産と推測する。

溝26 (図50・60、図版15)

A地点北東、CP35、CP・CQ36区に位置する。<5層>で検出した。溝の軸線方向はN40°Eで、調査区内で約8.3mが確認された。北側は調査区外へと延びるが、C地点では確認されなかった。南側は深さを減じて消失する。小溝群を切り、溝25と平行する。検出面の標高は0.79mで、底面高0.72m、深さ0.06mで、底面高は南南西から北北東に下がる。幅は約0.6mで、断面形は皿状を呈する。

遺物は出土していない。溝の走行方向から飛鳥時代の所産と推測する。

図59 溝25断面
(縮尺1/30)図60 溝26断面
(縮尺1/30)

3. 耕作痕 (図50、図版15)

A地点北東、CP~CR36~38区において、21条で構成される小溝群を検出した。検出層は<5層>である。交差して十字状になる溝もあるが、報告の便宜上、まずは直線的な個別の溝として命名し、説明する(図50)。

小溝群の検出面の標高は0.65~0.9m、底面高は0.53~0.84m、深さは0.02~0.13mで、断面形は椀状か皿状を呈する。検出標高・底面高には幅があり、断面高約0.75mを目安に上位・下位の小溝群に分離すると、上位は小溝E・k・l~n・o・p、下位は小溝A~D・a~jとなる。これに溝の軸線方向、溝の間隔を加味すると、底面高の高い上位群からは小溝1~n(N11°~19°E、間隔約1.6m)、下位群からはA~D(N56°~60°W、間隔約1.3~1.5m)、a~d(N33°~41°E、間隔約1.5~1.7m)、e~i(N20°~27°E、間隔約1.4~1.7m)が有機的な関係をもつと考えられる小溝群として抽出される。

これらのうち、下位群に属する小溝A~D・a~d・e~iについては、東西・南北方向に、ほぼ等間隔で平

行に掘削された各群が交差した状態を捉えて検出している。群同士の関係性は高く、同時期の所産であるとみれば、規則的に配置された溝で格子状の区画を作出したものであり、周囲に柱穴や土坑等の遺構が配されないことなども考えあわせると、耕作にともなう溝と考えられる。

遺物は出土していない。先述した飛鳥時代の溝群の軸線方向との関連から、本小溝群の時期についても飛鳥時代と推定しておきたい。

第4節 中世前半の遺構・遺物

1. 概要

中世前半の遺構として、掘立柱建物1棟、柱穴列2列、ピット229基、井戸4基、土坑3基、溝15条を検出した。検出層は<4層>、<5層>であるが、本来はすべて<4層>に属する。本調査区では、調査区東半の36～38・39ライン間が南北方向に延びる低位部となっている。こうした地形は近世の作為による可能性も否定できないが、北に隣接する第9・11次調査地点では34～39ラインの位置に21×28mの大規模な池状遺構もあり、本調査地点も併せてみると、中世前半の時期には39ライン以東に南北に延びる低地帯が広がっていた可能性がある(図133)。一方、A地点南西部やE地点では弥生時代以来の安定した微高地にあたっている。

遺構の配置にはこうした地形環境が反映されているとも考えられ、A地点東半部の低位部の遺構分布は希薄である。さらに、38～41ライン間には大形の溝を含む複数の南北溝が掘削されている。これらの溝の方位は現在の鹿田地区の地割を反映した構内座標の南北軸にほぼ合致している。このうちの2条では、西に向かって東西方向の溝を派生させており、A地点南西部に方形区画を形成している。この区画の内部では総柱の掘立柱建物のほか、多数のピットが検出された。これらのピットは建物として把握するには至らなかったものの、礎石をのこすものもあり、本来は建物の柱穴が多いものと考えられる。さらにA地点南辺西側には方形礎板組井戸枠を内包する2基を含む計4基の井戸が築かれている。溝で囲まれた空間、建物・高い密度のピット群、複数の井戸の存在から、この区画は鹿田遺跡の他調査地点でも確認されている屋敷地の一つであると考えられる。

B・C地点で確認された東西方向の溝29・30の2条は、行先を延長復元すれば、約1.5～2mの間隔で平行する溝となり、側溝をもつ道の可能性も射程に入る。後述するが、この地点での近世の土坑配置が土地区画を反映するならば、D地点の柱穴列1もあわせた調査区北辺を通る東西方向のラインが近世にも続く区画線の表示と考えられる。これに交わる南北区画線を見ると、この区画線の北側に位置する第9次調査地点では、大型溝や近世土坑の配置に表示される中世以降の南北方向の区画線が29・30ラインに位置するのに対し、本調査地点の南北方向の区画線は38・39ラインにあって第9次調査のものには正対せず、約50m弱のずれがみられる。(野崎)

2. 掘立柱建物・柱穴列・ピット群

掘立柱建物1 (図62・63、図版17・39、表1・2)

CU・CV43・44区に分布するP1～P6で構成される。検出レベルは標高1.04m～1.22mで<5層>に対応する。

柱穴の規模は、直径0.41～0.63m、底面の高さは標高0.5～0.9mで、深さは0.15～0.59mを示す。6基中5基に礎石が残る。各柱穴間の距離は1.9～2.0mである。本建物の構造は、P1・P2・P4の列が建物西辺を、これに直交するP4～P6の列が建物南辺を構成すると判断した。さらにP2・P5の列は前述の西辺に直交することから、総柱建物の可能性が考えられる。本建物1は東西4.0m、南北3.9mの規模を有する二間×二間の総柱建物に復元される。東西に軸をとり、軸方向はE165°Sを示す。

遺物はP1・P2・P5から土器小片が少量出土した。中世前半の吉備系土師器碗が含まれており、本遺構の

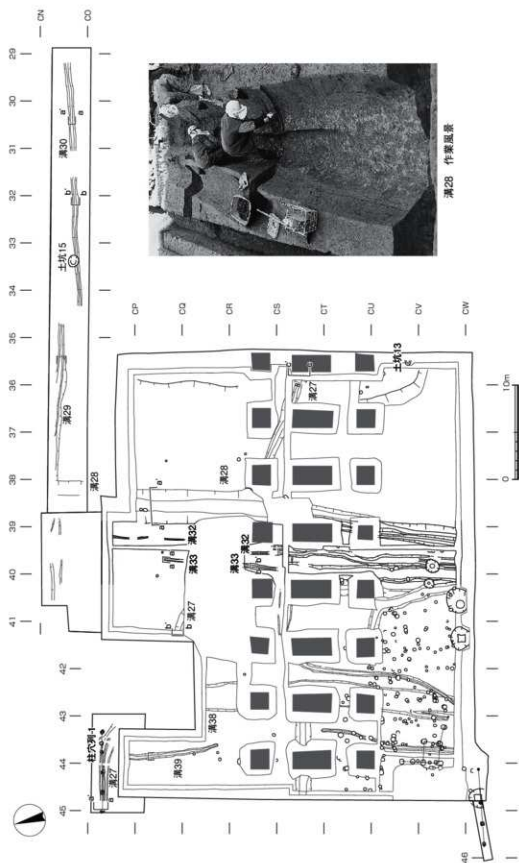


図61 中世前半の遺構全体図 (縮尺1/400)

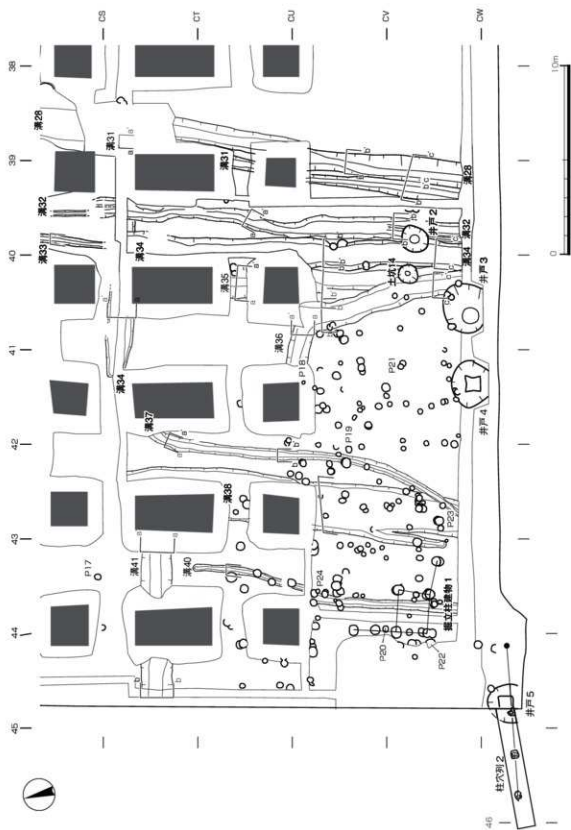


図62 中世前半の遺構：調査区南西（縮尺1/200）

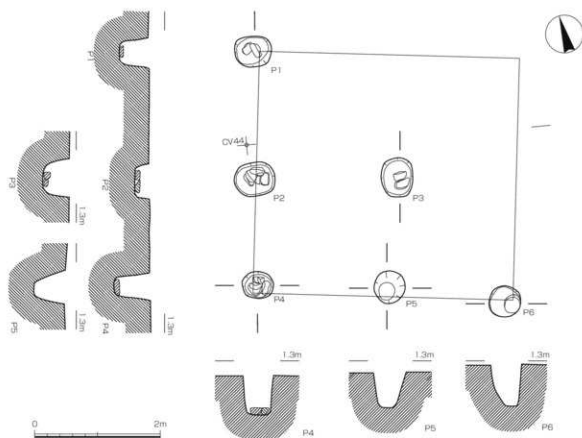


図63 掘立柱建物1 (縮尺1/60)

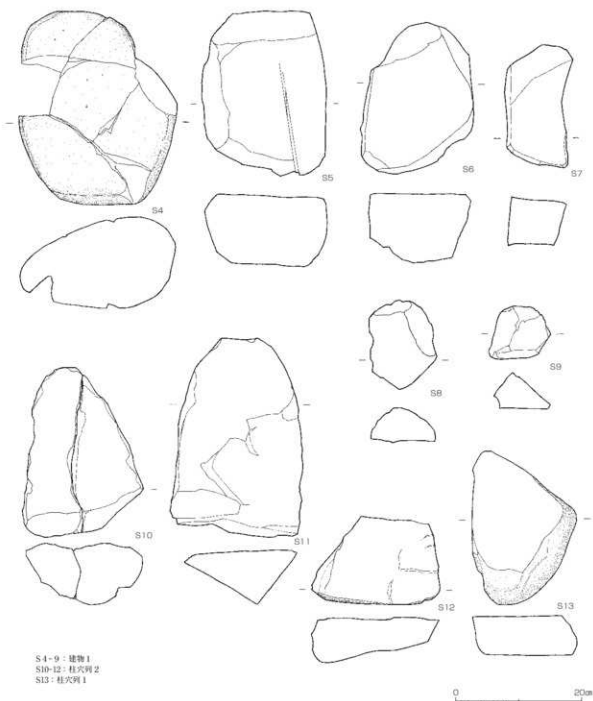
時期を示す。礎石はP1～P4とP6に入れられており、そのうち6点(図63-S4～9)を図示した。礎石は大きさが3種に分けられ、P2のように大型石が1点入るもの、P3のように大小多数が入るもの、P1のように小ぶりな石を、面を揃えて入れたものがあり、各ピットで異なる。P3は使用時ではなく廃棄後の状況を示す可能性もあろう。いずれも加工により平坦面を作出、あるいは平坦なものを選んでおり、被熱痕跡が認められる。

柱穴列1 (図61・65、図版17・39、表1・2)

D地点、CO43・44区に分布するP7～P12で構成される。検出レベルは標高0.99～1.18mで、<4層>に対応する。柱穴列1の軸方向はE145°Sを示す。P7～10の各間隔と、P10・12の間隔はいずれも2.0mを測る。後者の間にあるP11のみ、他とは異なる間隔を示す。柱穴の規模は直径0.35～0.5m、底面のレベルは標高0.51～0.85mで、深さ0.15～0.48mを示す。6基のうち2基に礎石が残っている。礎石のないP7～P10の断面観察から、いずれも一度埋まった後に柱を打ち込んだことがわかる。それらの柱痕は直径が12～18cmと細く、杭が想定される。遺物はP7～9・11・16からごく少量の土器片が出土した。中世前半の土器を含む。

表1 掘立柱建物・柱穴列構成柱穴一覧

遺構名	番号	上面高(m)	下面高(m)	径(m)	深さ(m)	礎石
建物1	P1	1.09	0.64	0.55×0.86	0.45	○ S7・8
	P2	1.05	0.9	0.63×0.52	0.15	○ S4
	P3	1.22	0.8	0.51×0.58	0.43	○ -
	P4	1.04	0.51	0.37×0.41	0.53	○ S5・6・9
	P5	1.13	0.66	0.48×0.50	0.48	×
	P6	1.21	0.61	0.48×0.86	0.6	○ -
柱穴列1	P7	1.18	0.72	0.45×0.4	0.46	×
	P8	1.07	0.63	0.5×0.45	0.45	×
	P9	1.02	0.72	0.45×0.35	0.3	×
	P10	1.02	0.85	0.4×0.4	0.15	○ S13
	P11	0.99	0.51	0.45×0.43	0.48	○ -
柱穴列2	P12	1.03	0.56	0.35×0.35	0.47	×
	P13	1.07	0.87	0.5×(0.3)	0.28	○ S11
	P14	1.11	0.9	0.42×0.45	0.3	○ S10
	P15	1.06	0.7	0.41	0.35	○
	P16	1.12	-0.03	0.6×(0.45)	0.28	○ S12



S4-9：建物1
S10-12：柱穴列2
S13：柱穴列1

遺物名	ピット番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
S4	建物1 P2	30.5	24.8	13	11780	流紋岩質凝灰岩	6片複合、一部欠損
S5	建物1 P3	25.1	19.7	11.5	9910	石英燧岩	上面平削に加工、石切痕あり、焼熟あり
S6	建物1 P3	21	17.3	11	6720	花崗岩	焼熟あり
S7	建物1 P1	19.2	9.5	6.9	2080	花崗岩	全面削れ面
S8	建物1 P1	10.3	14	5.1	816	花崗岩	加工により一部平削
S9	建物1 P3	9	8.3	3.6	595	流紋岩	加工により一部平削、焼熟あり
S10	柱穴列2 P14	13.3	10.3	7.7	2670	流紋岩質凝灰岩	焼熟後、加工し平削面作出
S11	柱穴列2 P13	31.7	19.2	9	6640	石英燧岩	削の上面は平削
S12	柱穴列2 P16	24.5	16.1	8.1	4110	石英燧岩	焼熟後、加工し平削面作出
S13	柱穴列1 P10	12	18.6	9.7	4760	凝灰角礫岩	2片複合、破あり、焼熟前は二次的

図64 掘立柱建物・柱穴列出土礎石(縮尺1/6)

表2 未掲載礎石一覧

遺構名	ピット番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
竪立柱建物1	P3	123	19.4	8.9	4131	加工により一部平削
竪立柱建物1	P3	39	15.6	8.4	3350	焼熱あり。加工により平削面作出
竪立柱建物1	P3	19	10.8	7.7	1312	加工により平削面作出
竪立柱建物1	P3	20.4	12.6	5.9	2790	焼熱あり
竪立柱建物1	P3	12.8	6.5	5.7	740	加工により平削面作出
柱穴列1	P12	15.3	12.1	8.8	1600	加工により一部平削
柱穴列2	P13	36	17.7	14	1406	加工により一部平削
柱穴列2	P14	25.8	18.7	12.6	7350	加工により一部平削。焼熱あり
柱穴列2	P14	13.6	14.5	6.8	3000	焼熱あり。加工により平削面作出
柱穴列2	P14	19.5	20.1	10.5	8860	焼熱あり。加工により平削面作出

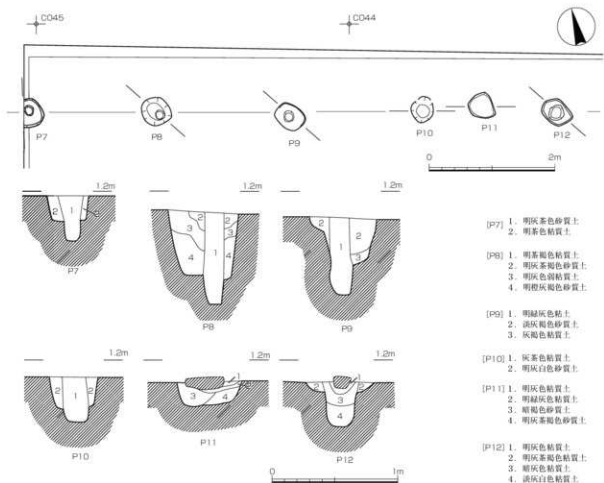


図65 柱穴列1 (縮尺1/30・1/60)

柱穴列1はCOライン南1.5mの位置で、COラインと並行している。COラインより北を東西に走行する溝30に並行する欄列と考えられる。元はP11・12のように礎石を用いたものから、杭を打ち込むものに改修した可能性もあろう。また溝と柱穴列1との間に道の存在も窺える。層位と溝30との関係から竪立柱建物1より新しいが、詳細な時期は不明である。

柱穴列2 (図62・66、図版17・39、表1・2)

E地点、CW44・45区に分布するP13～P16で構成される。検出レベルは標高1.06～1.12mで<5>層に対応する。4基の柱穴がおおよそ2.0m間隔で一列に並ぶ。軸方向はE13°Sを示す。柱穴の規模は、直径0.43～0.6m、底面の高さは標高-0.03～-0.9mで深さ0.2～0.35mを測る(表1)。西から3基(P13～P15)は2mを測る間隔と、底

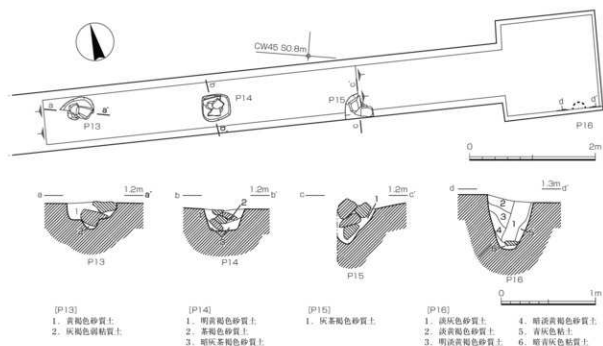


図6 柱穴2 (縮尺1/40・1/60)

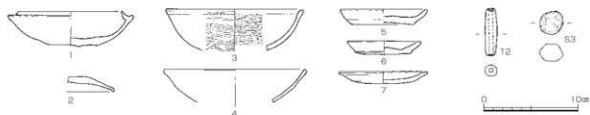
面レベルが近似し、共通性が高い。最も東に位置するP16はP15との間隔3.4mを測り、他の3基とは異なる。礎石の出土状況では前者は複数の礎石が重なり合って出土したのに対し、後者では柱痕の底面に1石が出土した。

柱穴2は狭小な範囲での確認であり、建物の一辺を示す可能性もあるが断定はできない。同一軸上にあるものの前述したような違いから、P13～P15とP16とは別の構造物の可能性も考えられる。

遺物はいずれのピットからもごく少量の土器片が出土した。中世前半の土器を含む。柱穴2の時期は、P15と井戸5との切り合い関係から、井戸5の埋没後～中世前半の中で考えられる。

ピット群 (図61・62・67)

上記のほかにも本調査で検出された中世のピットは204基を数える。<4層>、<5層>上面の調査で検出されたものが大半を占める。その分布をみると調査区の南西部に集中しており、CTライン以南、39ライン以西に全体の



遺物番号	遺構	器種	法量: cm・--は1/61.5以下				特徴	胎土	色調・内朽		
			口径	口径	高さ	計測部位残存率					
1	P17	底面片	11.1	3.2	3.2	1/4	回転ナデ、底外ノミナリ	磁砂	薄少	淡青灰・瀬青灰	
2	P18	底面片	-	-	-	-	回転ナデ	磁砂	薄	青灰	
3	P19	土師器	14.6	-	-	-	内内ノミ生ナデ、口ノミナデ	磁砂・細砂	薄	淡青白	
4	P18	土師器	15.2	-	-	-	滑減	磁砂	薄	淡青白	
5	P20	土師器	9.2	6.6	1.6	1/2.3	底外ノミナリ、口ノミ回転片、滑減	磁砂	薄	淡青白	
6	P21	土師器	7.9	6	1.4	1/2	回転ナデ、底外ノミ生ナデ、内内ノミ回転片	磁砂	薄	淡青白	
7	P22	土師器	9.5	6.1	1.3	1/4	ナデ・脚片、口ノミ回転片、滑減、器底歪?	磁砂	薄	淡青白	
遺物番号	遺構	器種	長: cm	幅: cm	厚: cm	重量: g	残存状況	特徴	胎土	色調・内朽	
T2	P23	土師	5	1.3	1.2	6.2	1/1	底径0.5cmの穿孔、滑減	磁砂・細一重砂	薄	
遺物番号	遺構	器種	長: cm	幅: cm	厚: cm	重量: g	残存状況	石材	特徴		
S3	P24	石	2.3	2.3	2.3	1.8	10/2	1/1	淡緑岩	磨あり、滑減、射石?	

図67 ピット出土遺物 (縮尺1/4)

9割近くが分布する。これらのピットはその形状から柱穴と判断されるものが多い。これらから出土した遺物を図67に掲載した。11～12世紀代の遺物が集中する。そのなかで同1はCR43区のP17から出土し、飛鳥時代に比定される。このピットは集中城のピット群と異なり、東西方向の溝41より北に位置する。近隣に同時期の溝18があり、飛鳥時代の遺構との関連が窺われる。(岩崎志保)

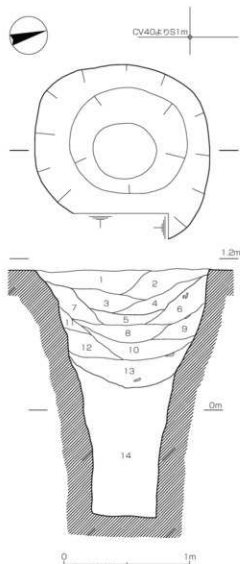
3. 井戸

井戸2 (図62・68・69、図版18・37)

A地点南側中央、CV39区に位置する。<4層>で検出した。検出面の標高は1.11m、底面高は-0.85mで、深さは1.96mである。重複している溝34よりも検出高が低く、溝34に先行すると推測される。

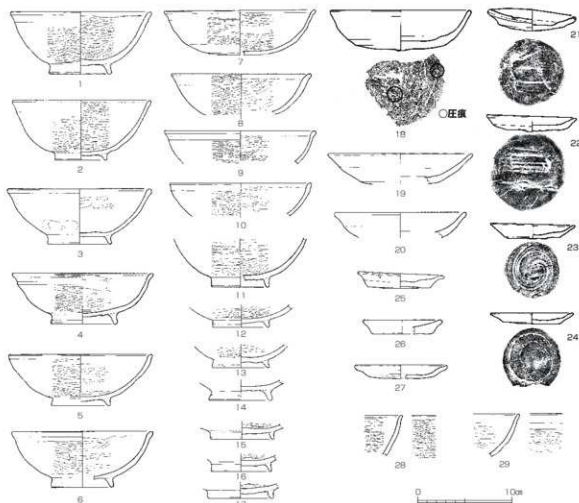
平面形は、上面、底面ともに楕円形を呈する。規模は、上面で長軸長1.53m、短軸長1.37m、底面で長軸長0.5m、短軸長0.44mである。掘り方ラインは標高0.3m付近に明瞭な屈曲点があり、断面形は逆台形の下半部が屈曲点から上半部に向かって開き、全体としてはY字形を呈する。

埋土は14層に分層される。土色・土質・包含物を指標に三群に大別する。一群は1～4層が該当する。褐色がかる灰褐色土で、特に1・2層では鉄分の沈着が顕著にみられる。1・3・4層では焼土塊や炭化粒の包含がわずかにみられる。各層の断面形と堆積順序をみると、縁辺から中心に向かって下がる土層の単位が南北から交互に積み重なっている。二群は5～12層が該当する。黒灰色の色調を基調とする砂質土である。各層とも包含物が多くみられるという共通性がある。5・10・11・12層には焼土塊・炭化粒が包含される。なかでも井戸中心部に形成されたすり鉢状の窪みの最深部に堆積する5層では、焼土粒とともにわずかに灰状の炭化物が認められた。また、10層では焼土塊・炭化粒の包含が特に顕著であった。焼土塊・炭化物の包含状況から、5・10層では焼成を伴う祭祀が執り行われていたことが推測される。5層と10～12層の層群間には6～9層が堆積する。このうち、6・7・9層では粒径約2～10cmの大型ブロックの包含がみられる。また、8層では粗砂と灰が約2cmの厚さで互層状となっており、層断面形がレンズ状を呈している。三群は13・14層が該当する。暗褐色～黒褐色の暗い色調を呈する粘土・粘質土で、上方の埋土とは土質の差異で截然と分層される。13層には大形土器片が含まれる。掘り方の屈曲点は13層の下面に位置しているが、土質とは積極的に関係づけられない。



- | | | |
|----------|--------------|-------------|
| 1. 暗灰褐色土 | 6. 淡黒灰色砂質土 | 11. 淡黒灰色砂質土 |
| 2. 赤褐色土 | 7. 淡黒灰色砂質土 | (焼土・炭○) |
| 3. 淡褐色土 | 8. 黒灰色砂質土 | 12. 黒灰色砂質土 |
| 4. 暗褐色土 | 9. 淡黒灰色土 | (焼土・炭○) |
| 5. 黒灰色土 | 10. 黒灰色白色細砂土 | 13. 淡黒灰色粘質土 |
| (焼土・炭○) | (焼土・炭○) | 14. 暗灰色粘質土 |

図68 井戸2 (縮尺1/30)



遺物番号	器種	法量: cm・<平均値>・±1σ以下				特徴	胎土	色調: 内/外
		口径	底径	器高	計測部位存在			
1	土師器 碗	14.8	6.6	6.6	口1/4, 高台1/1	内外: 施ミガキ(外は分限), 高台: 厚手・高めの厚手の底輪, 履	陶砂・礫	にぶい・灰白
2	土師器 碗	14.2	5.5	6.4	口-, 高台1/1	内外: 施ミガキ・磨滅・履等で着色化, 底輪, 高台前面△形, 趾に類似	陶砂・礫	淡灰白・淡灰黒
3	土師器 碗	15.2	6.8	5.9	口1/4, 高台1/1	内外: 磨滅で施ミガキ不明瞭, 厚手, 内: 重燒きの変色(黒色化)	陶砂	白・淡(灰)白
4	土師器 碗	15	<7>	3.4	口1/2, 高台1/1	内: 工具サテ・底に施ミガキ・履, 外: 施ミガキ, 高台: 厚手・高の	陶砂	白・淡(灰)白
5	土師器 碗	15.3-16	6.3	5.7	口-, 高台1/1	内外: 施ミガキ・磨・履, 内: 磨滅, 高台: 厚手・背面△, 底内: 押江	陶砂	にぶい・淡灰白
6	土師器 碗	15	7	6	1/4	内外: 施ミガキ, 内: 磨滅, 高台: 高めの厚手の底輪・不可動	陶砂・石灰質多	白
7	土師器 碗	<15.5>	-	-	1/4	内外: 施ミガキ・高台以外黒色(赤・紫)を染み込化, 高台内側面黒色	陶砂	暗黒, 高台内: 灰白
8	土師器 碗	14.8	-	-	1/2	内外: 施ミガキ(外は分限), 口: 分限い作り, 底部成肉	陶砂・石灰質多	白, 一部暗黒
9	土師器 碗	16	-	-	-	内外: 施ミガキ・履で着色化(内: 墨色染?), 外: 赤目煎?, 7Lに類似	陶砂	白, 一部暗黒
10	土師器 碗	15	-	-	1/4	内外: 施ミガキ・履少, △と類似	陶砂	淡灰白
11	土師器 碗	-	6.2	-	1/2	内外: 施ミガキ, 丁車女仕上り, 胎土均質	陶砂	白
12	土師器 碗	-	<5.9>	-	1/1	内外: 施ミガキ密・履熱で着色化, 高台: 厚手・内: 工具痕, 趾に類似	陶砂・礫	暗灰黒
13	土師器 碗	-	6-6.5	-	1/1	内外: 施ミガキ・履熱で着色化, 高台: 厚手・内: 工具痕, 趾に類似	陶砂・礫	にぶい・暗灰
14	土師器 碗	-	6.1-6.8	-	1/1	磨滅, 外: 履熱で表面劣化・着色化, 高台: 厚手, 趾に類似	陶砂・礫多	暗灰・淡灰白
15	土師器 碗	-	6.8	-	1/1	内: 押江・施ミガキ密, 高台: 薄手	陶砂・礫	淡(灰)白
16	土師器 碗	-	6.4	-	3/4	内: 施ミガキ・高台: 薄手・内: 魚鱗	陶砂	白
17	土師器 碗	-	7	-	1/1	内: 施ミガキ・高台: △形変換, 厚手, 履熱で着色化	陶砂・礫	淡灰・暗灰黒
18	土師器 杯	15	9.6	4.3	口-, 底1/4	横ナデ, 底外: 施キリ・口口左回輪・モミ任意と植物痕, 底部厚手	陶砂・赤色粒	にぶい・灰黒
19	土師器 杯	15.4	8.4	-	口-, 底1/4	横ナデ, 底外: 施キリ薄ナデ(シャープ), 細かい胎土	陶砂・赤色粒多	明暗黒
20	土師器 杯	14	-	-	1/4	横ナデ, 厚手, 外: 口縁に履少, 細かい胎土	陶砂・赤色粒	暗灰黒
21	土師器 碗	<9.55>	<6.8>	1.2-2.4	1/1	底外: 横目煎, 底内: 一部深い凹み, 口: 打欠(脚)△が叫, △のみ	陶砂多	にぶい・暗灰
22	土師器 碗	<9.55>	8	1.2-1.8	口1/2, 底1/1	横ナデ, 底外: 横目煎, 厚手, △の細かい胎土	陶砂・赤色粒	明暗黒
23	土師器 碗	9	6	1.5-1.6	口1/2, 底1/1	底外: 施キリ・横目煎・口口左回輪・口: 履少, 厚手, 細かい胎土	陶砂・赤色粒多	明暗黒
24	土師器 碗	9	<6.1>	1.1-1.6	口1/2, 底3/4	横ナデ, 底外: 施キリ・口口左回輪・底内: 押江, △のみ, 厚手	陶砂・赤色粒多	淡暗黒
25	土師器 碗	9.2	7.9	1.3-1.8	口2/3, 底1/1	底外: 施キリ・横目煎・底内: 凹み, 口: 打欠(脚)△・細長い脚・打欠(底)	陶砂・赤色粒	灰(黒)白・灰灰
26	土師器 碗	8.6	6.4	1.5	口-, 底1/3	横ナデ, 底外: ナデ, 厚手	陶砂多	白, 一部黒色化
27	土師器 碗	9.8	6.4	1.4	1/3	横ナデ, 外下手・底: 押江, 細かい胎土, 器厚均一, △底部?	陶砂, 均一	白
28	瓦 器	-	-	-	-	内外: 施ミガキ密, 底表面履未確認, 細かい胎土, 和泉型?	焼良	淡灰白
29	瓦 器	-	-	-	-	内外: 施ミガキ密, 履熱で表面劣化・白色化	陶砂, 均一	黒灰・淡灰白

図9 井戸2出土遺物(縮尺1/4)

遺物は土師質土器碗・杯・皿のほか、瓦器片が出土した。

本井戸の時期は、出土遺物から中世前半（11世紀後半）に位置づけられる。

井戸3（図62・70・71、図版19・37）

A地点南辺中央、CV・CW40区に位置する。南辺は調査区外にあたり、検出できなかった。〈4 a層〉で検出した。北東から東辺の一部は溝35に重複しているが、土層のうえでの先後関係は確認できていない。検出面の標高は1.27m、底面高は-1.18mで、深さは2.45mである。

平面形は、上面で楕円形、底面で隅丸方形を呈する。底面の中心からみると、上面は北東方向に大きく張り出す形状となっている。規模は、上面で長軸長2.72m、短軸長2.62m、底面で長さ1.04m、幅0.96mをはかる。断面形はY字形で、下半の筒部では東側のわずかな範囲をのぞき、底部から約0.8mの高さまでオーバーハングしている。

埋土は17層に分層される。土色・土質・包含物のほか、各層の堆積状況をあわせ、四群に大別する。一群は1～6層が該当する。多くの層で色調が赤～橙色がかり、ブロックを包含するという特徴がある。堆積状況やブロックの粒径を指標に、1・2層、3～6層の2小群に細分する。1・2層は層厚約0.15～0.2m、包含するブロックは粒径約10cm前後である。一方、3～6層は、層厚0.1m前後の厚みで、レンズ状堆積が連

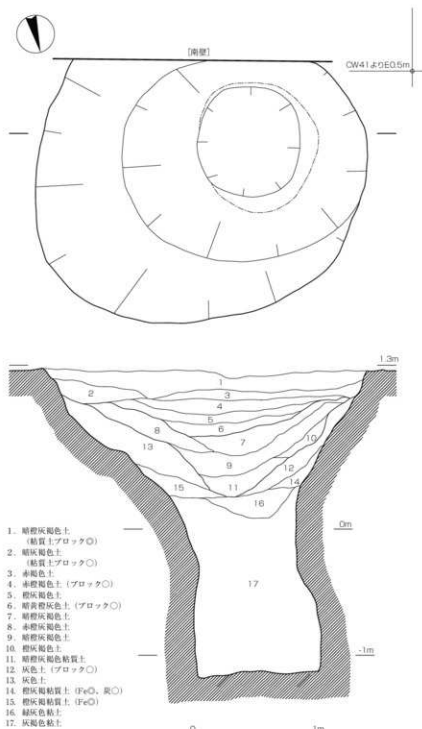
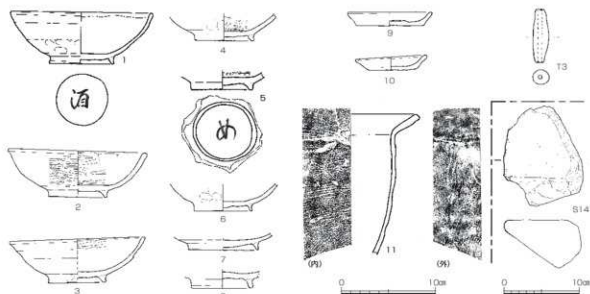


図70 井戸3（縮尺1/30）



遺物番号	器種	法量: cm < 平均値 > - 11.6以下				特徴	胎土	色調: 内外	
		口径	底径	器高	口縁部残存度				
1	土師器 碗	15~15.7	<6.85>	<5.55>	1/1	押圧・ナデ, 外下半に春日痕と亀裂, 高台内: 墨書(「酒」)・鹿半リ痕	微砂	淡黄白/白	
2	土師器 碗	14.8	<6.2>	4.7~5.4	[1]之, 高台1/1	内外: 鹿ミガキ(痕)	微砂・塵少	淡黄白	
3	土師器 碗	<14.35>	6.2	4.5~4.9	1/1	内外下半: 押圧、内: 鹿ミガキ痕, 一部変色で着色化	微砂	淡黄白	
4	土師器 碗	-	<6.25>	-	1/1	内: 鹿ミガキ少・底部押圧・米粒状の墨点有, 内外: 塵	微砂	白, 墨點	
5	土師器 碗	-	6.2~6.6	-	1/1	内: 鹿ミガキ・粒状の墨点有, 高台内: 墨書(「女」), 内外: 塵	微砂	淡黄白, 墨點	
6	土師器 碗	-	6.1	-	1/2	内外: 磨滅・押圧, 高台内: 押圧痕が凹を呈す, 高台: 薄子	微砂	白	
7	土師器 碗	-	7.4	-	1/3	内: 丁字少ナデ・墨土・赤褐色顔料付着, 外: ナデ	微砂	淡黄白	
8	土師器 碗	-	6.6	-	1/2	内: 平滑・塵, 高台内: 押圧, 厚子	微砂多	白・灰白	
9	土師器 皿	9	7.2	1.5	[1]之, 底3/4	横ナデ, 底外: 鹿半リ・ロクロ左回転・靱目痕	微砂・赤色粒	明茶	
10	土師器 皿	<7.7>	5.6	1.2~1.6	1/1	磨滅, 底外: 鹿半リ・ロクロ左回転, 底内: 押圧, 靱質感	微砂多・塵	淡黄白	
11	土師器 皿	-	-	-	-	内: ハケメ・塵少, 外: ハケ後押圧・塵多	微砂	暗緑・黒褐色	
遺物番号	器種	(残存)長: cm	(残存)幅: cm	(残存)厚: cm	重量: g	残存状況	特徴	胎土	色調
T3	土師	5.8	1.7	1.7	14	1/1	直径0.5cmの穿孔, ナデ, 磨滅, 墨痕	微砂	白, 一部明褐色
遺物番号	器種	(残存)長: cm	(残存)最大幅: cm	(残存)最大厚: cm	重量: g	残存状況	石材	特徴	
S14	鉄器	12.8	10.3	6	760.3	1/1	炭酸石灰質磁灰岩	炭化・木質付着部や変色部あり	

図71 井戸3出土遺物(縮尺1/4)

統的に堆積し、包含されるブロックの粒径は約1~3cm前後である。二群は7~11層が該当する。赤~橙色がかかる灰~灰褐色土で、ブロック等の包含物はみられない。9・10層からは中世土器片が出土した。井戸中心部のすり鉢状の窪みに堆積する。8・9層下面と13層の層界面では8・9・13層の交点以下、10・12層の層界面でも上方で傾斜変換し、急な傾斜となっているため、この窪みは人為的な再掘削によって形成されたものの可能性もある。その場合、9層出土の土器は、井戸で執り行われた何らかの祭祀に伴うものとも考えられる。三群は12~15層が該当する。灰~橙灰褐色粘質土である。橙色を帯びる14・15層では鉄分の沈着が著しい。また12層で見られるブロックは粒径約3~5cmをはかる。各層の断面形状は外縁から中心部に流れ込んだ流入土であることが推測される。ブロックを包含する層が少ないこと、包含されるブロックの粒径が小さいことも流入土との推測の証左となる。四群は16・17層が該当する。灰~灰褐色の粘土で、三群までの埋土とは色調・土質ともに截然と分離される。

遺物は土師質土器碗・皿・鍋、土師のほか、被熱礫が出土した。土師質土器碗のうち2点には底部外面に墨書があり、完形で出土した1は「酒」、5は「女」と判読される。

本井戸の時期は、出土遺物から中世前半(12世紀中頃)に位置づけられる。

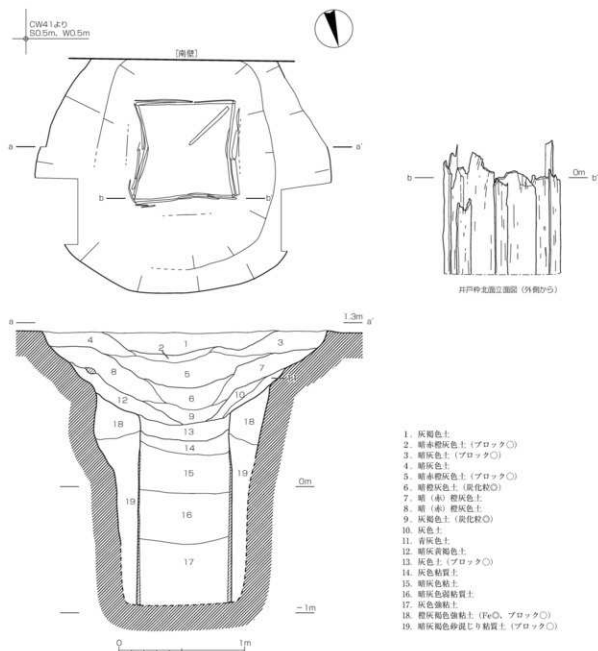
井戸4 (図62・72~75、図版20・21・37・40)

A地点南辺中央西寄り、CV・CW41区に位置する。南辺は調査区外にあたり、検出できなかった。また、井戸

北半部には、南側溝を掘削しており、その部分は失われている。＜4層＞で検出した。検出面の標高は1.23m、底面高は-1.08mで、深さは2.31mである。

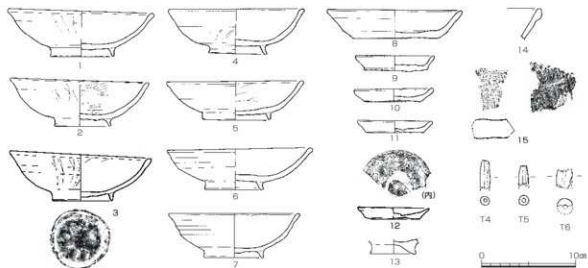
井戸の中心部には方形縦板組横棧留めの井戸枠が設置されている。平面形については、上面では東辺、北辺は弧状の掘り方であること、法面で確認された傾斜変換線も同様に弧状のラインをなすことから、西辺南側が直線的になるもの、おおむね円形となることが想定される。底面は内包した木枠に沿い、方形を呈すると推測される。規模は、上面で東西2.34m、南北1.98m以上、底面は木枠の抜き取り作業のため、平面的な確認ができなかったが、断面等の情報を総合すると、東西0.9m前後、南北0.9～1.0m前後の規模が推定される。

埋土は19層に分層される。土色・土質・包含物および木枠との関係を指標に六群に大別する。一群は1層で、



土器小片を含む灰褐色土である。井戸がほとんど埋没した後、最後にこった窪みに流入した自然堆積層である。二群は2～5層が該当する。土色は暗灰～暗灰褐色土を基調としており、2・5層では鉄分の沈着の影響もあり赤～橙色を帯びる。ブロックの包含は2・3・5層にみられており、人為的な埋め戻し土の可能性もある。三群は6～8層が該当する。赤～橙色を帯びた灰褐色土を基調とする。7・8層は皿状に開く法面に沿って、外縁から中央部にむけて緩やかに下る傾斜で堆積する。その上面は6層との層理面から角度を変え、井戸中央部にボウル状の窪みを形成している。この窪みに堆積する6層には炭化粒の包含が顕著にみられ、土器小片を含んでいる。四群は9～12層が該当する。本群の堆積構造も三群と同じで、皿状に開く法面に沿って10・11層、12層が堆積し、井戸中央部にボウル状の窪みが形成されている。この窪みに堆積する9層には炭化粒が多く包含されている。こうした構造が連続する二層群に認められることから、井戸中央部に窪みを作り、そこで焼成行為を伴う祭祀が複数回にわたって執り行われたことを想定したい。五群は井戸枠内の埋土である。13層は暗黄褐色土ブロックを含む灰色土、14層以下は灰色を基調とする粘土・粘質土が堆積する。このうち16層から土器の包含が認められるようになり、最下層の17層では完形の土器質土器碗を含む多くの土器が出土した。六群は井戸枠の裏込め土で、18・19層が該当する。直交する南北断面でも、18層に対応する裏込め土上半、19層に対応する裏込め土下半には、土質・土色・包含物などの要素において東西断面と同じ内容が観察された。

井戸中央には、方形縦板組横棧留めの井戸枠が設置される。四隅に柱はなく、横棧は二段確認された。上下二段の横棧の間は、全てのコーナーで角材を支持材として縦位に嵌めこみ構造となっている。発掘時には、南西の



遺物番号	器種	法量: cm < 平均値 > - ±1/6以下				特徴	胎土	色調: 内/外	
		口径	底径	器高	器底残存状況				
1	土師器 碗	<15.45>	6.6-7	4.4-5.2	1/1	内: ナデ(工具痕)、外: 赤目斑、垂焼き痕、少し歩み、2次割傷	陶砂・石英多量	淡黄白/白	
2	土師器 碗	14.1-14.8	<6>	4.6-5.2	1/1	内: 裏ノガキ少、外: 浅い脚柱・赤目斑、口ノ腐、1次割傷	陶砂・石英薄	淡黄白	
3	土師器 碗	<14.9>	<6.3>	4.5-5.6	1/1	外: 脚柱・赤目斑、高台内: 脚柱少完全・赤目斑、内: 垂焼き痕	陶砂・薄少	淡黄白/白	
4	土師器 碗	14.4	6.1	4.6-5.3	1/1(2: 高台1/1)	内: ナデ・垂焼き痕、外・高台内: 脚柱・ナデ・赤目斑	陶砂・薄	淡黄白	
5	土師器 碗	<14.35>	<7.1>	<4.15>	4/5	内: ナデ(工具痕)・種子圧痕・垂焼き痕、外・高台内: 赤目斑	陶砂・薄	淡黄白	
6	土師器 碗	15.4	<6>	<4.35>	1/1(4: 高台3/4)	ナデ・浅い脚柱、全面覆付着、歩み、7次割傷	陶砂・薄	灰～黒褐色	
7	土師器 碗	14	6.3	4.5	1/1(3: 高台1/1)	内: ナデ(工具痕)・垂焼き痕、外・赤目斑、高台内: 脚柱少、垂焼傷	陶砂・石英薄	淡黄白～黒褐色	
8	土師器 杯	14.4	9.2	<5>	1/1(3: 底1/1)	底外: 裏ノガキ・ロケロ回転石、内外: 焼熱・燻で黒褐色化	陶砂・薄少	淡黄白	
9	土師器 皿	<8.45>	<6.9>	<1.6>	1/1	内: 中央部に上下ナデ、底外: 裏ノガキ・ロケロ回転石、並焼傷	陶砂・赤色粒少	明灰～暗褐色	
10	土師器 皿	8.5	6.1	<1.35>	5/8	全体焼成、横ナデ、底外: 裏ノガキ	陶砂・赤色粒	淡黄白	
11	土師器 皿	8.1	6.2	<1.2>	1/3(4: 底1/1)	横ナデ、底外: 裏ノガキ・ロケロ回転石、筋ノ筋	陶砂・赤色粒少	明灰	
12	土師器 皿	7.6	5.7	<1.2>	1/3	底外: 裏ノガキ・ロケロ回転石・飯目痕、底内: 焼き跡(2mm)の凹み、燻	陶砂・石英薄	淡黄白(底)・淡黄白	
13	土師器 器片	-	4.9	-	1/1	横ナデ、底外: 裏ノガキ前、内外: 一部黒褐色化(燻熱?)	陶砂	淡黄白～黒褐色	
14	土師器 器片	-	-	-	-	内外焼成	陶砂	淡黄白(ナデ)～灰	
遺物番号	器種	法量(縦x横x高): cm	縦寸: cm	横寸: cm	重量: g	保存状況	特徴	胎土	色調
19	横板組 瓦	(5.7)	(5.7)	(2)	-	一部	内面: 赤目斑、凸面: 平行タタキ	陶砂・塵多量	灰
14	土師	(3)	(3)	(1)	0.95	2.9	約1.2 底(約4cm)の穿孔、ナデ・割傷、焼熱?	陶砂・薄	淡黄白
15	土師	(2.1)	(2.1)	(1)	1.19	約1.2	底(約4cm)の穿孔、ナデ・割傷、焼熱?	陶砂	淡黄白
16	土師	(2.1)	(2.1)	(0.85)	0.85	2.8	一部 底(約3cm)の穿孔、ナデ・割傷	陶砂・薄	淡黄白

図73 井戸4出土遺物(1) (縮尺1/4)

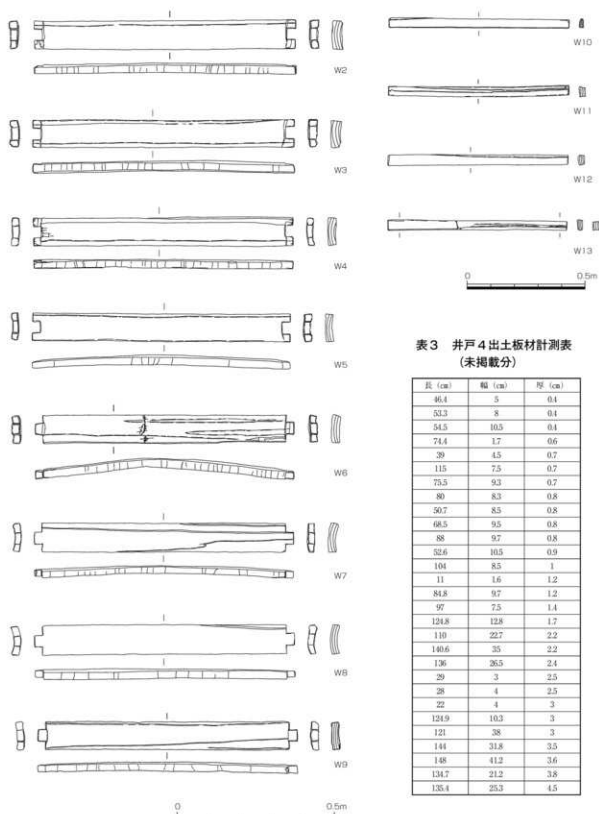
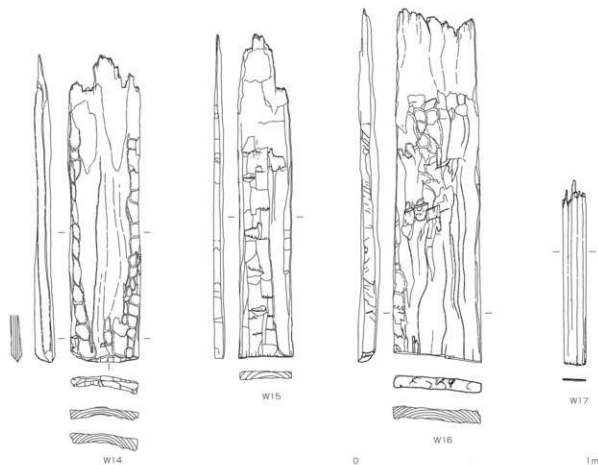


図74 井戸4出土遺物(2) (縮尺1/12・1/16)

角材は外れて内側に倒れこんでいた。縦位に立てて使用された板材は、幅広のものを一辺に数枚用い、隅り合う板材の木端同士を重ねながら立て並べ、細い板材は外側から隙間を塞ぐように用いられる。

遺物は土師質土器碗・杯・皿のほか、白磁碗、瓦、土錘が出土した。その他に井戸枠構成材を取り上げた。井戸枠構成材のうち、横棧は両端凸部、両端凹部に加工した直方体の角材を三枚組にし、直角に接合している。横棧の凸部、凹部にはのこぎりによる切削痕がみられる。仕口間の長さはすべては約76cmとなっており、枠を組み上げた際に歪みでない寸法になっている。板材は33枚を取り上げている。厚手のものには、手斧等の工具によるはつきり痕が周縁部に確認されるもの、部分的に施されるものがある。はつきり痕が部分的や周縁に確認されるも



番号	部 種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	特 徴
W2	井戸枠・横木 (平はぎ凹形)	83	9.2	3.1	両木口に平はぎ切り出し、本端にはつきり痕
W3	井戸枠・横木 (平はぎ凹形)	83	8.9	3.3	両木口に平はぎ切り出し、一部のはつきり痕、本端にはつきり痕
W4	井戸枠・横木 (平はぎ凹形)	82.5	9.4	2.6	両木口に平はぎ切り出し、本端にはつきり痕
W5	井戸枠・横木 (平はぎ凹形)	82.2	8.9	2.4	両木口に平はぎ切り出し、一部のはつきり痕、本端にはつきり痕
W6	井戸枠・横木 (平はぎ凸形)	82.3	9.2	2.7	中間部で折れる、両木口に平はぎ切り出し、一部のはつきり痕、本端にはつきり痕
W7	井戸枠・横木 (平はぎ凸形)	82.3	9.3	2.5	両木口に平はぎ切り出し、一部のはつきり痕、本端にはつきり痕
W8	井戸枠・横木 (平はぎ凸形)	82.5	9.4	2.2	両木口に平はぎ切り出し、一部のはつきり痕、本端にはつきり痕
W9	井戸枠・横木 (平はぎ凸形)	82.3	9	2.5	両木口に平はぎ切り出し、本端にはつきり痕
W10	井戸枠・支保材 (縦位)	76.3	4.2	1.9	滑り易き素材、両木口にのこぎり痕
W11	井戸枠・支保材 (縦位)	76.5	4.2	2.6	滑り易き素材、両木口にのこぎり痕
W12	井戸枠・支保材 (縦位)	76.2	4.6	2.8	滑り易き素材、両木口にのこぎり痕
W13	井戸枠・支保材 (縦位)	76.1	4.5	2.8	滑り易き素材、両木口にのこぎり痕
W14	井戸枠・板	130.4	30.6	5.1	打ち廻り後、木表縁部部、本端、木口は手斧ではつきり
W15	井戸枠・板	137.5	23.1	3.4	打ち廻り後、木表、本端は手斧ではつきり
W16	井戸枠・板	143.5	35.3	5.5	打ち廻り後、木表、本端、木口は手斧ではつきり
W17	井戸枠・板	78.2	9.8	0.7	打ち廻り後材

図75 井戸4出土遺物③ (縮尺1/16)

のでは、表表面とも割り裂き痕がのこされたままである。平滑に仕上げられている木口、木端には手斧等の工具によるはつきり痕が観察できる。W14では、井戸掘り方底面に当たる木口の断面が鋭角になるよう、木表・木裏の両面から手斧で切削している。

本井戸の時期は出土遺物から中世前半（12世紀中頃）と位置づけられる。

井戸5（図76～80、図版22・23・41）

A地点南西隅、CW44区に位置する。調査地点西側は矢板で区画されており、A地点では全体のおよそ2/3を検出した。調査区外に位置した未調査部分は2002年に実施された周辺外構工事に伴う立会調査時（E地点）に

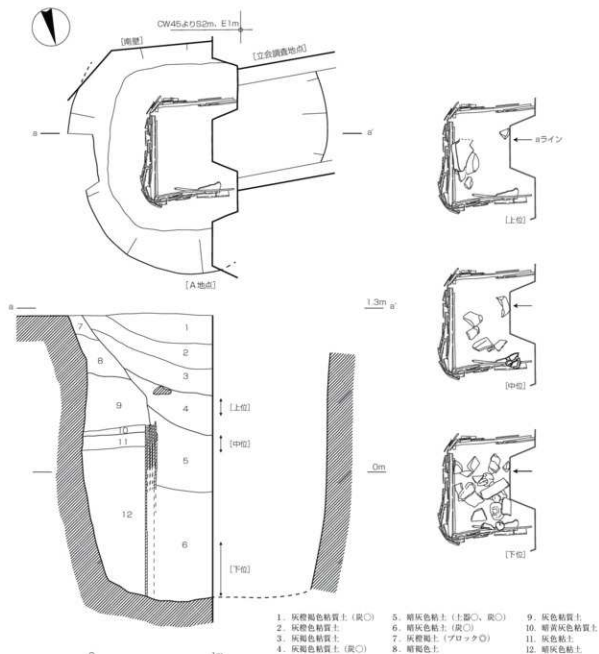


図76 井戸5（縮尺1/30）

表4 井戸5出土礫一覽

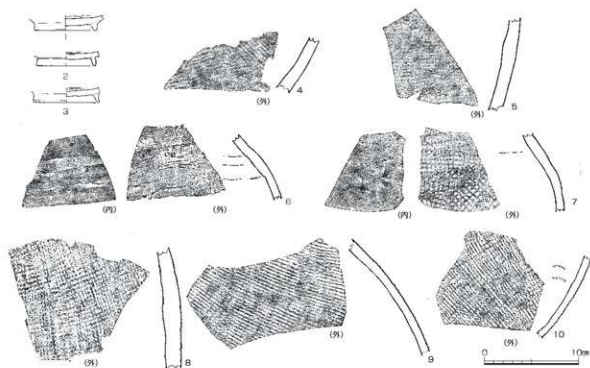
報告 番号	長さ:cm	幅:cm	厚さ:cm	重量:g	石材	備考	出土レベル:m		位置
							上面	下面	
							1	15	
2	105	159	6.2	1147	凝灰角礫岩		0.6	0.47	
3	14.1	196	9.3	4420	砂岩ホルンフェルス	角礫・圓石	0.61	0.46	
4	14.8	22.8	6.6	3833	石炭質岩	円礫	0.55	0.37	
5	8.7	4.8	4.8	475.4	砂岩ホルンフェルス	円礫	0.2	0.12	中位
6	10.7	12.7	5.9	1037	花崗岩	角礫・圓石・稜熟	0.2	0.12	
9	9.8	7.6	7.6	1061.7	泥岩砂岩	円礫	0.13	0.04	
10	17.7	10.7	6	1767	安山岩	円礫	-	-0.48	
11	196	8	3.6	1172	凝灰岩質凝灰岩	円礫	-	-0.48	
12	10	7.5	2	213	カサクレイサイト	角礫・圓石	-	-0.58	
13	7.2	11.5	6.2	608.9	凝灰花崗岩	角礫・圓石・稜熟	-0.5	-0.6	
14	15	6.4	7	807.7	凝灰岩質凝灰岩	円礫	-0.55	-0.65	
15	13	24.3	6.9	2798	凝灰角礫岩	円礫	-0.54	-0.66	
16	9.2	14.5	4	589.3	粘板岩	円礫・圓石・稜熟	-0.65	-	
17	11.8	9.5	6	661	閃緑岩	角礫・圓石	-0.67	-0.76	
18	14.4	14.4	9.2	2098.3	花崗岩	円礫・圓石・稜熟?	-0.68	-0.79	
19	16	10	8.8	1919.5		角礫・圓石	-0.75	-0.77	下位
20	13.2	11	4.2	717.2	泥岩	角礫・圓石	-0.75	-0.78	
21	7.3	6.5	3.4	2841	凝灰花崗岩	角礫・圓石・稜熟顕著	-0.8	-0.82	
22	18.7	13.9	7.7	2242.6	凝灰角礫岩	角礫・圓石	-	-0.9	
23	16.6	13.2	8.4	1807.4	凝灰岩	角礫・圓石	-0.85	-0.95	
24	18.8	14.2	7	1822.7	安山岩	角礫・圓石・稜熟顕著	-	-0.92	
25	18.5	13	9.1	2345.6	凝灰花崗岩	角礫・圓石・稜熟顕著	-	-0.93	
26	11.8	11.3	10.5	1544.2	安山岩	角礫・圓石・稜熟	-	-0.95	
27	17.5	11.6	9.3	1398	砂岩ホルンフェルス	角礫・圓石	-	-	
28	12.3	5	3.5	229.1	凝灰岩質凝灰岩	角礫・圓石	-	-	

において、幅約0.9mの管路内で検出され、北西側の一部が調査された。検出層は<4層>で、検出標高は1.24m、底面高は-1.03mで、深さは2.27mである。

井戸の中心部には方形縦板横積残りの井戸枠が設置されている。平面形については、調査範囲外の部分もあるが、確認された掘り方ラインを総合すると、おおむね円形になると推定される。底面については、E地点は狭隘ななかでの調査となったため、底面の形状を確認できなかった。A地点では西側以外の三辺がこの中央部の方形井戸枠に相似する底面ラインが確認されており、隅丸方形の平面形を呈すると考えられる。規模は、上面で東西2.06m、南北1.82m以上、底面で南北1.32m、東西0.9m以上をはかる。断面形はY字形を呈する。

埋土は12層に分層される。土質、包合物、および木枠との関係を考慮し、六群に大別する。一群は井戸上半の皿状部に堆積した1~3層が該当する。一部で橙色がかる灰~灰褐色粘質土を基調とする。1層では炭の包含がみられるが、ほかに目立った包合物はない。またレンズ状の層が整合して堆積していることが本群の特徴である。二群は4層が該当する。皿状部と井戸枠部との変換点にまたがる灰褐色粘質土層である。礫、土器の包含が認められる。礫（上位群）は標高0.37~0.53m間に数個が重なった状態で確認された。E地点においても標高0.2~0.7m前後で数個の礫が重なって検出されており、井戸枠部と皿状部の変換点まで堆積が進行した段階で井戸内に礫が入れたことを示す。三群は5・6層が該当する。いずれも土器片・炭小片を包含する暗灰色粘土層であるが、層理面の下位、標高-0.2m付近において、層厚約3cmと薄く、側方展開の弱いレンズ状に堆積した炭層が確認できたため、その上下で二分した。5層上半部、6層下半部には礫が多く含まれる。

5層の礫（中位群）は、垂直分布では標高0.04~0.2mに分布している。平面的には、井戸枠内でも北辺から東辺にかけての周縁部に散在する。6層の礫（下位群）は、標高約-0.5~-1.0mの間に分布する。このなかでも、礫の下面レベルが、①約-0.5~-0.65m、②約-0.75~-0.8m、③約-0.9~-1.0mの範囲でまとまる①~③の3小群に分層される。下位群では、上半に円礫、下半に角礫が多い傾向にあり、下半の角礫の多くが割石である。



遺物番号	器種	法量・cm・<平均値>・～1216日?			特徴	胎土	色調：内/外
		1層	底径	器高			
1	土師器 碗	-	<6.50>	-	1/1	内：施ミガキ、底外：押圧・亀裂	磁砂 白
2	土師器 碗	-	<6.3>	-	1/1	内：施ミガキ、底外：ナデ	磁砂 白
3	土師器 碗	-	6.5	-	-	内：施ミガキ・僅少、底外：ナデ・僅少	磁砂 白
4	須恵器 変	-	-	-	-	内：ナデ・押圧、外：平行タタキ後ナデ、焼き不明瞭、5と同一個体?	磁砂 淡灰(断) 淡灰白
5	須恵器 変	-	-	-	-	内：ナデ・ナズリ底少、外：平行タタキ後縦ナデ、焼き不明瞭	磁砂 淡灰(断) 淡灰白
6	須恵器 変	-	-	-	-	内：ナデ、一部ナズリ底、外：ナデ、光沢(薄自然釉?)	磁砂・磁青 灰
7	須恵器 変	-	-	-	-	内：ナデ・下半上具底、外：格子目タタキ後縦ハケ・縦貫・光沢	磁砂・磁青 青灰・暗青灰
8	須恵器 変	-	-	-	-	内：ナデ・ナズリ底、外：格子目タタキ・沈縮、焼き不明瞭	磁砂・黒色粒 灰/灰-灰黒
9	須恵器 変	-	-	-	-	内：ナデ・押圧(端)、外：格子目タタキ、焼き不明瞭	磁砂 灰
10	須恵器 変	-	-	-	-	内：当て具底、外：格子目タタキ、焼き不明瞭、やや瓦質、(断)白	磁砂・磁砂少 暗灰黒/灰黒

図7 井戸5出土遺物1) (縮尺1/4)

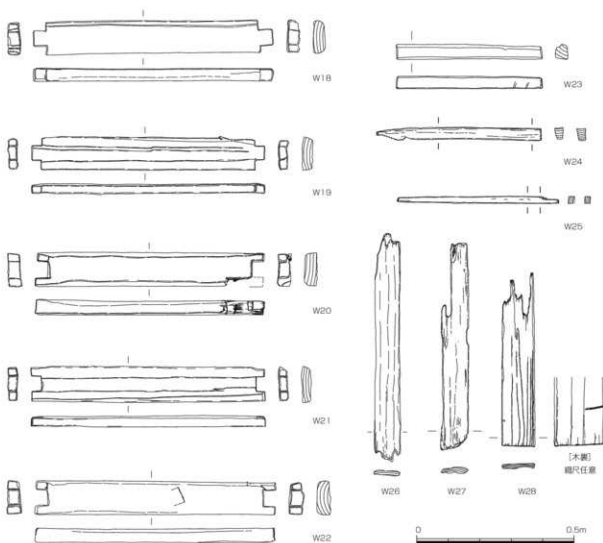
また、被熱痕を有するものも目立つ。

四群は7・8層が該当する。粒径2～5cmの白色土ブロックを多く含む灰橙褐色～暗褐色土である。井戸使用時には本群の形成する斜面が皿状部の法面となっていたこと、ブロックを多く含む土であることから、本群は人為的な埋土であると考えられる。五群は井戸枠の裏込め土で、9・10層が該当する。9層は皿状部と井戸枠部の変換点にあたる部分に堆積した灰色粘質土で、厚く堆積している。井戸枠の裏込め土となる10層は暗黄灰色粘質土で、層厚は約5cmと薄い。いずれも粒径2～7cmの黄色・白色土ブロックを含んでいる。六群は灰～暗灰色粘土で、11・12層が該当する。粒径3～7cmの青灰色土ブロックを含む。いずれも井戸枠の裏込め土である。

井戸中央には、方形縦板組横棧留めの井戸枠が設置される。横棧は一段分のみが確認された。その代わりに、井戸枠の天端では、東辺・北辺で縦板材の内側に横板(図78-W26・27)が差し渡されている状況が確認されている。ほぞを作出した横棧に代わり、縦板の支保材として用いられたものと考えられる。隅柱は北東・南東隅にはなく、E地点で検出した西辺でも柱は確認されなかったため、当初から柱のない枠であったと考えられる。横棧で組まれた枠の外側には、縦位に立てた板材が使用されている。板材は二重、三重に重ねて立てられており、乱雑な配列状況である。三枚組のほぞを作出する角材を用いた横棧が一段分のみ使用であることも併せ、先述の井戸4に用いられた井戸枠と比較すると粗雑な作りの井戸枠であるといえよう。

遺物は土師質土器残片・須恵器壺片・爨片が出土した。本井戸は他の井戸と比較して土器類の出土量が寡少である。また、A地点では井戸枠構成材を取り上げたが、E地点では井戸枠構成材の抜き取りによる法面崩壊のおそれがあること、工事が井戸枠まで及ばないことから、現地で埋め戻している。横桟についても西辺を除く三辺で一段分を取り上げた。

縦板として用いられた板材のうち、取り上げが可能だったA地点のものは82枚である。その法量は幅約8～15



番号	器種	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	特徴
W18	井戸枠・横木 (平はせ凸形)	763	10.2	3.8	両本口に平はせ盛り出し。一部のごぎり痕
W19	井戸枠・横木 (平はせ凸形)	739	10.4	3.4	両本口に平はせ盛り出し。一部のごぎり痕
W20	井戸枠・横木 (平はせ凹形)	764	11.2	4.2	両本口に平はせ切り出し。一部のごぎり痕
W21	井戸枠・横木 (平はせ凹形)	745	11.4	3	両本口に平はせ切り出し。一部のごぎり痕
W22	井戸枠・横木 (平はせ凹形)	764	10.6	4.3	両本口に平はせ切り出し。一部のごぎり痕
W23	井戸枠・支保材 (縦板)	465	4.9	4	割り置き製材。両本口にのごぎり痕
W24	井戸枠・枠状加工材	524	3.9	2.9	表裏・本端の4面は面取り。片側本口欠損
W25	井戸枠・枠状加工材	515	2.3	1.8	表裏・本端の4面は面取り。両本口欠損
W26	井戸枠・板	724	8.2	1.4	割り置き製材。本口に2分所の抉り
W27	井戸枠・板	637	8.8	2	割り置き製材。本口は斜め方向に切斷。工具痕あり
W28	井戸枠・板	567	9.9	1.6	割り置き製材。本表に溝状のごぎり痕

図78 井戸5出土遺物② (縮尺1/12)

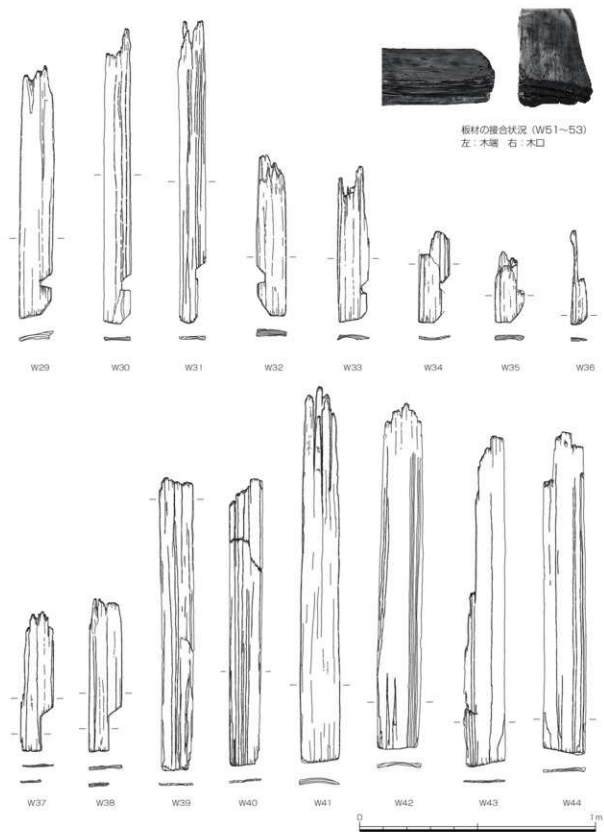
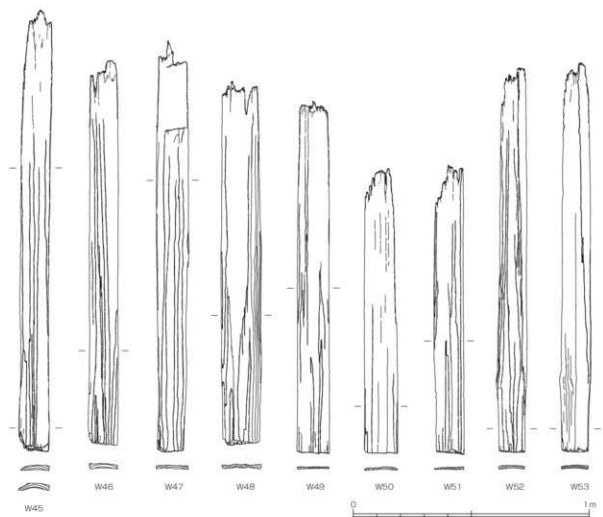


図79 井戸5出土遺物3) (縮尺1/12)



番号	形態	残存長 (cm)	残存幅 (cm)	厚 (cm)	特徴
W29	井戸枠・板	107.4	14.3	3.2	削り置き製材、台形の切り欠き
W30	井戸枠・板	125	11.7	1.6	削り置き製材、台形の切り欠き
W31	井戸枠・板	128.2	11.6	1.5	削り置き製材、台形の切り欠き
W32	井戸枠・板	68.2	12.6	3.3	削り置き製材、台形の切り欠き
W33	井戸枠・板	66.1	13.6	2	削り置き製材、台形の切り欠き
W34	井戸枠・板	38.9	13	1.1	削り置き製材、台形の切り欠き
W35	井戸枠・板	30.1	12.3	2.1	削り置き製材、台形の切り欠き
W36	井戸枠・板	40	6.9	1.5	削り置き製材
W37	井戸枠・板	59.2	13.8	1	削り置き製材、斜め方向に切り出し、工具痕あり、W38と接合
W38	井戸枠・板	64.9	13.9	1.3	削り置き製材、斜め方向に切り出し、工具痕あり、W37と接合
W39	井戸枠・板	124.4	14.5	0.7	削り置き製材、本口に工具による切断痕、W40と接合
W40	井戸枠・板	121.7	14	0.7	削り置き製材、本口に工具による切断痕、W39と接合
W41	井戸枠・板	159.4	17	1.9	削り置き製材、本口に工具による切断痕、W42と接合
W42	井戸枠・板	146.8	18.3	1.8	削り置き製材、本口に工具による切断痕、W41と接合
W43	井戸枠・板	140.3	17.3	0.8	削り置き製材、本口は本口に対して斜交、工具による切断痕、W44と接合
W44	井戸枠・板	136.6	17.9	1.6	削り置き製材、本口は本口に対して斜交、工具による切断痕、W43と接合
W45	井戸枠・板	187	12.8	2.2	削り置き製材、W46と接合
W46	井戸枠・板	162.8	12.6	2.4	削り置き製材、W45と接合
W47	井戸枠・板	174.2	13.7	1.4	削り置き製材、W48と接合
W48	井戸枠・板	154.2	17.2	2	削り置き製材、W47と接合
W49	井戸枠・板	149.2	13.8	0.9	削り置き製材、W49・50と接合
W50	井戸枠・板	120.6	14.2	1	削り置き製材、W48・50と接合
W51	井戸枠・板	122.6	12.3	1	削り置き製材、W48・49と接合
W52	井戸枠・板	162.8	12.7	1.5	削り置き製材、W53と接合
W53	井戸枠・板	165.2	13.1	1.6	削り置き製材、W52と接合

図80 井戸5出土遺物④(縮尺1/12)

表5 井戸5出土板材計測表(未掲載分)

長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)
423	64	0.6	418	51	1.1	62	84	1.5	128.1	169	1.8
44.8	7	0.6	21	6.9	1.1	47.1	10	1.5	63.9	11.9	2
54.1	6.3	0.7	64.9	10.9	1.1	53.8	11.6	1.5	171.7	17.1	2
58.1	11.2	0.7	132.3	14	1.1	148.9	10.1	1.6	60.2	11.6	2.1
40.8	6.8	0.8	48.9	6	1.2	12.5	11.7	1.6	58.2	12.7	2.1
68.7	9.7	0.8	21.6	8	1.2	145.5	13.6	1.6	138.5	11	2.2
27.1	7	0.9	56.7	9.8	1.2	151.7	18.3	1.6	70.8	12.6	2.2
44.2	10.9	0.9	30.2	14.7	1.2	106.1	12.1	1.7	96.3	10.1	2.3
48.9	13.3	0.9	141.6	11.3	1.3	30.8	12.2	1.7	68.5	8.3	2.4
31.4	3.5	1	175.7	13.7	1.3	46.8	6.1	1.8	14.6	3.5	2.5
6.9	8.4	1	42.9	7.5	1.4	48.4	10.8	1.8	51.7	12.2	2.6
51.3	8.6	1	4.7	7.5	1.4	50.1	1.2	1.8	61.8	22.8	3
68.2	11.4	1	55.9	12.8	1.4	145.5	13.8	1.8			
51.8	12.7	1	41.4	14.5	1.4	162.2	14.6	1.8			

cm、厚さは1～2cm程度が大半で、幅が16cmを超えるもの、厚さ3cmを超えるものは少ない(表5)。井戸枠に用いられた板材では、8組19枚が接合した(図79・80-W37～53)。いずれも木表、木裏に割り裂き痕が認められ、原材を打ち割って製材したものであった。また、端部の切り欠き痕の形状から、折置組の梁材を打ち割って製材したものが含まれていることが明らかになった(W29～34)。そのほか、木口に段差をつけるように切り出すもの(W37・38)、斜めに切り出すもの(W43・44)があり、いずれも建築材を再加工して井戸枠に転じたものと考えられる。

本井戸の時期は出土遺物から中世前半(12世紀)に位置づけられる。

4. 土坑

土坑13(図61・81・82、図版23・37)

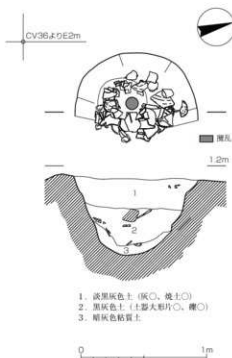
A地点東辺南側、CU35区に位置する。<5層>で検出した。東側溝の東側で検出されており、土坑西部を失っている。また、土坑中央部に近代以降の建物基礎杭が打ち込まれており、破壊をうけている。検出面の標高は1.02m、底面高は0.49mで、深さは0.53mである。

平面形は上面、底面ともに円形と推定される。規模は上面で径約0.96m、底面で径約0.44mである。断面形は碗形である。

埋土は3層に分層される。1層は淡黒灰色土で、灰を多く含むほか、焼土や暗黄褐色土ブロックを包含する。2層は黒灰色土で、土器大形片を多量に包含しており、その中には被熱痕のある礫も混じるが、灰や焼土の包含はみられない。2層上面や法面に被熱痕の痕跡が観察されなかったという調査時の所見を合わせると、こうした被熱痕のある礫が他所から本土坑に持ち込まれたと考えざるを得ない。3層は暗灰色粘質土で、黄褐色砂ブロックを含む。

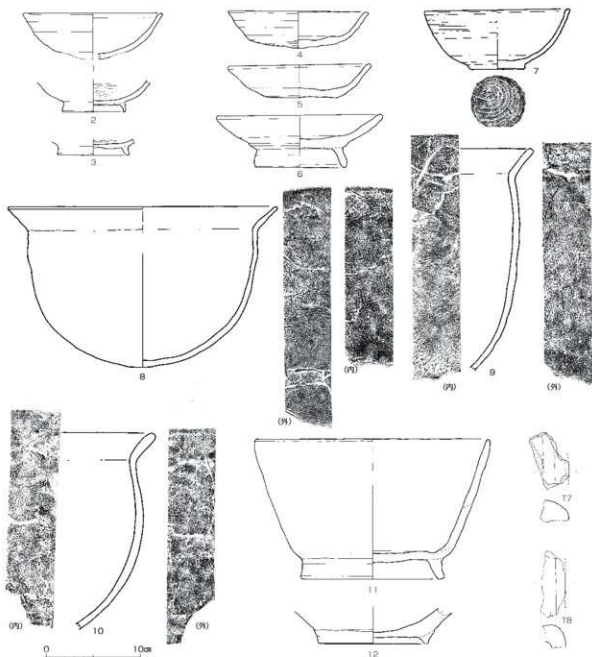
1層では炭・灰・焼土、2層では土器がまとまって出土したことから、祭祀的な行為が執り行われたものと考えられる。

遺物は、土器がコンテナ25箱、礫が1箱分出土した。図化した土師質土器台付杯・杯・椀・鍋、須恵器碗・鉢といった土器



1. 淡黒灰色土(灰○、焼土○)
2. 黒灰色土(土器大形片○、礫○)
3. 暗灰色粘質土

図81 土坑13(縮尺1/30)



遺物番号	器種	法量 : cm < 平均値 > , n = 11, 6以下				特徴	胎土	色調 : 内/外
		口径	底径	器高	許淵部残存枚			
1	土師器 碗	11.8	-	-	1/4	曹風、高台器類	細砂・糠多	白
2	土師器 碗	-	6.7	-	1/1	内: 腹上器、外: 曹風・神瓦、高台: 薄手、唇部: 厚手	細砂、土の細か	白
3	土師器 碗	-	7.6	-	2/5	内: 腹上器類、高台: 厚手、曹風、器厚不均、生焼け?	細砂・糠少	白・赤い・淡灰・淡灰黒
4	土師器 杯	<14.7>	10.6	4	1/1 (1)、底2/3	底外: 腹上器・ロタロ回転石、底成形痕跡で大きく曲線、硬質	細砂/赤色粒多	明黄緑
5	土師器 杯	<15.1>	8.5	<3.45>	1/1	底ナシ、底外: 腹上器・ロタロ回転石、曹風、生焼け?	細砂/赤色粒少	白・灰黒
6	土師器 有付鉢	17.8	9.8	<3.55>	1/1 (1)、脚台1/2	底ナシ、高台の上腹ナリ、胎土: 粘多め	細砂・糠・赤色粒	淡黄白
7	土師器 碗	15.5	8.9	<6.3>	1/2 (1/1)	口縁高台、脚板ナリ口上リ、底外: 赤ナリ・ロタロ回転石	細砂・糠	黄緑
8	土師器 碗	28.7	-	17.1	1/4	内外: ハナメ、曹風、神瓦、厚手: 厚手、外底: 曹風で黄色	細砂・粗砂・糠	淡灰黒・淡灰褐色
9	土師器 碗	-	-	-	-	内: ハナメ、外: ハナメ・神瓦・曹多、底内背: 曹風で表面変化、黄色	細砂・糠多	淡灰黒/期1灰1輪
10	土師器 碗	-	-	-	-	内: 口ナシ、外: ハナメ・底ナシ・曹多、厚手: 口縁大ナ	細砂・粗砂・糠多	赤黒/期1輪
11	土師器 鉢	25	14.9-15.3	14.9	1/1 (1/5)、高台1/1	ナシ・高台底: 曹風、底外: 曹風、脚上: 曹多・生焼け?	細砂・糠多	淡黄白・黄緑
12	土師器 鉢	-	11.6	-	1/2	ナシ、内: 高台底・曹風・変化、高台内: 腹上器・曹多	細砂	淡灰・灰

遺物番号	器種	法量 : cm (残存)長/幅/厚/重量 : g				特徴	胎土/泥人物	色調
		(残存)長	(残存)幅	(残存)厚	重量			
17	不明土製品	(6)	(3)	(2.2)	38.4	一部ナシ・神瓦・胎土: 胎物質の空回多・細か、穿孔は不明	細砂/赤色粒、赤多	灰黄・淡黄(新)黄緑
18	不明土製品	(2)	(2.5)	(2.4)	41.1	一部ナシ・神瓦・胎土: 胎物質の空回多・細か、穿孔は不明	細砂/赤色粒・赤多	淡黄(新)黄緑

図23 土坑13出土遺物 (縮尺1/4)

類のほか、被熱痕のある割石や円礫が出土している。含まれていた礫については、円礫が多数を占め、角礫も散見される。割れた痕跡をもつ礫もある。重量は多くが約0.5～1kgで、大型のものでは約2.2kg、約3.3kgに及ぶ。

本土坑の時期は出土遺物から中世前半（11世紀後半）と位置づけられる。

土坑14（図62・83、図版23）

A地点南辺中央、CV40区に位置する。<5層>で検出した。溝35・36の底面で検出されており、本土坑埋没後に溝群が掘削されたものと整理される。検出面の標高は1.08m、底面高は0.03mで、深さは1.05mである。

平面形については、上面は上層の遺構により破壊をうけており、残存部では不整な円形を呈する。底面は楕円形である。規模は上面で長軸長1.08m以上、短軸長1.0m以上、底面で長軸長0.25m、短軸長0.2mである。断面形は二段掘り状を呈する。直立～急傾斜の法面をなす箱形の掘り方の底面中央部に、径約0.2～0.25m、深さ約0.2～0.25mの規模で楕円形に掘り窪めた小穴が付随する。

埋土は8層に分層されるが、色調・土質・包含物等から四群に大別する。一群は1～3層で、褐色系の色調を呈する埋土である。鉄分の集積やブロックの包含がみられる。炭化物の包含はわずかである。二群は4・5層が該当する。灰色系の埋土で、ブロックを多く含む。三群は6・7層で、灰と砂が互層状をなす。鉄分の集積が非常に顕著であることやブロックの包含量が多いことも本群の特徴である。四群は8層で、粘性の強い灰褐色粘土層である。底面の小穴内の埋土であり、粘質のみられない埋土で構成される上方の3群とは土質の面でコントラストをなす。遺物は土師質土器が出土した。

本土坑の時期は出土遺物から中世前半（12世紀末～13世紀初）と考える。

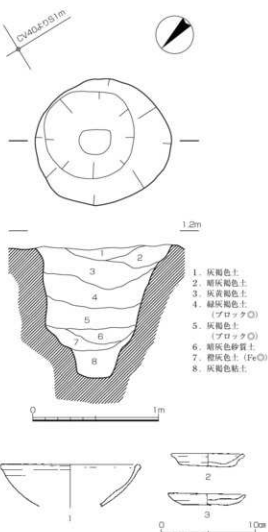


図83 土坑14・出土遺物（縮尺1/4・1/30）

遺物 番号	部 類	法量：cm <平均値> - は1/63以下				特 徴	胎 土	色調・内外
		口径	底径	器高	計測部残存率			
1	土師器 碗	15	-	-	1/3	被熱による褐色化と表面劣化	微砂	白～層褐
2	土師器 皿	8.2	5	<1.25>	1/3	磨滅。内底：重焼きによる変色	微砂/赤色粒	明橙
3	土師器 皿	7.8	6	1.4	口1/2、底1/1	磨滅・劣化・一部被熱	微砂	灰黄白～層褐

土坑15（図61・84、図版23）

C地点中央部、CN33区に位置する。<5層>で検出した。検出面の標高は0.79m、底面高は0.18mで、深さは0.61mである。

平面形は上面では楕円形、底面も半分を失っているが楕円形を呈すると考えられる。規模は上面で長軸長1.25m、短軸長1.11m、底面では残存している長軸長が0.32mであり、約0.64mと復元しておく。短軸長は0.52mである。断面形は逆台形を重ねた二段掘りである。

埋土は8層に分層される。1・2層は埋没最終段階の浅いくぼみの埋土である。灰～灰褐色土で、鉄分、マンガンの凝集がみられる。3層は灰褐色土で鉄分、マンガンの凝集がみられる。断面では底面に凹凸が観察されており、4層堆積後、3層の堆積がはじまるまでに再掘削等の行為がなされたことが考えられる。4層はブロックを含む暗灰褐色土である。特に層下半部にブロックが多くみられる。5～7層は灰色系の色調で、砂と粘土が混ざり合った埋土で構成される。7層でブロックが多くみられることもあわせ、埋め戻し等の行為も想定される。8層は底部に堆積した暗灰色粘質土である。

遺物は中世土器片が出土した。本土坑の時期は出土遺物から中世前半に位置づけられる。

5. 溝

溝27 (図61・85、図取24)

A地点東半中央部から調査区中央の大きな攪乱を隔てたCQ41区を通り、D地点へと至る北西～南東方向に走行する溝で、他の中世溝とは走行方向を異にする。攪乱や調査範囲外区域を扶むが、走行方向、掘り方の形状、埋土、底面の標高等の要素から同一の溝と判断した。A地点では、平面的には1条と認識して掘削したが、断面では東壁で1条、中央部で2条が確認され、D地点では平面的にはは同一の経路に掘削された新古の関係にある溝と確認された。古段階を溝27a、新段階を溝27bとする。調査区内では長さ約50mを検出した。c-c'断面では新古の関係が確認されず、A地点東半では、古段階の溝27aに完全に重複して溝27bが掘削されたと考えられる。また、D地点からb-b'断面間では、切り合いの位置関係から溝27aと溝27bは交差しているとみられる。検出面は<5層>で、検出上面の標高は0.9～1.2m、底面高は

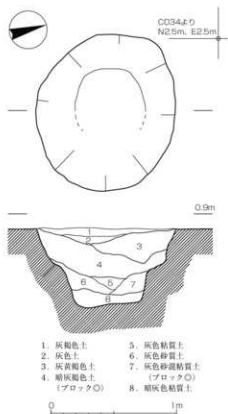
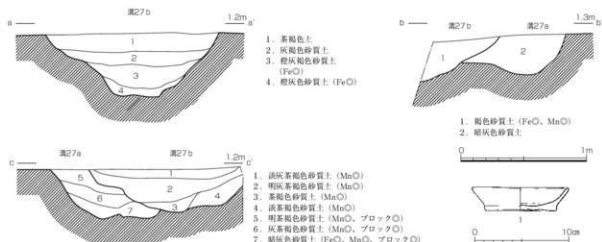


図84 土坑15 (縮尺1/30)



遺物 番号	部 種	法量: cm・<平均値>・±1.6以下				特 徴	胎 土	色調: 内/外
		口径	底径	容 量	計測部残存率			
1	土師器 皿	10.1	<7.60>	2.45	1/33.4, 幅1/1	縁ナデ、外底: 黒キリ、内底: 一部輝シ、口: 僅(打心直?), 胎成 胎砂・細-粗砂 (黄)白		

図85 溝27断面・出土遺物 (縮尺1/4・1/30)

0.32～0.81mで、深さは0.28～0.55mである。北西から南東方向に下がる傾斜を有する。幅は1.38mで、断面形は逆台形である。

埋土はa-a'断面では4層、c-c'断面では7層に分層される。a-a'断面は1層が暗黄褐色土ブロックを含む茶褐色土、2～4層は灰～灰褐色系の色調を呈する砂質土で、いずれも鉄分の沈着が認められ、3層では暗黄褐色土ブロックを含む。各層ともレンズ状に堆積する。c-c'断面は1～4層が溝27b、5～7層が溝27aの埋土にあたる。溝27bの埋土は、明暗のある茶褐色砂質土で、いずれもマンガンの凝集が顕著であり、2・3層ではブロックを含む。溝27aの埋土は、灰～茶褐色の色調を呈する砂質土で、いずれもマンガンの凝集が顕著であり、黄白色砂ブロックを多く包含する。記録したすべての断面で砂質を帯びる埋土が主体をなす。各層とも基本的にはレンズ状の堆積状況を示す。

遺物は古代末頃に属する土師器皿が出土した。本溝の下限は<4層>造成時である11世紀後半である。遺物や土層の時期を勘案し、本溝は古代・中世の境である11世紀中頃の時期のものとして推定しておきたい。

溝28 (図61・62・86・87、図版24・38)

A地点中央およびC地点西端、CN38～CV39区に位置する。南北方向に走行する。西を並行する溝31を切る。調査区内で長さ約45mを検出した。南北ともに調査区外へと延びる。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.78～1.35m、底面高は-0.12～0.5mで、深さは0.39～0.9mである。南から北に下がる傾斜を有する。幅は約1.0～3.7m、断面形は溝幅の広い北半では二段、溝幅の狭い南半では逆台形からボウル状を呈する。

埋土は溝幅が広く、掘削深の大きいa-a'断面では12層、溝幅の狭いb-b'断面、c-c'断面では6層に分層される。

a-a'断面は土質により三群に大別する。一群は1・2層が該当する。灰褐色土で、鉄分の沈着がみられる。溝の最終的な埋没段階において、上面に形成されたたわみ状の窪みに堆積した土層と考えられる。二群は3～10層が該当する。灰色～灰褐色の色調を呈する粘質土で構成される。レンズ状の堆積層が主体だが、部分的に現れ

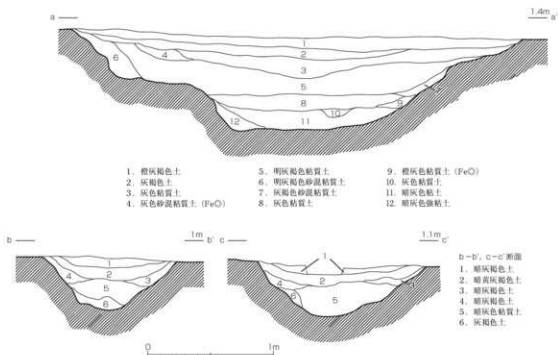
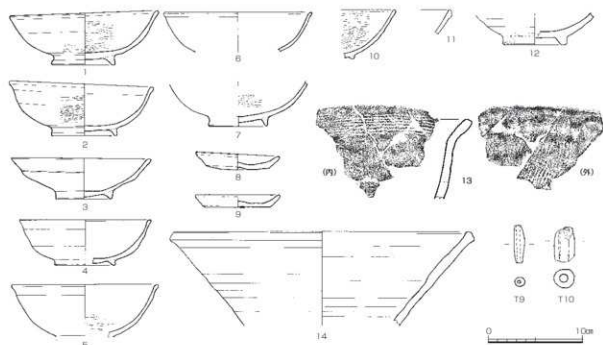


図86 溝28断面 (縮尺1/30)



遺物番号	器種	法量: cm < 平均値 > ~は1.6以下				特徴	粘土	色調: 内/外
		口径	底径	器高	片断部残存率			
1	土師器 碗	15.3~15.8	6.7	5.2~5.8	3/4	内外: 施ミガキ, 高台: 断面三角形・虫目, 器壁厚: 不均	微砂・細砂・礫	淡黄白/白
2	土師器 碗	<15.3>	<7.05>	5.2~5.9	135/6, 高台1/1	外: 施ミガキ, 内: 滑滅, 高台: ナテ	微砂・細砂・礫	白~淡(黄)白
3	土師器 碗	14.8	5.9~6	<4.3>	131/2, 高台1/1	滑滅, 口外: 僅付き, 底外: 丸み, 器壁厚: 不均一	微砂・礫・細砂	淡灰白
4	土師器 碗	14	6.4	4.8	111/4, 高台1/2	滑滅顯著, 調整不明	微砂・粗砂・礫	白
5	土師器 碗	15.6	-	-	1/3	滑滅	微砂・礫	淡黄白
6	土師器 碗	15.5	-	-	1/3	滑滅	微砂・礫・石灰	白
7	土師器 碗	-	-	<6.25>	1/1	内: 施ミガキ, 滑滅, 外: 亀裂, 底外: 丸みライシ・器壁厚い	微砂・礫・石灰	白
8	土師器 皿	<8.95>	6.8	1.4~1.9	1/1	横ナテ, 断面: 施ナリ, ロタロ回転左	微砂・赤色粒	淡(黄)灰白
9	土師器 皿	9	6.8	<1.35>	1/2	滑滅	微砂・細い	淡黄白
10	瓦 器	-	-	-	-	内: 施ミガキ密, 外: 押圧による凹凸, 和泉型	微砂	暗灰・淡灰
11	白 磁 碗	-	-	-	-	施物	粘板	白
12	白 磁 碗	-	6.8	-	1/3	内外: 施物, 高台: ケズリ出し・無物, 内: 使用痕	粘板	白/緑・淡緑
13	土師器 碗	-	-	-	-	内外: 施ミガキ, 外: 押圧痕・僅付き, 器壁? 回転ナテ, 内: 下平に磨り面, 車道系	微砂・粗砂多	暗黄・暗黄緑
14	須恵器 二枚鉢	約31.5	-	-	1/5	滑滅	微砂・細砂・礫	灰

遺物番号	器種	残存長: cm	残存幅: cm	残存厚: cm	重量: g	残存状況	特徴	粘土	色調
T9	土師	4	1.1	1	5.4	1/1	直径0.7cmの穿孔, 滑滅	微砂・粗砂・礫	淡(黄)白
T10	土師	(3.8)	2.3	2.1	13.2	一部	直径0.9cmの穿孔, ナテ, 破損部大	微砂・礫少	淡(黄)白

図87 溝28出土遺物 (縮尺1/4)

る小規模な層である4・6・7層はいずれも砂が混じるという点が共通し、ブロック状の性格をもつ土層と評価したい。三群は底面に堆積する暗灰色粘土層(11・12層)である。灰色砂がラミナ状に入ることが観察されている。b-b'断面、c-c'断面は各層の断面形状により三群に大別する。一群はレンズ状の堆積層である1・2層が該当する。土色は暗灰褐色を基調とする土で、ブロックを包含する。二群は法面に沿って流れ込んだ形の断面形を呈する3・4層で、ブロックを含む暗灰褐色土である。三群は下半部に厚く堆積する5層とブロック状に入る6層で、灰色系の土色を呈する。土質について、5層は粘質を帯び、6層には粘質土ブロックの包含がみられるので、大局的には下半部は粘性のある土層によって埋没していると判断したい。

遺物は完形に近い碗・皿を含む土師質土器、須恵器、瓦器、白磁等が出土している。出土遺物から、中世前半(12世紀中頃)に属すると考えられる。

溝29 (図G1・88、図取25)

B・C地点北辺、CN34~38区に位置する。東西方向に走行する。C地点西端

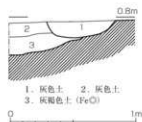


図88 溝29断面 (縮尺1/30)

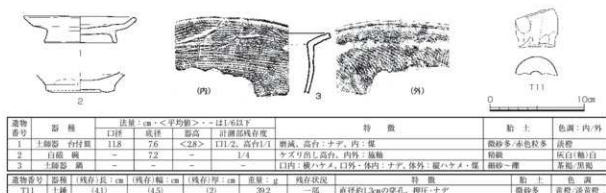


図89 溝29出土遺物(縮尺1/4)

では溝28に切られる。調査区内で長さ約30mを検出した。東端は35ライン付近以東では消失している。西端は調査区外へと延びる。切り合い関係を有して並行する2条の溝である。古段階を溝29 a、新段階を溝29 bとする。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.56~1.05m、底面高は0.45~0.66mで、深さは約0.1~0.4mである。東から西に傾斜する。幅は1.09mで、断面形は椀状を呈する。

埋土は3層に分層される。1層は溝29 bの埋土で、灰褐色土、2・3層は溝29 aの埋土で灰~灰褐色土である。溝29 aでは鉄分の沈着が認められる。

遺物は土師質土器および土鉢が出土している。出土遺物および切り合い関係から、中世前半(12世紀代)に属すると考えられる。

溝30 (図61・90、図版25)

C地点東半、CN29~34区に位置する。東西方向に走行する。土坑15に切られる。調査区内では長さ約26mを検出した。東端は調査区外に、西端は34ライン西側で消失する。検出層は<5層>で、検出上面の標高は約0.8m、底面高は約0.5~0.6mで、深さは約0.2~0.3mである。東から西に下がる傾斜を有する。幅は約0.5mで、断面形は椀状、箱状を呈する。

埋土は3層に分層される。いずれも色調に濃淡のみられる灰褐色土で、鉄分の沈着が認められる。3層にはブロックが含まれる。

遺物は出土していない。走行方向から、中世前半に属すると推測される。

溝31 (図61・62・91、図版25)

A地点中央、CS38~CV39区に位置する。南北方向に走行する。東に並行する溝28に切られる。調査区内では長さ約18mを検出した。北側は溝28によって失われ、南側は調査区外へと延びている。検出層は<5層>で、検出上面の標高は約0.8~1.0m、底面高は約0.4~0.8mで、深さは約0.1~0.45mである。北から南にむかって下がる傾斜を有する。幅は約0.8m以上、断面形は逆台形を呈する。

埋土は2~4層に分層される。土色は褐色~灰褐色を基調とし、土質は一部で砂質がみられる土である。過半の層でブロックの包含が認められ、b-b'断面3層で顕著である。

遺物は中世前半に属する土師質土器小片が出土している。出土遺物および切り合い関係から、中世前半(12世紀前半頃)に属すると考えられる。

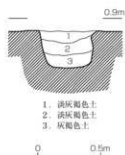
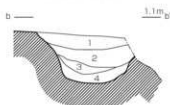


図90 溝30断面(縮尺1/30)

1. 淡灰褐色土
2. 淡灰褐色土
3. 灰褐色土



1. 灰褐色土
2. 淡灰褐色土(FvO)
3. 暗灰褐色土(砂質土ブロックO)



1. 褐色土
2. 灰褐色土
3. 淡灰褐色砂質土(ブロックO)
4. 暗灰褐色土(FvO)

図91 溝31断面(縮尺1/30)

溝32 (図61・62・92、図版25)

A地点中央、CO～CV39区に位置する。南北方向に走行する。CO～CP39区では断続的な検出となったが、調査区内では長さ約35mを検出した。北側はCN39区で消失、南側は調査区外へと延びる。平面的には一条の溝として検出していたが、断面では新古の関係にある二条の溝が切り合っており並行している状況が観察されている。ここでは古段階を溝32a、新段階を溝32bとして報告する。

検出層は<5層>で、検出上面の標高は約0.95～1.1m、底面高は約0.8～1.0mで、深さは0.08～0.19mである。北から南にむかって下がる傾斜を有する。幅は約0.6～0.8m、断面形は皿状を呈する。

埋土は各1層で、溝32aでは灰褐色土、溝32bでは暗灰褐色土～砂質土が確認された。b-b'断面では溝32aの埋土に焼土塊の包含と鉄分の沈着が認められる。

遺物は出土していない。溝の走行方向から中世前半に属すると推測される。

溝33 (図61・62・93)

A地点北半中央、CP・CR39区に位置する。南北方向の溝で、攪乱により中間を分断されている。北側は消失、南側は東西側溝および建物基礎の攪乱で失われている。調査区内では長さ約14mを検出した。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.89～1.02m、底面の標高は0.67～0.96mで、深さは0.06～0.11mである。南から北にむかって下がる傾斜を有する。幅は約0.2～0.45mで、断面形は碗状を呈する。

遺物は出土していない。溝の走行方向から、中世前半に属すると推測される。

溝34 (図62・94、図版26)

A地点南半中央部、CS39～41、CT～CV39・40区に位置する。東西側溝や建物基礎の攪乱が入っているため、失われた部分も多いが、CS39・40区ではほぼ直角に折れる屈曲点をさき、東西方向、南北方向に走行する溝が雛形を成している。東西方向西側は消失しているものの、南北方向南側は調査区外へと延びている。西側に並行する溝35を切り、調査区南辺付近で溝36に切られる関係にある。調査区内では長さ約26mを検出した。検出層は<4層>で、検出上面の標高は1.04～1.28m、底面高は0.8～1.04mで、深さは0.07～0.34mである。東西部分は西から東、南北部分は北から南にむかって下がる傾斜を有するので、全体としては南に排水される勾配となっている。幅は約1.4～1.45mで、断面形は皿状を呈する。

埋土はa-a'断面では3層に、b-b'断面では2層に分層される。いずれの土層もレンズ状堆積を示す。灰褐色土を主体とする埋土で、砂ブロックの包含に加え、鉄分の沈着、マンガンの凝集がみられる。最下層の埋土は両断面で土質が異なっており、東西方向の流路にあたるa-a'断面では砂質

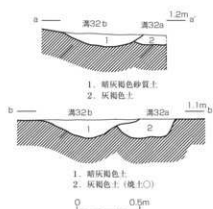


図92 溝32断面 (縮尺1/30)

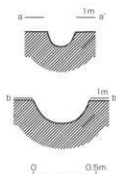


図93 溝33断面 (縮尺1/30)

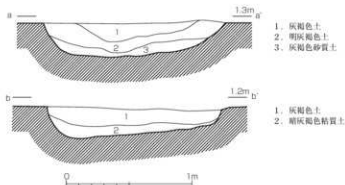
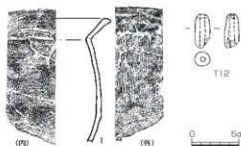


図94 溝34断面 (縮尺1/30)

土、南北方向の流路にあたる b-b' 断面では粘質土の堆積が観察されている。

遺物は土師質鍋、土鉢が出土している。出土遺物および切り合い関係から中世前半（13世紀前半頃）に属すると推測される。



遺物番号	器種	法量: cm・ \pm は1.6以下				特徴	胎土	色調: 内/外	
		口径	底径	器高	計測部残存度				
1	土師器 鍋	-	-	-	-	内: 壁ハケ、外: 上半部ハケと押圧・下半部ハケ・底付着多	微砂・細砂多	灰褐/黄褐(僅)	
遺物番号	器種	(残存)長: cm	(残存)幅: cm	(残存)厚: cm	重量: g	残存状況	特徴	胎土	色調
T12	土鉢	1.5	1.6	1.6	8.2	一部	直径0.5cmの穿孔、端面に長さ0.5cmの刻みH、押圧・ナデ	微砂・細砂	淡(黄)白

図95 溝34出土遺物 (縮尺1/4)

溝35 (図62・96、図版26)

A地点南半中央部、CT・CU39・40区に位置する。南北方向の溝で建物基礎の掘乱により分断されるが、調査区内で長さ約8mを検出した。北側は掘乱によって失われる。南側は溝34、36に切られて失われている。建物基礎の掘乱北側では1条、南側では切り合い関係にある2条の溝として認識し記録したが、平面的な位置関係、断面形、底面のレベルから新古の関係にある有機的な関係性の高い2条の溝と考え、ここでは古段階を溝35a、新段階を溝35bとして報告する。

検出層は<4層>で、検出上面の標高は1.02~1.22mで、底面高は0.92~0.98m、深さは0.05~0.3mである。比高は小さいが、南から北に下がる傾斜を有する。幅は1.7~1.88mで、断面形は皿状を呈する。

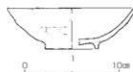
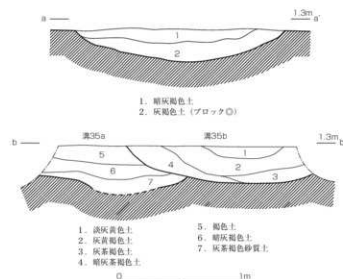
埋土は溝35aでは3層、溝35bでは2~4層に分層される。溝35aは褐色を基調とする土で構成され、全ての層にブロックの包含が認められる。溝35bは a-a' 断面では灰褐色土、b-b' 断面では上半が黄色を呈する土、

下半が灰茶褐色を呈する土となる。下半部の層でブロックの包含が顕著にみられる。

遺物は土師質土器碗が出土した。出土遺物から中世前半（13世紀前半）に属すると考えられる。

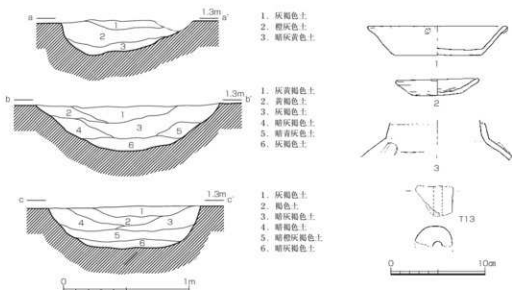
溝36 (図62・97、図版27)

A地点南半中央部、CU40・41、CV40区に位置する。東に位置する溝35を切る。CU40区に位置する屈曲点をさきみ、おおむね南北方向、東西方向に走行する溝である。西側は建



遺物番号	器種	法量: cm・ \pm は1.6以下				特徴	胎土	色調: 内/外
		口径	底径	器高	計測部残存度			
1	土師器 碗	1.36	0.6	4.4	1.0	内: ナデ、外: 押圧、磨滅、口径の残存率低いため口径値は不確定	微砂・糖	淡(黄)白

図96 溝35断面・出土遺物 (縮尺1/4・1/30)



遺物番号	器種	法量: cm・<平均値>・-は1.6以下				特徴	胎土	色調:内/外	
		口径	底径	器高	口縁部残存度				
1	土師器 杯	14.8	8.8	3.1	口一、底1/2	ナテ、底外: 鹿キリ、口外: 小粘土塊付着、磨滅	面砂・裡多	淡灰褐/褐灰	
2	土師器 皿	8.8	5.3	<1.7>	口1/3、底3/4	ナテ、底外: 鹿キリ、磨滅	面砂・細砂少	淡橙・淡橙白	
3	灰褐色器 四耳壺	-	-	-	1/5	ナテ、耳部: 破片中に2か所確認、胴部と唇部に泥塗	粗砂	灰/輪溝緑灰	
遺物番号	器種	残存長: cm	残存幅: cm	残存厚: cm	重量: g	残存状況	特徴	胎土/混入物	色調
T13	土師? 土	(3.2)	(3.9)	(2.2)	222	一部	直径1cmの穿孔、ナテ・押圧、頂上表面は割れ面	面砂/赤色粒多	橙/輪溝淡灰

図97 溝36断面・出土遺物 (縮尺1/4・1/30)

物基礎の攪乱により失われている。南側は調査区外へと延びる。調査区内では約20mを検出した。検出層は<4層>で、検出上面の標高は1.13~1.29m、底面高は0.89~1.01mで、深さは0.2~0.37mである。屈曲点の底面高がもっとも低くなる。幅は1.13~1.46mで、断面形はボウル状、碗状を呈する。

理土は3~6層に分層される。土色は灰色を基調とし、黄色、橙色や褐色がかかる部分がある。ブロックを包含する層は少ない。色調の類似する細分層をまとめると、基本的にはレンズ状の堆積構造が連続したものとみることができる。

遺物は土師質土器、土錘が出土した。切り合い関係から中世前半(13世紀前半頃)に属すると推測される。

溝37 (図62・98、図取28)

A地点南半西部、CS41~CV42区に位置する。南北方向を基調とするが、北端部では建物基礎の攪乱によって失われているため、確認された長さは短いものの、北北東方向へむかう屈曲が認められる。南側ではCV42区で南東方向へと屈曲し、西に位置する溝38を切り、調査区外へと延びる。調査区内では長さ約16mを検出した。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.96~1.13m、底面高は0.88~0.95mで、深さは0.14~0.2mである。北北西から南南東へ下がる傾斜を有する。幅は約0.4~0.6mで、断面形は碗状を呈する。

理土は2~3層に分層される。a-a'断面、b-b'断面とも上層は橙灰褐色土、下層は灰褐色砂質土で、いずれの層も鉄分の沈着が認められる。

遺物は中世土器小片が出土している。出土遺物および溝の走向方向から中世前半に属すると考えられる。

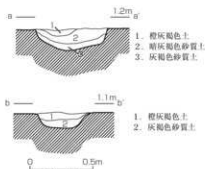


図98 溝37断面 (縮尺1/30)

溝38 (図61・62・99、図版28)

A地点西部、43ラインに沿う南北方向の溝である。A地点中央部では建物基礎の掘乱により断続的に検出された。両端は南北とも調査区外へと延びる。CV43区北東角から浅く、細く並行する長さ約3.5mの溝がある。断面では切り合い関係にあることが確認されており、西側の細い溝を溝38 a、東側の幅広い溝を溝38 bとする。調査区内では長さ約26mを検出した。検出層は<5層>で、検出上面の標高は0.92~1.12m、底面高は0.82~0.97mで、深さは0.07~0.22mである。北から南に下がる傾斜を有する。幅は約2.1~2.7m、断面形は皿状を呈する。

灰色土を基調とする埋土は溝38 aでは2層、溝38 bでは1層が確認される。溝38 aの埋土にはブロックの包含が認められる。

遺物は中世前半に属する土師質土器小片が出土している。出土遺物および溝の走行方向から中世前半に属すると考えられる。

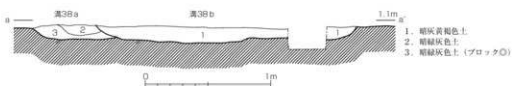


図99 溝38断面 (縮尺1/30)

溝39 (図61・100)

A地点北西部、CO~CQ43区に位置する。南北方向を基調とする溝である。北側は調査区外へ延び、南側は底面の標高を上げ取束する。調査区内では長さ約10mを検出した。検出層は<5層>で、検出上面の標高は1.04~1.09m、底面高は0.95~1.02mで、深さ0.05~0.11mである。南から北に下がる傾斜を有する。幅は約0.3~0.6mで、断面形は皿状を呈する。埋土は鉄分の沈着が認められる褐色土である。

遺物は混入品と判断される古墳時代初頭の土師器、須恵器の小片が出土している。溝の走行方向から中世前半に属すると推測される。

溝40 (図62・101)

A地点南西部、CS~CV43区に位置する。CT区で弱く蛇行するが、南北方向を基調とする溝である。北側は底面の標高を上げ取束する。南側は調査区外へと延びる。調査区内で長さ約14mを検出した。検出層は<5層>で、検出上面の標高は1.02~1.1m、底面高は0.9~1.0mで、深さは0.09~0.12mである。高低差は小さく、流下方向は特定できない。幅は0.4~0.56mで、断面形はボウル状を呈する。

埋土は鉄分の沈着が認められる褐色土である。

遺物は出土していない。溝の走行方向から中世前半に属すると推測される。

溝41 (図62・102、図版28)

A地点西側中央、CS43・44区に位置する。東西方向の溝である。東側は建物基礎掘乱で失われ、西側は調査区外へと延びる。調査区内で長さ約8mを検出した。検出層は<4層>で、検出上面の標高は1.25~1.29m、底面高は0.4~0.54mで、深さ0.7~0.81mである。西から東に下がる傾斜を有する。幅は1.44mで、断面形は逆台形、鉢状を呈する。

埋土は10層に分層される。土色・土質・包含物・堆積状況にもとづき、三群に大別する。一群は上半部に累積するレンズ状堆積層で、a-a'断面では1~3層、b-b'断面では1~4層が該当する。色調に明暗のある灰

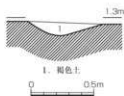


図100 溝39断面 (縮尺1/30)

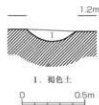


図101 溝40断面 (縮尺1/30)

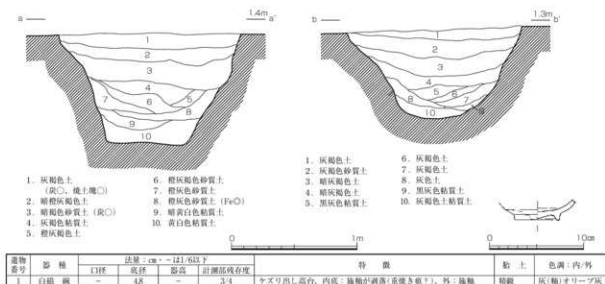


図102 溝41・出土遺物(縮尺1/4・1/30)

褐色土を基調とし、一部では砂質を帯びる。ブロックの包含がみられる。a-a'断面では焼土塊・炭の包含が確認された。二群は中央から下半部にかけてみられる法面に沿って流れ込んだ層と、その間を充填する粘質土層で構成される。a-a'断面では4~8層、b-b'断面では5~8層が該当する。三群は底面付近に堆積する粘質土で、地山を起源とする粘質土ブロックを含む。

遺物は青磁・白磁の小片が出土した。出土遺物から中世前半に属すると考えられる。

第5節 近世の遺構・遺物

1. 概要

近世の遺構として、土坑21基、段、畦畔を検出した。A地点北側中央の段およびC地点の東西方向の大畦畔は土地区画を明示する遺構であり、これらで画されたA地点東半部に畦畔が作られる。ほとんどの土坑は、A・B地点では段の西側にあたる39~41ライン間の範囲に南北に散在し、B・C地点では大畦畔が表示する東西の区画線に沿って配されている。なお、本調査区の北に位置する第9・11次調査地点では、35~38ライン間の範囲に南北溝とそれに沿った土坑群が配置されている。C地点の大畦畔を挟んだ南北では、土地を区画する南北区画線の位置が約18mずれていることになる。

2. 土坑

土坑16・17・18(図103・104、図版30)

C地点中央部、CN33・34区に位置する。土坑17・18の北側は調査区外へと延びており、全体の確認には至らなかった。また、土坑17の断面には中央部に幅約0.6~0.7mの擾乱があり、堆積情報が一部失われている。

3基は土坑18が土坑16・17を切って構築される切り合い関係にある。土坑16・17は、両者の規模や掘削位置から、切り合い関係にはないと想定される。検出面はいずれも<3層>である。土坑16は検出面の標高が1.09m、底面高が0.23mで、深さ0.86mである。土坑17は検出面の標高が1.02m、底面高は0.22mで、深さは0.8mである。土坑18は検出面の標高が1.06m、底面高が0.02mで、深さ1.04mである。

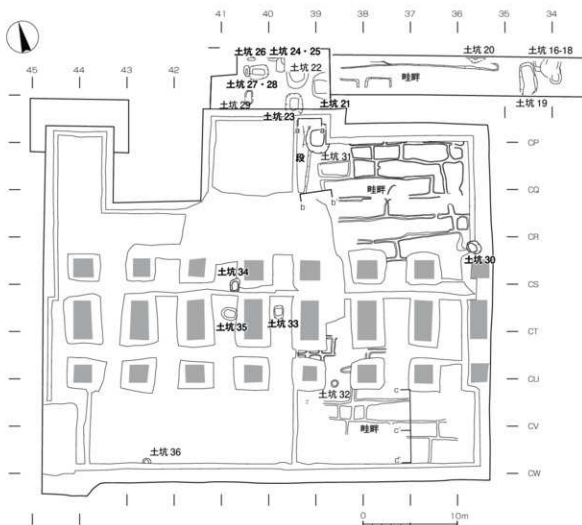


図103 近世の遺構全体図（縮尺1/400）

切り合いや、調査区外にかかる部分もあるが、平面形は土坑16・18がともに隅丸方形、土坑17が方形であると想定される。底面は、土坑16・18では上面と同じく隅丸方形を呈する。土坑17も検出できたラインが上面の形状に沿っており、方形となることが推測される。

規模は土坑16の上面では長軸方向1.15m以上、幅1.15m、土坑17は南北0.95m以上、東西0.85m以上、土坑18は長軸方向1.92m以上、幅2.26mである。底面は土坑16が長軸方向0.58m以上、幅0.73m、土坑17は南北0.86m以上、東西0.8m以上、土坑18が長軸方向1.6m以上、幅1.23mである。

断面形は土坑16、18ともに逆台形を基調とする。土坑17は箱状を呈すると想定される。土坑18では西側法面にやや傾斜を弱める面や小さな段が作出されることが観察されている。土坑17の西側法面にも凹凸がみられ、両者は直線的ではない法面形状をとる点で共通性を指摘できる。

埋土については、土坑17・18はa-a'断面で、土坑16はb-b'断面で説明する。

a-a'断面は調査区北土手にあたる。土坑17の埋土は7層に分層される。1層は暗青灰色土で、<2層>に近い色調を呈する。断面で観察された範囲は狭く、層厚も薄いことから、土坑埋没後の上面の窪み等に入った土層であろう。2層以下については、土質や包含物から、2～6層、7層に二分できる。2～6層は灰～灰褐色の色

調を基調とする粘質土である。2～5層でブロックの包含が多くみられること、各層の層理面に不連続面がみられないこと、各層の間に砂等の流入がみられないことから、比較的短期間に埋め戻されたことが考えられる。7層は暗褐色土で鉄分を含む。粘性を帯びない点で上位の層群との差異を有する。

土坑18の埋土は色調・土質・包含物に、層理面の特徴を加味して九群に大別する。一群は1層で、層理面が丸底状を呈しており、土坑埋没後の掘り込みと考えられる。二群は2・3層で、土坑18を最終的に埋めた灰色系の埋土である。粘性に差があるが、同様の性格を共有する埋土として考えたい。三群は4層で、層理面は、中央から東側法面にかけて丸底となる。1層と同じく堆積が進んだ段階で部分的な再掘削が行われたものとみられる。これより下位の埋土はすべて粘質土である。四群は5・6層で、層理面の形状から、三群と同様、土坑中央から西側法面にかけて再掘削が行われたものと考えられる。五群は7・8層で、7層はブロックを含んだ厚い堆積で、埋め戻したものとみられる。六群は9・10・11層で、やはり11層下面の層理面は丸底を呈している。9層ではブ

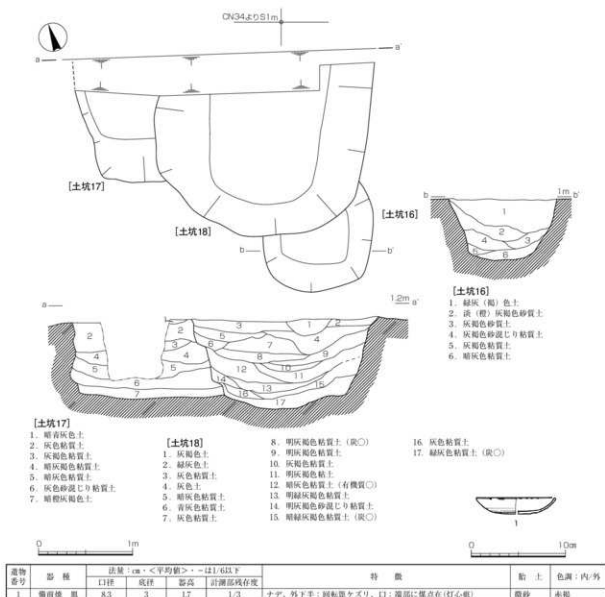


図104 土坑16～18・土坑16出土遺物(縮尺1/4・1/40)

ロックの包含が認められる。七群は12層で、黒灰色粘土ブロックを含んだ厚い堆積で、埋め戻し土とみられる。八群は13・14層で、明黄褐色粘土ブロックを含む。九群は15・16・17層で、粘性がやや強く、炭化粒を含む層群である。

土坑16 (b-b'断面)は6層に分層されるが、土質から三群に大別して説明する。一群は1層で、ブロックを多く含む緑灰褐色土である。層厚のあるブロック包含土であり、埋め戻し土と考えられる。二群は2・3層で、灰褐色砂質土を基調とする。鉄分の集積がみられる。三群は灰～灰褐色粘質土である。4層は砂や鉄分が混じるなど、二群との差異は漸移的である。

遺物は土坑16・18ではともに近世陶磁器片および瓦が出土した。土坑17では中世土器片が出土したが、本土坑の検出層から、混入と評価される。

これらの土坑の時期は、出土遺物および切り合い関係から、近世（江戸時代中期以降）に位置づけられる。

土坑19 (図103・105、図版30)

C地点中央部、CN34区に位置する。南側は側溝で失われているが、それを越えた調査区南辺に設定した土層観察用土手で幅を減じた断面が確認されており、この土手内で取東するとみられる。また、北側は道構の確認を目的とする先行トレンチによって埋土の一部を除去したが、その過程で掘り方を確認することとなった。<3層>で検出した。検出面の標高は1.26m、底面高は0.24mで、深さは1.02mである。

平面形は上面、底面ともに長楕円形を呈する。規模は上面で長軸長3.45m以上、短軸長1.82m、底面で長軸長3.02m以上、短軸長1.24mをはか

る。断面形については情報が欠ける部分もあるが、長軸方向は皿状、短軸方向は椀状を呈すると推測される。

埋土は17層に分層される。包含物、堆積状況から三群に大別する。一群は1～3層で、土坑中央から南半にかけてレンズ状に堆積する灰色系の粘質土である。炭化物、ブロックの包含が顕著である。二群は各層が塊状の単位をなすことを大別の指標とした。4～16層が該当する。本群においても炭化物、ブロックの包含が顕著な層が認められる。三群は17層で、有機質を含む暗灰色粘土である。一・二群はブロックを多く包含すること、二群は層の形状自体に塊状を呈するものが多くみられることから、人為的な埋め戻し土であると考えられる。

遺物は近世陶磁器片、瓦片が

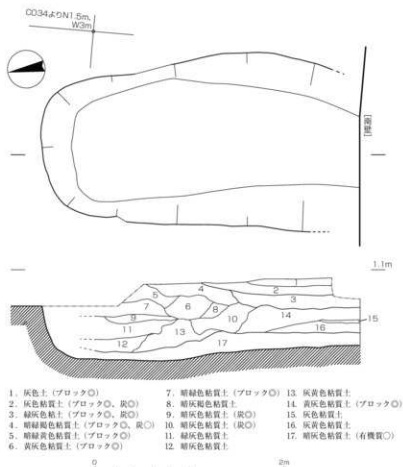


図105 土坑19 (縮尺1/40)

出土している。

本土坑の時期は、検出層と出土遺物から近世に位置づけられる。

土坑20 (図103・106、図版30)

C地点中央西寄り、CN35区に位置する。南半部を検出したが、北側溝に重複する位置にあり、大半を側溝底面で確認することとなった。北半は断面観察用土手から調査区外に延びるとみられる。<3層>で検出した。検出面の標高は0.85m、底面高は0.17mで、深さは0.68mである。

平面形については、上面は検出できた南半部の形状から、楕円形を呈すると推定される。底面は検出できた範囲では半円形を呈しており、円形に復元される。規模は上面で長軸長1.87m、短軸長0.53m以上、底面で長軸長0.41m、短軸長0.17m以上をはかる。断面形は椀状を呈する。

埋土は灰色土の単層である。部分的に色調の明暗があるが、土質は大差なく、顕著な包含物はない。遺物は中世土器細片、土錘片、木製品が出土している。中世土器片は埋土に混入したものと位置づける。

本土坑の時期は、検出層から近世に位置づけられる。

土坑21 (図103・107、図版29・31)

B地点東側、CN・CO38・39区に位置する。西半部を検出した。東半部については、東側溝部分は失われているが、土層観察用土手へと延びている。一方、C地点内では対応する掘り方は確認されなかった。両地点を画する矢板列(幅約0.5~0.6m)のなかで取束するものとみられる。<3層>で検出した。検出面の標高は1.17m、底面高は0.29mで、深さは0.88mである。

平面形については、上面は検出できた西半部の北辺が弧状となるが、西辺および南辺は直線的なラインとなっている。方形を呈する底面の形状をあわせて考えれば、上面の平面形は隅丸方形を基調としたものと復元される。規模は、上面で長軸長2.79m、短軸長1.36m以上、底面で長軸長1.44m、短軸長1.11m以上をはかる。断面形は、南側では二段掘り、北側では逆台形を呈する。

埋土は9層に分層され、四群に大別する。一群は1層で、ブロックや炭化粒の包含が多く認められる灰褐色土である。二群埋土を掘りこむ層理面の形状から、二群堆積後、北辺にボウル状の掘り方をもつ掘削がなされたものとみられ

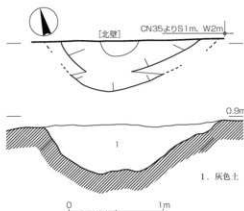


図106 土坑20 (縮尺1/40)

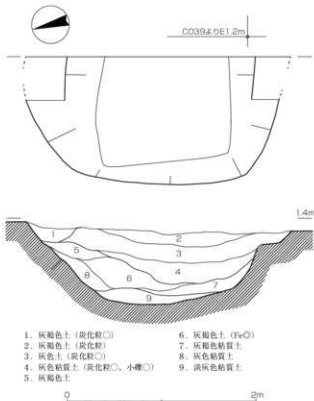


図107 土坑21 (縮尺1/40)

る。二群はレンズ状に堆積する2~4層が該当する。灰~灰褐色土で構成される。いずれも鉄分の沈着が顕著で、炭化粒を多く含む埋土である。他にもブロックや小礫の包含が認められている。二群底面の層理面も三群埋土を掘りこむ形状となっている。三群は5~8層が該当する。灰~灰褐色土で、5・6層には鉄分の沈着が顕著である。四群は9層で、ブロック状に固結した鉄を含む淡灰色粘質土である。堆積状況から、本土坑の使用時には埋没と再掘削を繰り返したことがうかがわれる。遺物は近世陶磁器片、瓦片、箸状の木製品が出土しているが、いずれも固化にはいたらぬ。

本土坑の時期は、検出層と出土遺物から近世に位置づけられる。

土坑22 (図103・108、図版29・31)

B地点東半、CN39区に位置する。南半部を検出した。北半部は後世の攪乱によって失われている。<3層>で検出した。検出面の標高は1.25m、底面高は0.26mで、深さは0.99mである。

残存部の形状から復元される平面形は、上面が楕円形、底面が長方形である。規模は、上面で長軸長約1.7m以上、短軸長1.53m、底面で長さ0.67m以上、幅0.61mである。断面形は椀状を呈する。

埋土は7層に分層される。1層は鉄分の沈着が顕著な灰褐色土である。2層との層理面の形状をみると、2層堆積後に再掘削された掘り方の埋土と位置づけられる。2層は炭化粒を多く含む灰~灰褐色土である。3層は鉄分の沈着がもっとも顕著に認められ、ブロックを包含する灰褐色土である。1~3層は土色・土質は近似するが、包含物や鉄分の沈着の差がある。これは堆積の経緯や堆積環境の違いを反映しているものと考えられる。4層は有機質、炭化粒を含む灰色粘質土である。5層は層厚約5cmの白・灰色粗砂である。6層は淡灰黄色粘土、7層は暗灰褐色粘土で、いずれも粘性が強い。5層は粘質埋土間に薄くレンズ状に堆積した自然流入土と考えられ、本土坑では4層以下に堆積した、有機物を含む粘質の埋土が土坑使用時の機能を反映していると考えられる。遺物は固化した陶磁器のほか、瓦片が出土している。

本土坑の時期は、検出層と出土遺物から近世に位置づけられる。

土坑23 (図103・109、図版29・31)

A地点北辺中央、B地点東半南側にまたがって検出された。CN・CO39区に位置する。A地点側では南端を側溝で失っているが、土層観察用土手内で確認することができた。B地点側でも調査区南辺に沿って設定した側溝によって失われている部分があるが、側溝北側および調査区南辺に沿う土層観察用土手内で平面的に検出することができた。<3層>で検出した。検出面の標高は1.27m、底面高は0.4mで、深さは0.87mである。

南端部を失うものの、平面形は上面で隅丸方形、底面で長方形を呈する。規模は、上面で長さ2.21m、幅1.8m、底面で長さ1.24m、幅0.89mである。断面形は椀状~逆台形を呈する。

埋土は6層に分層される。土色・土質により三群に大別する。一群は青灰色系の土で構成される。鉱物の集積や包含物は認められない。二群は灰~灰褐色粘質土で、粗砂が筋状に薄く堆積する部分も認められる。

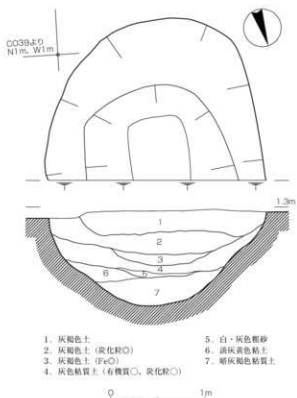


図108 土坑22 (縮尺1/40)

三群は6層で、粘性の強い灰色粘土である。包含物はほとんどない。遺物は近世陶磁器片、瓦片が出土した。

本土坑は、検出層と出土遺物から近世に位置づけられる。

土坑24・25 (図103・110)

B地点中央北側、CN39区に位置する。北・東側は擾乱や側溝で失われている。土坑24が土坑25を切っている。土坑24は約1/4が残存しているとみられる。一方、土坑25は北側溝と土坑24により失われており、遺存状態は悪い。＜3層＞で検出した。

土坑24は検出面の標高が1.28m、底面高は0.25mで、深さは1.03mである。土坑25は検出面の標高が1.04m、底面高は0.49mで、深さは0.55mである。

土坑24は、平面形については、残存部の形状から、上面で隅丸方形、底面で長楕円形を呈すると推定される。規模は長さ1.47m以上、幅0.87m以上、底面は長軸長0.66m以上、短軸長0.33m以上である。断面形は楕状を呈する。土坑25は遺存状況が悪いため、平面形は残存部からの推定となるが、南西部で屈曲の強いカーブが認められるため、隅丸方形であると考えられる。底面は遺存部が寡少で、平面形を推定できない。規模は上面で長さ0.99m以上、幅0.31m以上となる。断面形は楕状を呈する。

埋土は、土坑24では土質や包含物の粗密により3層に分層される。1層は暗灰褐色土で、ブロック・炭化粒を多く含む。わずかに小礫を含み、薄く筋状に堆積した砂もみられる。2層は灰褐色土で、包含物が少ない。3層は暗灰色粘質土で、下方に淡黒灰褐色粘質土ブロックが含まれる。

土坑25ではレンズ状に堆積する埋土は2層に分層される。1層は暗灰色土、2層は炭化物を含む淡黒灰色粘質土である。いずれもブロック等の包含物を含まない。

遺物は土坑24からは中世土器小片が出土しているが、検出面は近世層の上面であり、混入品と判断される。土坑25からは遺物は出土していない。

両土坑の時期は、検出層から近世に位置づけられる。

土坑26 (図103・111)

B地点西半北側、CN40区に位置する。北側を側溝で失っている。＜3層＞で検出した。検出面の標高は0.99m、底面高は0.6mで、深さは0.39mである。

遺存状況が悪く、残存部から平面形を推定すると、南西部に屈曲の強いカーブが認められるため、隅丸方形の可能性はある。底

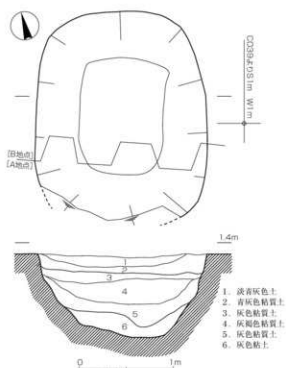


図109 土坑23 (縮尺1/40)

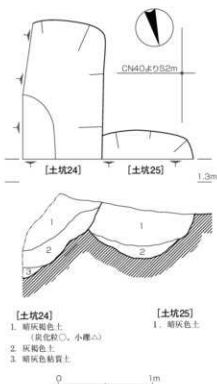


図110 土坑24・25 (縮尺1/40)

面は遺存部が寡少で、平面形を推定できない。規模は上面で長さ0.86m以上、幅0.38m以上である。断面形については、東側の法面はオーバーハングしている一方、西側は底面まで緩い傾斜の法面となっており、不整形なものとなっている。

埋土は2層に分層される。いずれも灰褐色系の色調を呈するが、2層は炭化粒を含み、粘性を帯びる。遺物は出土していない。

本土坑の時期は、検出層から近世に位置づけられる。

土坑27・28 (図103・112、図版29・31)

B地点西半、CN40区に位置する。土坑28が土坑27を切っている。西側に側溝が通っているため、土坑27の西端、土坑28の西辺2/3は失われている。また、土坑28北辺および土坑27の上部は、東西方向にのびる溝状の攪乱によって削平されている。<3層>で検出した。検出面の標高は、土坑27が1.13m、土坑28が1.27mである。底面高は、土坑27が0.43m、土坑28が0.38mで、深さは土坑27が0.7m、土坑28が0.89mである。

平面形は、土坑27では上面、底面ともに楕円形、土坑28では上面、底面

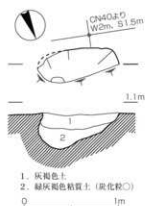
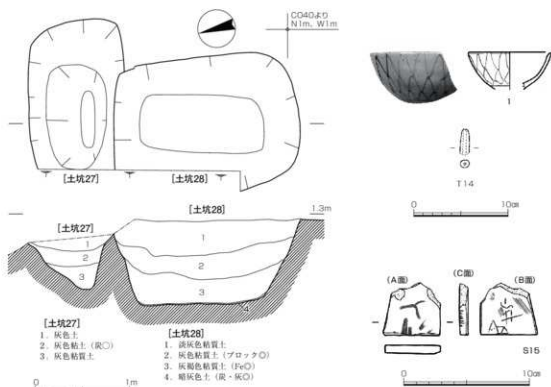


図111 土坑26 (縮尺1/40)



遺物番号	器種	法量: cm <平均値> - ±1.6以下				特徴	胎土	色調・内/外		
		口径	底径	器高	計測部残存度					
1	陶器 碗	8.8	-	-	1/3	施釉、染付、肥後系?	精製	灰白(輪)透明		
遺物番号	器種	(残存)長: cm	(残存)幅: cm	(残存)厚: cm	重量: g	残存状況	特徴	胎土	色調	
T14	土練 (27)	1	0.8	0.8	2.3	一部	直径0.3cmの穿孔、磨滅		微砂	明橙
遺物番号	器種	(残存)長: cm	(残存)最大幅: cm	(残存)最大厚: cm	重量: g	残存状況	石材	特徴		
S15	風石?	(4)	4.5	0.7	196	一部	炭酸岩	A面: 凹面・すり面?、墨面, B面: 凸面・縦筋山・舟?面, C面: 磨切り痕		

図112 土坑27・28・出土遺物 (縮尺1/3・1/4・1/40)

ともに隅丸方形を呈する。規模は、土坑27では上面が長軸長1.59m以上、短軸長0.9m以上、底面が長軸長0.59m、短軸長0.15mをはかる。土坑28では上面が長さ1.97m以上、幅1.45m、底面が長さ1.32m、幅0.61mをはかる。断面形は土坑27がすり鉢状、土坑28が逆台形を呈する。

埋土について、土坑27は3層、土坑28は4層に分層される。土坑27では、埋土の色調はいずれも灰色を呈するが、粘性と包含物を指標に細分した。土坑28は、最下層に炭・灰層で形成される4層が薄く堆積し、上位を1～3層が充填する。1～3層の土質は粘質土、色調は灰～灰褐色が基調となっており、濃淡が認められる。遺物は土坑27から中世土器細片、土鍬が、土坑28から中世土器細片、土鍬、近世陶磁器片、瓦片が出土している。検出層は近世に属するものであるため、土坑27から出土した遺物は混入したものと判断される。

土坑27・28の時期は、検出層および土坑28出土遺物から近世に位置づけられる。

土坑29 (図103・113、図版29・32)

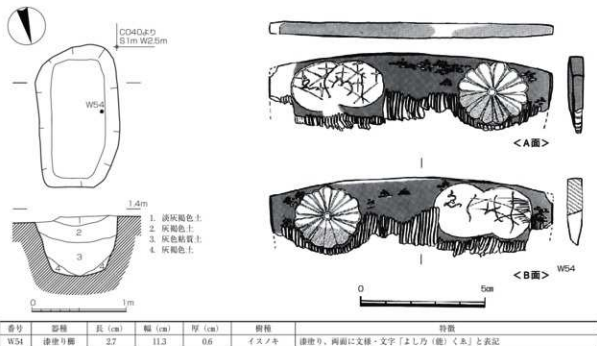
B地点西半南側、CN・CO40区に位置する。土坑の中央部に東西に通る南側溝のため、この部分は約40cmの幅で失われている。<3層>で検出した。検出面の標高は1.32m、底面高は0.68mで、深さ0.64mである。

平面形は、上面、底面ともに隅丸方形を呈する。規模は上面で長さ1.5m、幅0.86m、底面で長さ1.25m、幅0.55mをはかる。断面形は箱形を呈する。埋土は4層に分層した。1・2層は灰褐色土で、2層にはマンガンの凝集がみられる。3層は灰色粘質土、4層は灰褐色土で、いずれも鉄分が沈着する。底面縁辺部において、斜辺が内湾する三角形断面の4層や、中央部が窪み断面形をなす1～3層は土坑周囲からの流入土の堆積と考えられる。遺物は4層で漆塗り櫛³⁾が出土したほか、近世陶磁器片、瓦片が出土している。

本土坑の時期は、検出層および出土遺物から近世に位置づけられる。

註) 漆塗り櫛については、既に下記文獻において報告し、あわせて自然科学的分析を要約しているが、その内容は本書第4章に掲載している分析報告に基づいている。

高田浩司2003「近世の櫛について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2001』, pp.13-15



番号	部種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	素材	特徴
WS4	漆塗り櫛	27	11.3	0.6	イスノキ	漆塗り、両面に文様・文字「よし乃(能)く来」と表記

図113 土坑29・出土遺物 (縮尺1/4・1/40)

土坑30 (図103・114、図版32)

A地点東辺北半、CR35区に位置する。土坑の中央部を南北に東側溝が通るため、幅約50～60cmが失われている。<3層>で検出した。検出面の標高は1.19m、底面高は0.27mで、深さ0.92mである。

平面形は上面が楕円形、底面は楕円形を志向しているとみられるが、南～東にかけて歪みのある不整な形状となっている。規模は上面が長軸長1.62m、短軸長1.33m、底面が長軸長1.11m、短軸長0.83mをはかる。断面形については、攪乱により失われている北側法面ラインで小さな屈曲があり、対する南側法面にも段があるので、二段掘りと考えられる。

埋土は7層に分層される。埋土の色調、包含物等を指標に三群に大別する。一群は1・2層が該当する。灰色系の色調を呈する土で、ブロック・灰を包含する。二群は橙灰色系の色調を呈する埋土で、3～5層が該当する。灰色粘質土ブロックを包含する。三群は橙色砂質土で、6・7層が該当し、鉱物・包含物により細分される。6層は鉄分の沈着が顕著、7層は多量のブロックを包含する。遺物は因化には至らない近世陶磁器片が出土している。

本土坑の時期は、検出層および出土遺物から近世に位置づけられる。

土坑31 (図103・115・116、図版32)

A地点北半中央、CO・CP38・39区に位置する。東辺北側は南北方向の側溝で失われている。<3層>で検出した。検出面の標高は1.14m、底面高は-0.03mで、深さは1.17mである。

平面形は上面で楕円形、底面で隅丸方形を呈する。規模は上面で長軸長3.15m、短軸長2.13m以上、底面で長さ1.71m、幅1.43mをはかる。断面形は逆台形を呈する。

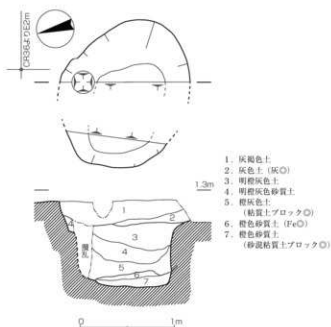


図114 土坑30 (縮尺1/40)

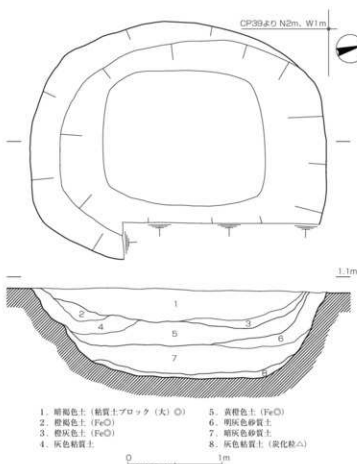
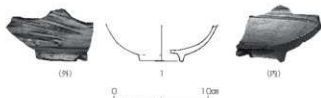


図115 土坑31 (縮尺1/40)

埋土は8層に分層される。土質、包含物を指標に四群に大別する。一群は1層が該当する。暗褐色土で、径10cm以上の灰色粘質土ブロックを多く包含する特徴を有する。層厚約0.35mと厚いこととあわせ、人為的な埋め戻し土であると考えられる。二群は2～5層が該当する。橙色を基調とする色調の埋土で、2・3・5層では鉄分の沈着が顕著、4・5層ではブロックの包含が認められる。二群底面の層界面は三群を掘りこむものであり、再掘削された段階の底面である。三群は6・7層が該当する。いずれも灰色砂質土で、色調の明暗と7層上面に鉄分の沈着が顕著なことで分離可能である。四群は底面に薄く堆積した灰色粘質土である8層が該当する。遺物は近世陶磁器が出土している。

本土坑の時期は、検出層および出土遺物から近世に位置づけられる。



遺物番号	器種	法量: cm < 平均値 > ~ ±1.6以下				特徴	胎土	色調: 内/外
		口径	底径	器高	計測部残存枚			
1	陶器 碗	-	6.6	-	1/4	淡黄白色に帯びた色の文様、唇付部のみ無釉、密着?	微砂、均質	明暗(輪)淡黄白・薄灰

図116 土坑31出土遺物 (縮尺1/4)

土坑32 (図103・117、図版32)

A地点南半中央、CU38区に位置する。<4層>中で検出した。検出面の標高は0.89m、底面高は0.29mで、深さは0.6mである。

平面形は、上面では楕円形、底面では円形を呈する。規模は上面で長軸長0.83m、短軸長0.75m、底面で直径0.53mをはかる。断面形は、東側法面下半部が直立するもの、全体としては逆台形に含めておきたい。

埋土は4層に分層される。1層は白色土ブロックを包含する暗灰褐色土、2層は黄褐色細砂ブロックを包含する灰色砂質土である。土坑上半の埋土を構成する両層はブロックの包含という点が共通する。3層は灰褐色粘質土で、層中に砂が混在する。4層は灰色砂質土で、砂粒は粗い。1・2層はブロックを含み、層厚約0.2m前後の厚さを有しており、人為的な埋め戻し土と考えられる。遺物は中世土器小片が出土している。

本土坑の時期について、中世土器小片の出土から、中世に遡る可能性も考えられる。一方、38～40ライン間に南北に配置される近世土坑群の配置原理に合致しているとみれば近世にも位置づけ得る。また、中世に位置づけられる他の土坑が<5層>検出であるのに対し、本土坑は<4層>中での検出であり、層位的にはこれよりも新しい遺構である。以上から、本報告では本土坑の時期を近世に属するものと推定しておきたい。

土坑33 (図103・118、図版39)

A地点中央、CS39区に位置する。近・現代の造成土である<1層>直下で検出した。検出面の標高は1.19mで、<3層>～<4層>にあたる高さに至る攪乱等により上部を失っていると考えられる。底面高は0.55m、深さは0.64mである。

平面形は上面で隅丸方形、底面で方形を呈する。規模は上面で長さ1.39m、幅1.02m、底面で、長さ0.78m、幅0.74mをはかる。断面形は逆台形を呈する。埋土は2層に分層される。1層は灰褐色土で、鉄分の沈着と暗褐色土ブロック、炭化粒の包含が認められる。2層は灰色粘質土で、鉄分の沈着が認められる。下方には粗砂が筋状

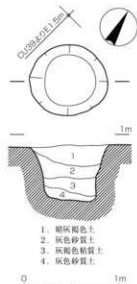


図117 土坑32 (縮尺1/40)

に堆積する。

遺物は図化した銅器1点が出土している。椀状の形状、外面に刻まれた蓮や鳥の絵柄などから、仏具と考えられる。底部に内面から貫通させた穿孔がある。

本土坑は、近世土坑群との位置関係および検出標高から近世に属するものと考えられる。

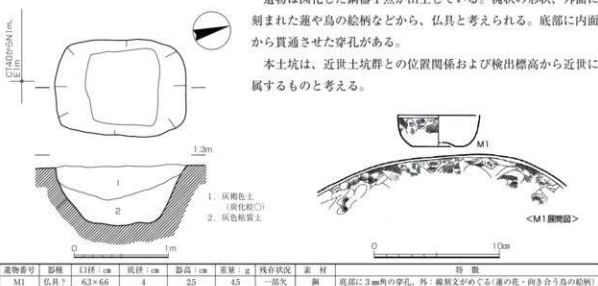


図118 土坑33・出土遺物 (縮尺1/4・1/40)

土坑34 (図103・119、図版33)

A地点中央、CR・CS40区に位置する。建物基礎の攪乱や側溝等により南端、北辺東半、上部を失っている。造成土および攪乱土を除去した段階で検出した。検出面の標高は1.15mで、<3層>~<4層>にあたる高さである。底面高は0.8m、深さは0.35mである。

平面形は上面、底面ともに隅丸方形を呈する。規模は上面で長さ1.3m以上、幅0.97m、底面で長さ0.91m以上、幅0.65mをはかる。断面形は、底面に小さな凹凸がみられるものの、大局的には椀状~逆台形を呈するとみる。

埋土は4層に分層される。1~3層は灰色系の色調を基調とする土で、鉄分の沈着が顕著であり、褐色土ブロックが多く含まれる。4層は細~粗砂粒の混じる灰褐色砂質土の薄い堆積層である。1層はレンズ状に堆積している。2・3層はブロック状に入る堆積で、人為的な埋め戻し土と考えられる。4層は底面の小さな凹凸を埋めるように堆積した砂質土であり、初期の流入土と考えられる。

遺物は近世に属する灯明皿が出土した。本土坑は、近世土坑群との位置関係および出土遺物から近世に属するものと考えられる。

土坑35 (図103・120、図版33)

A地点中央、CS40区に位置する。東端を建物基礎の攪乱によって破壊される。検出層は<3層>で、検出面の標高は1.3m、底面高は0.64mで、深さは0.66mである。

平面形は上面、下面ともに楕円形を呈する。規模は上面で長軸長1.41m以上、短軸長1.31m、下面で長軸長1.11m、短軸長0.77mをはかる。断面形は椀状を呈する。

埋土は5層に分層される。1~4層は灰~灰黄褐色の色調を基調とする土や粘質土であり、いずれも径5~10

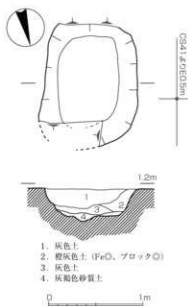


図119 土坑34 (縮尺1/40)

cm程度ブロックを多く包含している。5層は暗黄褐色粘質土で、包含物は認められない。各層の堆積状況については、1～4層は中央部が丸く窪む断面形状をなすほぼ均等な厚さの層が連続的に、5層は底面南側直上に薄く堆積している。遺物は近世陶磁器片が出土している。

本土坑の時期は、出土遺物から近世に位置づけられる。

土坑36 (図103・121、図版33)

A地点西側南辺寄り、CV42区に位置する。南側は南側溝によって失われている。後世の攪乱によって<3層>までが失われており、造成土および攪乱土の下面に接していた<4層>で検出した。検出面の標高は1.23m、底面高は0.92mで、深さ0.31mである。

平面形は上面で楕円形、底面で円形を呈する。規模は、上面で長軸長0.88m、短軸長0.55m以上、底面で直径0.46mをはかる。断面形は碗状を呈する。

埋土は4層に分層される。堆積状況から、1層、2～4層の二群に大別する。1層は炭化粒、ブロックを含む暗褐色土で、層界面は2～3層を切っており、2層堆積後に再掘削された掘り方の埋土である。2～4層はほぼ均等な層厚の褐色土で、包含物や土質によって分層される。3・4層ではブロックの包含がみられる。遺物は中世土器小片が出土している。

本土坑の時期について、本土坑と重複する位置にあり、中世前半に位置づけられる溝37の検出標高が約1.0mであること、本土坑の検出面はそれよりも約0.2m高く、これは<4a>層中のレベルに相当することから、攪乱で包含層が失われていなければ本来は<3層>に帰属する遺構と考え、近世に位置づける。

3. 段・畦畔 (図103・122、図版29)

A地点中央北側、CP・CQ39区で、南北方向の段を確認した。段の南は大きく攪乱されているため失われているが、現状で長さ約8mが残存している。<3層>を除去する過程で検出した。<4層>を削りだして成形した段である。

上面の標高はa-a'断面で1.2m、b-b'断面で1.21m、下端の標高はa-a'断面で1.04m、b-b'断面で0.98mである。段の高さはa-a'断面で0.17m、b-b'断面で0.15mをはかる。法面の幅は約0.3～0.5mである。下端から小区画の畦畔までの東側の空間は、約1.5～2mの幅をもつ緩やかな斜面となっている。

畦畔はA・C地点、CN～CV35～38区、CT38区で検出した。A地点では、調査区東辺に南北方向に高さ0.1m前後の高まりがあり、畦畔は先述の段と高まりに挟まれた範囲に作られている。C地点では35ライン以西に、東西方向で幅約1.0～1.2m、高さ約0.1mをはかる幅広の大畦畔が作られる。A地点東辺の高まりの延長線上に近接する位置にはC地点の大畦畔の東端があたっており、本地点における近世の耕作地は、北を大畦畔、西を段、東を高

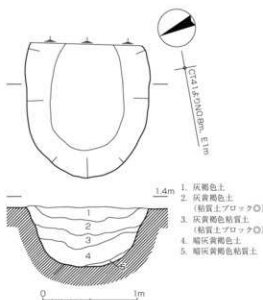


図120 土坑35 (縮尺1/40)

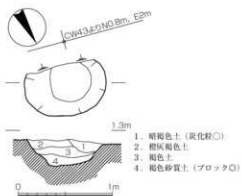


図121 土坑36 (縮尺1/40)

まりで囲まれた南北40m以上、東西20m弱の空間に配されていることとなる。

この大区画を画す畦畔は、東西方向に直線的な畦を幅約1.2~2.1m、平均的には幅約1.8mの間隔で配しているとみられ、東西方向を長軸とする短冊状の区画を作っている。さらにその内部を南北方向に区画する畦は東西方向の畦を挟んでずれていたり、相対する畦が作られていないなど、東西方向の畦よりは規範が緩いようであり、小区画の形状、面積が不揃いな要因となっていると考えられる。小区画の畦畔は、c-c'-c'断面では上端標高1.02~1.07m、下端標高0.94~0.97m、幅は上端0.33m、下端0.59mで、断面形は台形である。

本地点では床土上面の傾斜は小さいので、小区画の畦畔を作る理由は配水以外に求められる。これらの畦畔が耕作土や床土を掘り起こし、表層と深層を反転させて積み上げた「天地返し」の土で構築されていたという調査時の所見があることを参考にすれば、苗代として一時的に耕土を盛って作られた畦畔が崩れずに埋没したものと考えることも一案であろう。

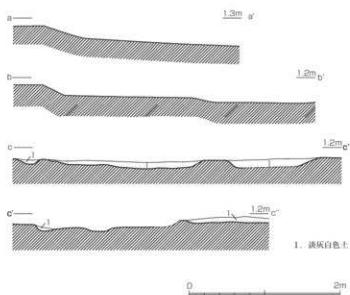


図122 畦畔・段断面 (縮尺1/50)

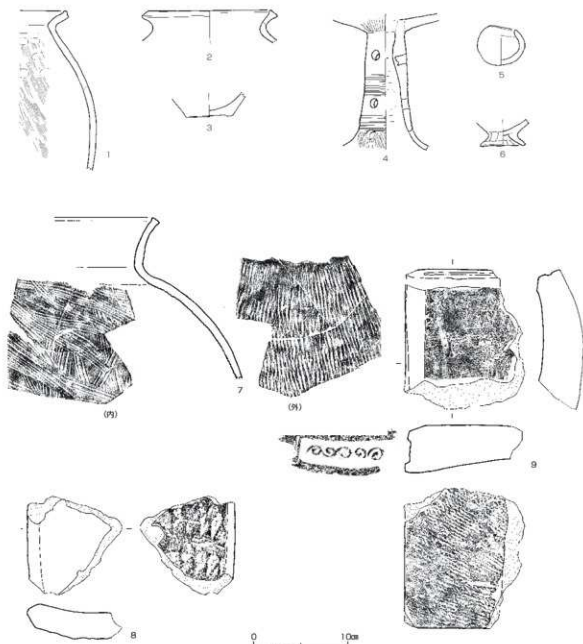
第6節 包含層ほかの出土遺物

包含層や細溝、土手などからコンテナ22箱の遺物が出土している。そのうち、土層の時期を示すものや、注目される遺物、土製品・金属器を掲載する(図123・124、図版38・39)。

図123-1は弥生時代中期中頃の甕である。河道底面付近から出土した。2~4は河道上層から出土した弥生後期の土器である。河道の時期や埋没に要した期間を推測するうえで有用な資料である。また、4は後期を四分した鹿田遺跡の編年では鹿田・後・1期にあたる²⁾。鹿田遺跡ではこの時期の遺構は未確認で、居住の中断期にあたっていると考えられているが、今後、この時期の遺構が周辺で確認される可能性をうかがわせるものでもある。5・6は<4層>から出土した手捏土器、製塩土器脚台部である。

7は<4層>から出土した須恵器甕である。軟質で、外面には縦位の粗い平行タキ、内面には縦位・斜位のハケメを施す。8・9は古代の瓦である。8は<4b層>から出土した平瓦で、凸面に縄目タキをのこす。9はA地点西側溝から出土した軒平瓦で凸面に縄目、凹面に布目をのこす。瓦当には唐草文が配される。これらはいずれも被熱痕跡が認められ、特に9では破面に煤が付着しており、二次的に被熱していることが明瞭である。9は古代のうちでも平安時代に位置づけられる。本調査地点で検出したピットの一部に、この時期に遡る建物を構成する柱穴が含まれている可能性を示すものである。

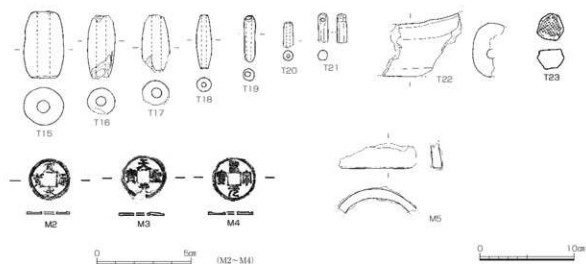
図124には土製品・金属器をまとめた。T15~21は土錘である。T15は管状土錘で、重量が117gの大型品である。T16~18は端部が狭く、中央部が最大径となる紡錘状の形態である。T19・20は細い管状土錘である。T21は



遺物番号	出土位置	器種	法量: cm <平均値> - は1.63以下				特徴	胎土	色調: 内/外
			口径	底径	器高	計測部残存現			
1	河邊	弥生土器 甕	-	-	-	-	内: ハケメ・押圧, 外: ハケメ・椀, 口: 横ナ字	磁砂, 均質	灰褐~黒褐
2	河邊	弥生土器 甕	13	-	-	1/5	磨滅・割落顯著, 外: 椀, 1と同一個体小	炭~磁砂, 摩多	橙褐
3	河邊	弥生土器 甕	-	<4.95>	-	或1/1	磨滅, 内: 筒ヶヌリ痕, 外: 焼熱・劣化, 2と同一個体小	磁砂・摩多	淡橙・明~暗橙
4	河邊	弥生土器 高杯	-	-	-	-	割: 唇部(口)の法, 器高・口の法(器口)は2.7倍, 器土身の法は4.5倍	磁砂・粗砂	淡橙~黄橙/橙
5	<5割>	土師器 手捏土器	2.5	2.5	37~42	1/1	ナ字, 磨滅, 底部は丸み強い	磁砂多	淡橙~淡橙白
6	<5割>	土師器 甕土器	-	4.7	-	或1/2	磨滅, 脚部: 押圧, 全体に焼熱で変色	粗砂・摩多	淡橙灰~橙
7	<4割>	須恵器 甕	-	-	-	-	口: ナ字, 内: ハケメ, 外: 縦段の平行タテキ	磁砂	灰褐~黒褐

遺物番号	出土位置	器種	(残存)			重量: g	残存状況	特徴	胎土/混入物	色調
			長: cm	幅: cm	厚: cm					
8	<4割>	須恵器 瓦	(10.5)	(10)	3	-	一部	西面: ナ字, 凸面: 格子目(タテキ?)・二次的焼熱痕	磁砂	西面: 淡橙, 凸面: 灰
9	割落	須恵器 瓦	(12.7)	(14.8)	4.9	-	一部	西面: 糸目肌, 凸面: 縄目, 瓦背: 滑草状, 二次的焼熱(僅)	磁砂	灰白, 僅で黒色化

図123 包含層出土遺物(1)



遺物番号	出土位置	器種	(残存)長:cm	(残存)幅:cm	(残存)厚:cm	重量:g	残存状況	特徴	粘土混入物	色調
T15	<3層>	土錐	7	4.2	4	117.4	1/1	ナデ、直径1.2cmに穿孔、黒鉄	黄～黒砂	淡茶白～淡灰白
T16	<4層>	土錐	6.8	2.9	3	48.2	一部欠	直径1cmの穿孔、ナデ、黒鉄	黒砂	暗褐
T17	<3層>	土錐	6.1	3.9	2.6	36.5	一部	直径1cmの穿孔、ナデ	黒砂・赤色粒	淡黄橙
T18	<5層>	土錐	5.7	1.5	1.6	12.9	一部欠	直径0.5cmの穿孔、ナデ	黒砂	本橙～暗橙
T19	<3層>	土錐	4.9	1.2	1.1	6.5	1/1	直径0.5～0.6cmの穿孔(先縮り)、ナデ	黒砂	淡灰白
T20	<5層>	土錐 (2/7)	1	1	2.8	—	一部	直径0.4cmの穿孔、ナデ	黒砂	淡黄橙
T21	<4層>	土錐 (3/1)	1	1.1	4.1	—	一部	直径約0.4cmの穿孔、ナデ	黒砂	暗褐
T22	銅鏃	鏃?	(8.4)	5.6	(3.5)	—	一部	直径約1cmの穿孔、押圧とナデ、両面は灰色化	黒砂/赤多・赤色粒	橙
T23	<4層>	銅貨質 玉	2.8	2.8	2.1	10.2	1/1	一面に布目痕存、周囲打ち欠き後表面調整、瓦の転用	黒砂	灰

遺物番号	出土層位	器種	(残存)長:cm	(残存)最大幅:cm	(残存)最大厚:cm	重量:g	残存状況	素材	特徴
M2	<3層>	銅銭	2.2	2.3	0.1	1.3	1/1	銅	寛永通寶
M3	<3層>	銅銭	2.4	2.5	0.1	1.9	一部欠	銅	天元聖寶
M4	<4層>	銅銭	2.4	2.4	0.2	1.7	1/1	銅	聖宋元寶
M5	<4層>	不明鉄製品	(8.2)	(2.8)	1	28.4	一部	鉄	円筒状、断片が顕著

図124 包含層出土遺物(2)

端部に穿孔した土錐である。T22は押圧とナデによって整形、芯に直径約1cmの穿孔がある遺物で、鏃の可能性がある。T23は一面に布目痕をのこし、周囲を打ち欠いて成形したもので、瓦が転用されている。M2～4は銅銭である。寛永通寶1枚のほか、宋銭では、M3が天聖元寶(北宋:1023年)、M4が聖宋元寶(北宋:1101年)で各1枚が出土した。M5は円筒状に復元される用途不明の鉄製品である。(野崎)

註 山本悦世1988「鹿田遺跡の弥生～古墳時代初頭の土器」『鹿田遺跡1』、pp.385-395

第4章 自然科学的分析

第1節 樹種鑑定・漆膜分析・顔料分析

財元興寺文化財研究所

鹿田遺跡で出土した漆塗り櫛（図113-W54）について以下の分析を行ったので報告する。

1. 分析資料および分析内容

・漆塗り櫛…樹種鑑定・膜面分析・顔料分析

2. 使用機器

・生物顕微鏡（御オリンパス BX50） ・金属顕微鏡（御オリンパス製BH2-UMA）
 ・エネルギー分散型蛍光X線分析装置（XRF）（セイコーインスツルメンツ株式会社SEA5230）

資料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。ナトリウムより重い元素が検出可能である。（モリブデン管球使用、管電圧45kV・50kV、大気圧条件下）

3. 方法および結果

1) 樹種鑑定

①**方法** 主に破断面から、メスを用いて微量の木質を採取し、試料とした。カミソリの刃で鑑定に必要な木口面（横断面）、柀目面（放射断面）、板目面（接線断面）の3方向の切片を作製し、生物顕微鏡で観察した後、写真撮影を行った。

②**結果** イスノキ：広葉樹散孔材。道管径は55 μ m以下で多数分布している。柔組織は規則的に接線状・帯状に配列している。放射組織の幅は1～2列で異性I・II型であり、着色した内容を多く含んでいる（図125）。

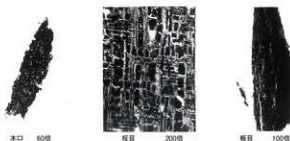


図125 木材組織

2) 膜面分析と顔料分析

①**方法** 漆塗り櫛は黒色部分、花模様赤色部分、金線を有する部分（図126、①、②、③）から、ごく微量の塗膜を採取し樹脂包埋後、膜断面が平滑になり光が透過するまで研磨を行った。スライドガラス上に固定して永久プレパラートを作製し、金属顕微鏡（暗視野）と生物顕微鏡で観察した後、写真撮影を行った。つぎに、漆に混入した顔料を調べるため、漆塗り櫛の黒色部分、花模様赤色部分、金線を有する部分（図126、①、②、③、④）をXRFで元素分析を行い顔料を特定した。

②**結果** 膜面観察の結果と顔料分析の結果を表6に表した。

a. **黒色部分** XRFで、主に鉄（Fe）が検出された（図127）。しかし膜が剥がれた部分でも鉄が検出され、鉄で漆をくろめた可能性は低い。塗り構造は炭粉下地の上に約40 μ mの褐色系の透明な漆層が観察された（図126）。

b. **花模様赤色部分** XRFで、主に鉄・水銀（Hg）、ヒ素（As）が検出された（図128）。塗り構造は炭粉下地の上に厚さが一様でない40 μ m以下の褐色系の透明な漆層の上に石黄（As₂S₃）で花模様を描き、10 μ m以下の朱漆

を花模様の下に塗ったものと考えられた。ただし、膜断面からは石黄は確認できなかった(図126-b)。

c. 金線に囲まれた紋様部分 XRFで、金線部分からは、主に鉄・金(Au)、ヒ素が検出された(図129)。

金線の周りの赤味がかった模様部分からは、主に鉄が検出された(図130)。塗り構造は、約40 μ m以下の褐色系の透明な漆層の上に10 μ m以下の薄いベンガラ漆を塗り金蒔絵したものと考えられた(図126-c)。ただし、ヒ素に関しては、石黄として金と共に用いられていたのか否かは不明であった。

表6 塗膜断面および顔料分析の結果

分析資料	下地	塗膜構造	使用顔料
漆塗り櫛	炭粉	黒色部分(40 μ m以下の褐色系漆層)	なし
		花模様赤色部分(40 μ m以下の褐色系漆層、10 μ m以下の朱漆層) *石黄は朱漆層の下にあると思われる。	水銀朱 石黄
		金線を有する部分(40 μ m以下の褐色系漆層、10 μ m以下のベンガラ漆層、一部金泥)	金、(石黄?)
		金線の周りの赤味がかった模様部分(40 μ m以下の褐色系漆層、10 μ m以下のベンガラ漆層)	ベンガラ

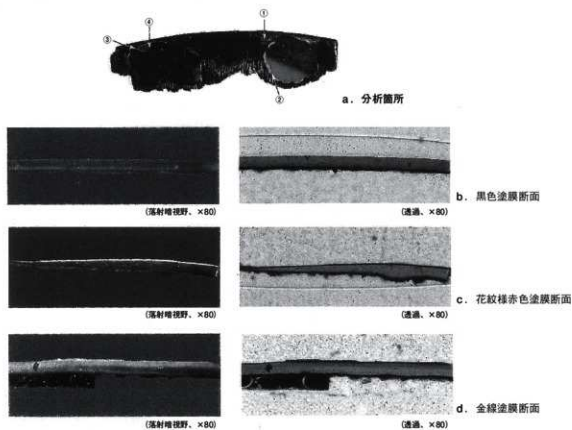


図126 漆塗り櫛塗膜断面

【測定条件】

測定装置	SEA5200
測定時間 (秒)	300
有効時間 (秒)	212
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	24
コメント	2001-1210岡山大学 農田第12次遺跡 No.3 漆塗り櫛 黒色部

【試料像】



視野
[X, Y] 6.25, 4.67 (mm)

【スペクトル】

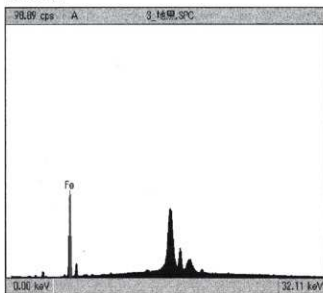


図127 漆塗り櫛 黒色部分のXRFスペクトル

【測定条件】

測定装置	SEA5200
測定時間 (秒)	180
有効時間 (秒)	126
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.8mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	28
コメント	2001-1210岡山大学 農田第12次遺跡 No.3 漆塗り櫛 花紋様赤色部

【試料像】



視野
[X, Y] 6.25, 4.67 (mm)

【スペクトル】

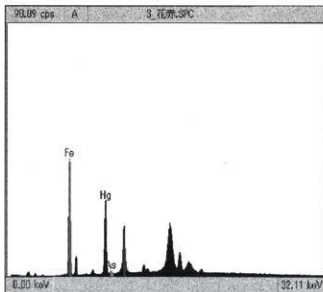


図128 漆塗り櫛 花紋様赤色部分のXRFスペクトル

【測定条件】

測定装置	SEA520
測定時間 (秒)	180
有線時間 (秒)	175
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ0.1mm
励起電圧 (kV)	50
管電流 (μA)	1000
コメント	2001-1210岡山大学 奥田第12次遺跡 No.3 漆塗り櫛 金色部

【試料像】



視野
[X, Y] 625, 467 (nm)

【スペクトル】

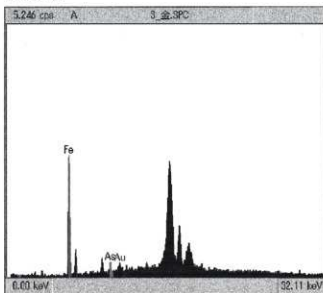


図129 漆塗り櫛 金線部分のXRFスペクトル

【測定条件】

測定装置	SEA520
測定時間 (秒)	180
有線時間 (秒)	128
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ1.5mm
励起電圧 (kV)	45
管電流 (μA)	28
コメント	2001-1210岡山大学 奥田第12次遺跡 No.3 漆塗り櫛 紋様黑色部

【試料像】



視野
[X, Y] 625, 467 (nm)

【スペクトル】

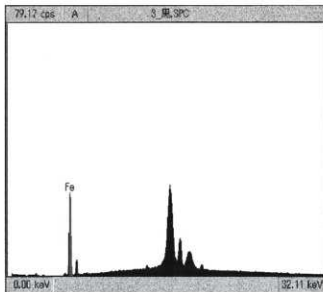


図130 漆塗り櫛 金線周囲の赤味がかった紋様部分のXRFスペクトル

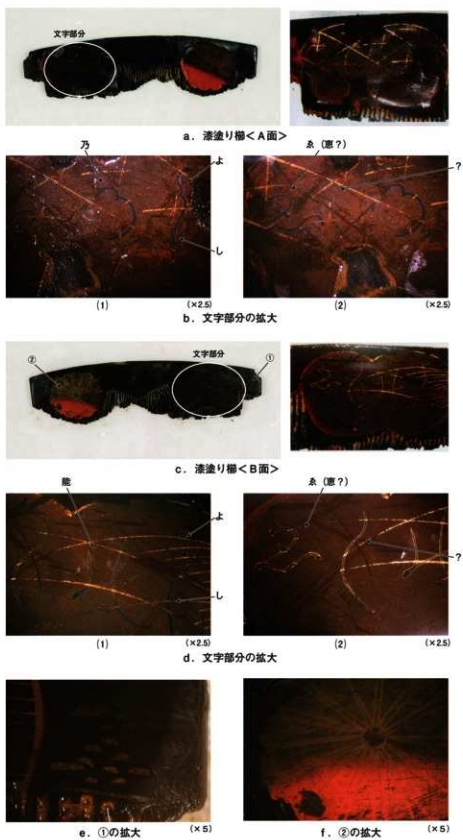


図131 漆塗り櫛の文字

第5章 第12・27次調査成果のまとめ

本章では、本調査地点における各時期の主要な成果をまとめ、周辺調査地点との関係を確認する。周辺調査地点では既に、弥生時代後期～古墳時代初期の耕作地、中世の土地区画について考察されている⁴¹⁾ので、それらを参照しながら、本調査地点の成果がもつ意義や課題についても考えたい。

弥生時代中期～古墳時代初期 (図132) 弥生時代中期には、調査区北西から東辺の北半にかけての範囲に河道が通っていた。この河道は弥生時代中～後期の間に急速に埋没し、地形環境は大きく変化する。河道埋没後の低位部では、弥生時代後期後半～古墳時代初期になると盛んに溝が掘削され、高まりが形成された。こうした高まりは、本調査区の北に位置する第9・11・14次調査地点では畦畔によって画された耕作地内に点在しており、耕作地にとまうものとしてされている。また、弥生時代後期後半には耕作地を貫くように長さ約150m弱にもおよぶ北東-南西方向の溝が掘削されている。やや深めの椀状の掘り方を有する溝で、浅い皿状の掘り方を呈する他の溝とは異なり、灌漑水路としての役割をになったことも想定される。

本調査地点まで確認された耕作にとまう遺構の広がり、本調査地点南半の土層と河道の範囲を勘案すると、本調査地点の高まりが耕作地の南端にあっていると考えられる。この耕作地は、北は第25次調査地点まで広がっており、これまでの調査で確認された範囲は、少なくとも南北約100～110m、東西約140～150m、面積は約1.4～1.5ha以上となる。

古代 鹿田地区における飛鳥時代の遺構の確認は、これまで竪穴住居2棟等（第1・2次調査）、ほぼ完形の遺物が出土した溝1条（第23次調査）、わずかな水田畦畔（第9次調査）と少なく、断片的な情報しか得られていなかった。本調査地点では耕作痕とN40°～45°Eに主軸方向を揃える溝群とを確認することとなり、この時代の資料を新たに得ることができた。

中世前半 (図133) 本調査地点南西部には、溝によって区画された範囲に、掘立柱建物、多数の柱穴、木枠を内包する井戸などの遺構が密に分布しており、屋敷地にあたと評価される。南・西側の区画が未検出のため、

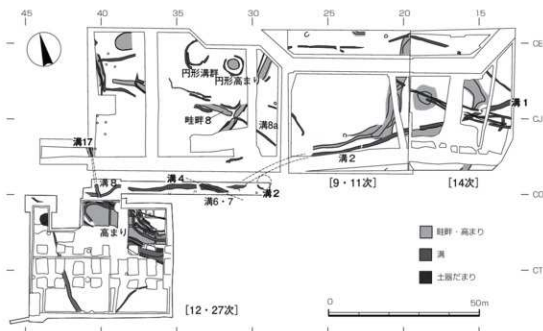


図132 鹿田地区南部における弥生時代後期～古墳時代初期の遺構 (縮尺1/1250)

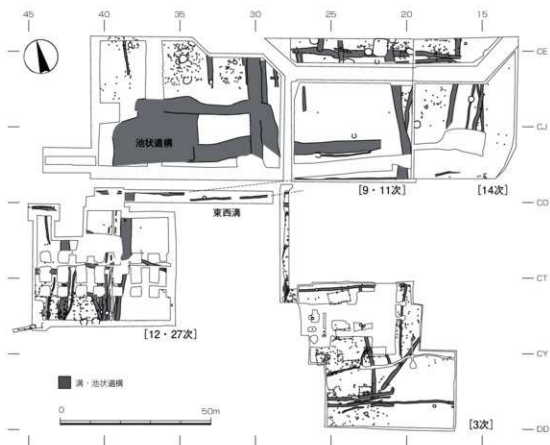


図133 鹿田地区南部における古代末～中世前半の遺構（縮尺1/1250）

屋敷地の規模は不明である。北半部では、C地点の2条の東西溝が第3・9・11調査地点で検出されている溝に接続するとみられる。その場合、この2条の溝を側溝とする長さ100m以上の道により、ほぼCOラインに沿う東西方向の区画が表示されていたと考えられる。

本調査地点の屋敷地の配置と土地区画、隣接調査区で確認された土地区画との関係については、集落の景観を復元するうえで留意される事項が確認された。一つは、本調査地点の屋敷地が、COラインに沿う東西区画線とは境を接せず、遺構密度の低い、空閑地ともいえる空間を挟んでいることである。攪乱の規模を差し引いても屋敷地と空閑地の遺構密度の差は大きい。もう一つは、東西区画線の北側では20・30ライン付近（第9・11次調査地点）、南側では38・39ライン付近（本調査地点）に主要な南北溝群が位置しており、南北区画線が東西区画線を挟んで正対していないことである。

出土遺物では、方形縦板組井戸枠に使用されていた板材の一部に建物の梁材を転用したことを示す切り欠きが認められた。切り欠きの形状から、この梁材は折置組のものと考えられる。上層構造が折置組の場合、梁をのせる側柱は梁の両端で正対する位置にあることになる。今後の調査研究に還元される情報であり、鹿田遺跡では柱穴群から掘立柱建物を抽出・認定する際、折置組の上層構造を念頭において検討が求められる。（野崎）

註 山本悦世2017「鹿田遺跡における弥生時代～古墳時代初期の水田関連遺構」pp.227-230、山本悦世・岩崎志保2017「鹿田遺跡南東部における中世集落の土地区画とその構造」pp.231-239、いずれも『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第32冊所収

遺構一覽表

【建物】

遺構名	区	検出標高(m)	規模(m)	方向	柱穴間の距離(m)	備考
榎立柱建物1	CU3, CV43・44	1.04~1.22	4.0×3.9m	E16.5°S	1.9~2.0m	2×2間 榎柱建物

【柱穴列】

遺構名	区	検出標高(m)	規模(m)	方向	柱穴間の距離(m)	備考
柱穴列1	CO43・44	0.99~1.18	8.35 (P7~P12)	E14.5°S	2	柱穴6基で構成
柱穴列2	CW44・45	1.06~1.12	7 (P13~P16)	E13°S	2.0~2.8	柱穴6基で構成

【井戸】

遺構名	区	検出層	検出標高(m)		深さ(m)	上面(残存値)		底面(残存値)		断面形状
			上面	下面		形状	規模(m)	形状	規模(m)	
井戸1	CR40	<5層下面>	0.92	-0.2	1.12	方形/円形	1.2	隅丸方形	0.74×0.61	U字形
井戸2	CV39	<4層>	1.11	-0.85	1.96	楕円形	1.53×(1.37)	楕円形	0.5×0.44	Y字形
井戸3	CV・CW40	<4a層>	1.27	-1.18	2.45	楕円形	2.72×2.62	隅丸方形	1.04×0.96	Y字形
井戸4	CV・CW41	<4層>	1.23	-1.08	2.31	円形	2.34×(1.98)	方形	0.9~1.0	Y字形
井戸5	CW44	<4層>	1.24	-1.03	2.27	円形	2.06×(1.82)	隅丸方形	1.32×(0.9)	Y字形

【土坑】

遺構名	区	検出層	検出標高(m)		深さ(m)	上面(残存値)		底面(残存値)		断面形状
			上面	下面		形状	規模(m)	形状	規模(m)	
土坑1	CN29	<7層>	0.42	0.16	0.26	円形	0.6	円形	0.3	十字鉢状
土坑2	CN30	<7層>	0.46	0.32	0.14	円形	(0.7)	円形	(0.4)	籠状?
土坑3	CN32	<7層>	0.47	0.34	0.13	円形	0.55	円形	0.23	籠状
土坑4	CN33	<7層>	0.5	0.2	0.3	楕円形?	(0.85)	楕円形	(0.35)×0.28	二段
土坑5	CN35	<7層>	0.47	0.27	0.2	隅丸方形	0.72	隅丸長方形	(0.45)×0.31	籠状
土坑6	CP26	<7層>	0.39	0.06	0.33	楕円形	0.72×0.54	楕円形	0.277×0.23	差台形
土坑7	CP40	<7層>	0.52	0.12	0.4	楕円形	(0.99)×0.84	楕円形	(0.52)×(0.48)	差台形か?
土坑8	CP40	<7層>	0.6	0.08	0.52	隅丸方形	0.88×0.77	不整形円形	0.48×0.46	差台形
土坑9	CT38	<8層>	0.83	0.04	0.79	円形?	1.0	楕円形	0.44×0.33	Y字形
土坑10	CT40・41	<8層>	0.85	0.18	0.67	円形	1.63	円形?	1.1	差台形
土坑11	CQ43	<5層下面>	0.99	0.35	0.64	不整形円形	1.32	円形?	0.41	二段?
土坑12	CT44	<8層>	0.97	0.69	0.28	楕円形	1.19×(0.91)	楕円形	0.53×0.3	籠状
土坑13	CU35	<5層>	1.02	0.49	0.53	円形	0.96	円形	0.44	籠状
土坑14	CV40	<5層>	1.08	0.03	1.05	不整形円形	(1.08)×(1.0)	楕円形	0.25×0.2	二段・箱形
土坑15	CN33	<5層>	0.79	0.18	0.61	楕円形	1.25×1.11	楕円形?	(0.32)×0.52	二段・差台形
土坑16	CN33・34	<3層>	1.09	0.23	0.86	隅丸方形	(1.15)×1.15	隅丸方形	(0.58)×0.73	差台形
土坑17	CN34	<3層>	1.02	0.22	0.8	方形	(0.95)×(0.85)	方形	(0.86)×(0.8)	箱形
土坑18	CN33・34	<3層>	1.06	0.02	1.04	隅丸方形	(1.92)×2.26	隅丸方形	(1.6)×1.23	差台形
土坑19	CN31	<3層>	1.26	0.24	1.02	長楕円形	(3.45)×1.82	長楕円形	(3.02)×1.24	皿状・籠状
土坑20	CN35	<3層>	0.85	0.17	0.68	楕円形?	1.87×(0.53)	円形	0.41×(0.17)	籠状
土坑21	CN・CO38・39	<3層>	1.17	0.29	0.88	隅丸方形	2.79×(1.36)	方形	1.44×(1.11)	二段・差台形
土坑22	CN39	<3層>	1.25	0.26	0.99	楕円形	(1.7)×1.53	長方形	0.67×0.61	籠状
土坑23	CN・CO39	<3層>	1.27	0.4	0.87	隅丸方形	2.21×1.8	長方形	1.24×0.89	籠状・差台形
土坑24	CN39	<3層>	1.28	0.25	1.03	隅丸方形	(1.47)×(0.87)	長楕円形	(0.66)×(0.33)	籠状
土坑25	CN39	<3層>	1.04	0.49	0.55	隅丸方形?	(0.99)×(0.31)	-	-	籠状
土坑26	CN40	<3層>	0.99	0.6	0.39	隅丸方形?	(0.86)×(0.38)	-	-	不整形
土坑27	CN40	<3層>	1.13	0.43	0.7	楕円形	(1.59)×(0.9)	楕円形	0.59×0.15	十字鉢状
土坑28	CN40	<3層>	1.27	0.38	0.89	隅丸方形	(1.97)×1.45	隅丸方形	1.32×0.61	差台形
土坑29	CN・CO40	<3層>	1.32	0.68	0.64	隅丸方形	1.5×0.86	隅丸方形	1.25×0.55	箱形
土坑30	CR35	<3層>	1.19	0.27	0.92	楕円形	1.62×1.23	不整形	1.11×0.83	二段
土坑31	CO・CP38・39	<3層>	1.14	-0.03	1.17	楕円形	3.15×(2.13)	隅丸方形	1.71×1.43	差台形
土坑32	CU38	<4層>	0.89	0.29	0.6	楕円形	0.83×0.75	円形	0.53	差台形
土坑33	CS39	<1層>高于	1.19	0.55	0.64	隅丸方形	1.39×1.02	方形	0.78×0.5	差台形
土坑34	CR・CS40	<3~4層>	1.15	0.8	0.35	隅丸方形	(1.3)×0.97	隅丸方形	(0.91)×0.65	籠状・差台形
土坑35	CS40	<3層>	1.3	0.64	0.66	楕円形	(1.41)×1.31	方形	1.11×0.77	籠状
土坑36	CV42	<4層>	1.23	0.92	0.31	楕円形	0.88×(0.55)	円形	0.46	籠状

遺構一覧表

【溝】

遺構名	横の長さ	上面高	底面高	深さ	断面形状	幅	区	高低の向き
溝1 < 5層 >	0.55-0.84	0.28-0.59	0.06-0.48	0.06-0.48	階段-階段	0.60-1.83	CT37-38, CU38-39, CV39-40	SW→SE
溝2 < 7層 >	0.7-0.73	0.55-0.58	0.13-0.18	0.13-0.18	階段	0.24-0.25	CU37-38, CV38-39	NW→SE
溝3 < 7層 >	0.46-0.49	0.4-0.44	0.06	0.06	階段	0.4	CN29	NW→SE
溝4 < 7層 >	0.4-0.69	0.24-0.55	0.14-0.26	0.14-0.26	階段	0.63-1.73	CM9-31-38-41, CO9-41, CP-CQ40-41	E→W
溝5 < 5層下層 >	0.2-1.1	-0.26-0.34	0.37-1.36	0.37-1.36	二段	3.21	CP40-41-43-44, CQ37-38, CR33-37	NW→SE
溝6 < 6層 >	0.6-0.65	0.26-0.33	0.23-0.34	0.23-0.34	ボウ状	0.98	CN31-33	SE→NW
溝7 < 6層 >	0.6	0.23-0.25	0.25-0.27	0.25-0.27	二段	0.68-1.03	CX31-33	SE→NW
溝8 < 7層 >	0.36-0.61	0.24-0.34	0.04-0.31	0.04-0.31	階段	0.65-1.65	CM40, CO39-41, CP37, CQ36-37	N→S(北傾部), SE→NW
溝9 < 7層 >	0.41-0.45	0.39-0.41	0.02-0.05	0.02-0.05	階段	0.29	CP35-37	NW→SE
溝10 < 7層 >	0.39-0.42	0.3-0.31	0.06-0.16	0.06-0.16	階段-階段	0.26-0.53	CP36-37	N→S, NW→SE
溝11 < 7層 >	0.34-0.43	0.31-0.35	0.04-0.11	0.04-0.11	階段-階段	0.29-0.49	CQ35-36, CP36-37	N→S
溝12 < 7層 >	0.34-0.44	0.18-0.34	0.1-0.16	0.1-0.16	階段	0.5-0.7	CQ36, CP37	SE→NW
溝13 < 7層 >	0.32-0.47	0.18-0.26	0.08-0.29	0.08-0.29	階段-ボウ状	0.35-0.7	CP-CQ37	SE→NW
溝14 < 7層 >	0.3-0.47	0.2-0.29	0.08-0.22	0.08-0.22	階段	0.36	CP37-38, CQ36-37, CO39	S→NW, SE→N
溝15 < 6層 >	0.66-0.94	0.51-0.62	0.11-0.34	0.11-0.34	階段	1.05-1.8	CO9-41, CP37-38-41, CQ35-38, CR35-37	NW→SE
溝16 < 7層 >	0.22-0.72	0.1-0.24	0.1-0.55	0.1-0.55	Y字状	1.2-1.35	CQ-CR43, CR-CV42, CU-CV41	S→N
溝17 < 7層 >	0.74	0.53	0.21	0.21	階段	0.31	CO41-44	NW→SE
溝18 < 5層上面 >	1.02-1.08	0.82-0.92	0.16-0.21	0.16-0.21	ボウ状	0.59	CQ44, CR43-44	NW→SE
溝19 < 5層 >	0.93-1.17	0.56-0.78	0.16-0.48	0.16-0.48	階段-逆台形	0.68	CR38, CT-CU39, CU-CV40	NNE→SSW
溝20 < 5層 >	0.91-1.17	0.66-0.89	0.17-0.36	0.17-0.36	階段-逆台形	0.53-0.63	CS-CU39, CU-CV40	NNE→SSW
溝21 < 5層 >	0.99-1.05	0.88-0.99	0.23	0.23	ボウ状	0.4	CU-CV41	NE→SW
溝22 < 5層 >	0.9-1.07	0.71-0.78	0.26-0.3	0.26-0.3	逆台形-ボウ状	0.53-0.69	CT40-41, CU41, CV41-42	NNE→SSW
溝23 < 5層 >	0.97-1.19	0.64-0.99	0.16-0.37	0.16-0.37	階段	0.75-1.13	CR-CU40, CT-CU41	NNE→SSW
溝24 < 5層 >	1.01-1.12	0.7-0.84	0.17-0.38	0.17-0.38	階段-逆台形	0.41-0.52	CR40, CS40-41, CT-CU41, CU42	NNE→SSW
溝25 < 5層 >	0.78	0.57	0.21	0.21	ボウ状	0.69	CP-CQ36	SW→SE
溝26 < 5層 >	0.79	0.72	0.06	0.06	階段	0.61	CP35, CP-CQ36	NW→SE
溝27 < 5層 >	0.9-1.2	0.32-0.81	0.28-0.55	0.28-0.55	逆台形	1.38	CO43-44, CS35-37, CR37	NW→SE
溝28 < 5層 >	0.78-1.35	-0.12-0.5	0.39-0.9	0.39-0.9	段-逆台形-ボウ状	1.02-3.62	CN-CX38, CT-CV38-39	S→N
溝29 < 5層 >	0.56-1.05	0.45-0.66	0.09-0.39	0.09-0.39	階段	1.09	CN34-38	E→W
溝30 < 5層 >	0.81	0.51-0.6	0.2-0.3	0.2-0.3	階段-階段	0.47	CN29-34	E→W
溝31 < 5層 >	0.82-1.0	0.43-0.8	0.12-0.45	0.12-0.45	逆台形	0.79	CN38-CV29	N→S
溝32 < 5層 >	0.6-1.11	0.82-1.0	0.08-0.19	0.08-0.19	階段	0.65-0.81	CO-CV29	S→S
溝33 < 5層 >	0.89-1.02	0.65-0.96	0.06-0.11	0.06-0.11	階段	0.25-0.45	CR39	S→S
溝34 < 4層 >	1.04-1.28	0.8-1.04	0.07-0.34	0.07-0.34	階段	1.29-1.44	CS-CV39-41	N→S, W→E
溝35 < 4層 >	1.02-1.22	0.92-0.98	0.05-0.3	0.05-0.3	階段	1.7-1.88	CT39-40, CU40	S→N
溝36 < 4層 >	1.13-1.29	0.89-1.01	0.2-0.37	0.2-0.37	ボウ状-階段	1.13-1.46	CU-CV40-41	S→N/W→E
溝37 < 5層 >	0.96-1.13	0.88-0.95	0.14-0.2	0.14-0.2	階段	0.42-0.58	CS-CU41-42, CU-CV42	NNE→SSW
溝38 < 5層 >	0.92-1.12	0.82-0.97	0.07-0.22	0.07-0.22	階段	2.1-2.7	CS-CV42-43	NNE→SSW
溝39 < 5層 >	1.04-1.09	0.96-1.02	0.05-0.11	0.05-0.11	階段	0.31-0.57	CO-CQ43	S→N
溝40 < 5層 >	1.02-1.11	0.9-1.0	0.09-0.12	0.09-0.12	ボウ状	0.4-0.56	CS-CV43	N→S
溝41 < 4層 >	1.25-1.29	0.4-0.34	0.7-0.81	0.7-0.81	逆台形-階段	1.44	CM43-44	W→E

【凡例】 → 上流方向
 - 下流方向(南)

【小溝群】

遺構名	上面高	底面高	深さ	断面形状	幅	長さ
A	0.7-0.727	0.62-0.65	0.08	階段	0.3-0.5	9.6
B	0.73-0.75	0.67-0.70	0.06-0.08	階段	0.4-0.5	7.1
C	0.73-0.76	0.69-0.70	0.04-0.06	階段	0.45	3.2
D	0.76-0.77	0.74-0.76	0.01-0.02	階段	0.2-0.3	5.1
E	0.75	0.707	0.043	階段	0.2	0.8
a	0.69-0.72	0.63-0.65	0.04-0.08	階段	0.35	2.3
b	0.65-0.75	0.57-0.72	0.02-0.08	階段	0.45	3.9
c	0.7	0.649	0.05	階段	0.5	1.5
d	0.66	0.525	0.14	階段	0.5	1.5
e	0.72	0.71-0.72	0.01	階段	0.25	1.2
f	0.66	0.65	0.01	階段	0.4	0.4
g	0.76	0.72	0.04	階段	0.3	0.6
h	0.75	0.72	0.03	階段	0.2	0.8
i	0.74-0.78	0.68-0.75	0.02-0.04	階段	0.2	2.1
j	0.74-0.75	0.65-0.67	0.08-0.09	階段	0.45	1.2
k	0.8-0.87	0.79-0.82	0.02-0.05	階段	0.3	1.25
l	0.79-0.87	0.76-0.84	0.04	階段	0.35	2.9
m	0.77-0.78	0.72-0.76	0.02-0.05	階段	0.33	3
n	0.88-0.9	0.81-0.82	0.07-0.09	階段	0.33	0.8
o	0.82-0.85	0.79-0.83	0.02-0.03	階段	0.25	2.5
p	0.79-0.81	0.76-0.77	0.01-0.05	階段	0.2	1.6

【土器だまり】

遺構名	区	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	検出標高(m)	底面高(m)	備考
土器だまり1	CP-CQ43, CP44	4.05	2.9	0.21	1.03	0.82	土器分布域：南北27m、東西22m

報告書抄録

ふりがな	しかたいせき							
書名	鹿田遺跡15-第12・27次調査-							
副書名	エネルギーセンター新営・自家発電装置新設							
巻次								
シリーズ名	岡山大学構内遺跡発掘調査報告							
シリーズ番号	第37冊							
編著者名	野崎貴博(編著)、岩崎志保							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700-8530 岡山県岡山市北区津高中3丁目1番1号 TEL 086-251-7290							
発行年月日	2021年3月26日							
ふりがな	ふりがな	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村		(世界測地系)	(世界測地系)			
しかたいせき 鹿田遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 きたくしゅうまち 北区鹿田町2 ちよらねほんごう 丁目5番1号	33201	県2208	34°38' 57~58"	133°55' 9~12"	12次: 20001002~ 20010510 27次: 20171010~ 1110	12次: 1897㎡ 27次: 34.5㎡	エネルギー センター新 営・自家発 電装置新設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺溝		主な遺物		特記事項
鹿田遺跡12- 27次調査地点	その他	弥生時代		溝2条				
	田畑	古墳時代		井戸1基、土坑12基、溝 16条、高まり1か所、土 器だまり1か所		土師器・石器		
	田畑	古代		溝9条、耕作痕		土師器・須恵器		
	集落	中世		総柱建物1棟、柱穴列2 列、ピット229基、井戸4 基、土坑3基、溝15条		土師器・須恵器・木器		
	田畑	近世		土坑21基、耕作痕		陶磁器・木器・金属器		

2021年3月26日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第37冊

鹿田遺跡15

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市北区津高中3丁目1番1号
(086) 251-7290印刷 西尾総合印刷株式会社
岡山市北区津高651
(086) 254-1111代